

落合II遺跡・平塚遺跡 三本木II遺跡・三本木III遺跡

—群馬県人工飼料センター建設事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1996

群馬県安中市教育委員会

落合II遺跡・平塚遺跡 三本木II遺跡・三本木III遺跡

—群馬県人工飼料センター建設事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1996

群馬県安中市教育委員会



三本木II遺跡遠景

序

安中市はいにしえより東山道・中山道が通り、交通の要衝として発展してきた田園都市です。西には浅間山・妙義山を望み、碓氷川の流れも昔より変わることなく大地を潤しています。今回調査を実施した落合II遺跡・三本木II遺跡・平塚遺跡は、碓氷川の南岸に広がる横野台地の上に存在しています。現在、この台地はこんにゃく・ゴボウの生産が盛んに行われています。また、一時代前は一面桑畠が広がる西毛地域でも有数の養蚕地帯がありました。

今回の発掘調査は群馬県が行う「シルクスクエア事業」の一環として建設された県営人工飼料センターに伴うものです。この施設は近代化された養蚕を行うためのもので、広大な桑園が建設されました。緑豊かな桑畠が一面に広がる様は、往時をしのぶものであります。

今回の調査では、旧石器時代から江戸時代に至るまでの多くの遺跡の存在が明らかになりました。特に、古墳時代に築かれた平塚1号墳は、天明の噴火の軽石で埋没した畠の下から発見されましたが、比較的遺存状態も良く、鷲宮地区の古代史の解明に大いに役立つものです。また、三本木II遺跡では、縄文時代前期の集落も発見されました。ほぼ同時期の集落は、隣接する中野谷地区でも多数確認されており、縄文人の生活様式を解明するための重要な資料を私たちに提供してくれました。

しかし、残念ながら今回発掘調査された貴重な遺跡は、記録として後世に伝えることしかできません。この報告書が少しでもその責を果たすことができれば幸いです。また、調査資料は機会を得て郷土の歴史の生の資料として、有効に活用して行く所存であります。

なお、発掘調査にご協力いただきました地元の皆さまや、文化財保護の最前線で発掘調査に従事していただいた方々には厚く御礼申し上げます。

平成8年3月

安中市教育委員会

教育長 山 中 誠 次

例　　言

- 1 本書は群馬県農政部蚕糸課が実施した群馬県人工飼料センター建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査を実施した遺跡は以下の4遺跡である。
 - 落合II遺跡（略称G-23A・G-23C低地）
 - 平塚遺跡（G-23E・F）
 - 三本木II遺跡（G-23B・G-23C台地）
 - 三本木III遺跡（G-23D）
- 3 試掘調査は県費により行い、本調査及び遺物整理は県農政部蚕糸課からの委託金により行った。
- 4 試掘調査は平成6年5月23日～5月27日（一次調査）、同年7月18日～7月26日（二次調査）に実施し、本調査は同年10月3日～12月9日までの間に実施した。また、遺物整理は同年12月～平成8年3月までの間、断続的に実施した。
- 5 試掘調査は県教育委員会と安中市教育委員会が行い、本調査は市教育委員会直営事業で行った。調査担当者及は以下のとおりである。

試掘調査（一次）	群馬県教育委員会文化財保護課	主幹兼専門員	佐藤明人
試掘調査（二次）	群馬県教育委員会文化財保護課	主幹兼専門員	佐藤明人
	安中市教育委員会社会教育課	主　　任	大工原　豊
本調査	同	同	調　　査　員　林　克彦

（青山学院大学大学院博士課程）
- 6 遺物整理は大工原、林、金井京子が中心となって行い、大工原がこれを統括した。
- 7 繩文土器の分類・分析については、関根慎二（群馬県埋蔵文化財調査事業団）氏に指導いただいた。
- 8 繩文時代石器及び古墳の石材鑑定及び分析は、磯貝基一（市史編さん調査委員）氏に依頼して行った。また、テフラ分析及び植物珪酸体分析は（株）古環境研究所に委託して実施した。
- 9 本書の編集は大工原が行った。本文の執筆は大工原のほか、林、金井、関根、磯貝、早田勉（古環境研究所）、杉山（同）、金原正子（同）が行い、文末に執筆者名を記した。
- 10 遺構平面図の作成は大工原、林、金井、伊田百合子、佐藤佐由里、下マス江、白石純子、筑井美佐子が行った。土層断面図作成は上記のほか清水正、田中利策、須藤ダイ、湯川光子が行った。また、土層断面図作成用ビニールの写真撮影は、たつみ写真スタジオに委託して行った。
- 11 遺構図・遺物実測図の実測・トレースは大工原、林、金井、佐藤（佐）、佐藤里津子、白石、平出紀子が行ない、採拓は田中が行った。また、土器の接合・復元は湯川、清水が行ない、礫の計測は須藤・下が行った。
- 12 写真図版の構成・作成は大工原、林、佐藤（里）が行った。
- 13 遺構の写真撮影は大工原、林が行い、航空写真及び航空ビデオの撮影は（有）青高館が行った。遺物の写真撮影は、たつみ写真スタジオに委託して行った。
- 14 発掘調査における記録、出土遺物はすべて安中市教育委員会で保管している。

15 発掘調査及び遺物整理の間、下記の方々には御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。(敬称略)

麻生敏隆 荒木勇二 小野和之 加部二生 阪本英一 志村 哲 杉山秀宏 右島和夫 若狭 徹
磯部建設(株) 群馬県農業公社

16 調査組織は以下のとおりである。

安中市教育委員会事務局

教育部長 真下 仁
社会教育課長 多胡泰宏
文化財係長 杉山 弘
主任 藤巻正勝
主任 大工原 豊(担当)
主事 千田茂雄
同 深町 真

発掘調査・遺物整理従事者

秋山広吉 伊田百合子 金井京子 佐藤佐由里 清水 正 下マス江 白石純子
須藤ダイ 多胡 静 多胡光子 多胡好江 田島かつ子 田島せい子 田島元治
田中利策 筑井美佐子 古立 京 平出紀子 湯川光子 和田宏子

凡 例

1 遺構実測図は1/80を基本とし、炉址・カマド址等は1/40とした。遺跡全体図は1/200とした。

2 遺物実測図の縮尺は次のとおりである。

土 器：1/4 鉄製品：1/2

小形石器：2/3 中形石器：1/3 大形石器：1/6

3 石器実測図中の記号は石材の略号であり、略号と石材の対応関係は次のとおりである。

Ob：黒曜石 Ch：チャート Sh：頁岩(泥岩を含む) BAn：黒色安山岩・緻密質安山岩

An：安山岩 SS：砂岩(主として牛伏砂岩) Sc：結晶片岩類 GrR：緑色岩類

4 石器の実測図では打製石器に観察される使用痕(刃部磨耗痕・装着痕)を斜線により示した。また、磨石・凹石・石皿では、使用による磨耗部分を白抜きで示し、自然面を点描で示している。凹の部分の表現は切り合い関係により区別し、磨耗→凹：実線、凹→磨耗：破線で示した。

また、スクレイパー等の調整部位には実線を付し、調整加工の方法は次の記号で示した。なお、主剝離面の打点が明確な場合には▼により位置を示した。

P：押圧剝離的な調整加工 P+D：直接打撃と押圧剝離を併用した調整加工

D：直接打撃による調整加工 M：使用による連続した微細剝離(マイクロフレイキング)

目 次

口 紋	(2) 古墳時代.....	16
序 言	C区低地.....	16
例 言	(1) 繩文時代.....	16
凡 例	(2) 平安時代.....	16
目 次	2 三本木II遺跡	20
	B区.....	20
I 調査の経緯.....	(1) 旧石器時代.....	20
1 調査に至る経過	(2) 繩文時代.....	20
2 調査の経過.....	C区.....	29
II 調査の方法.....	(1) 繩文時代.....	29
1 発掘調査の方法	(2) 平安時代.....	52
(1) 調査の方針と目的.....	3 三本木III遺跡	56
(2) 調査区・グリッドの設定.....	(1) 平安時代.....	56
(3) 遺構確認面.....	(2) 中世.....	65
(4) 遺構の調査方法・記録方法.....	(3) 近世.....	66
2 遺物整理の方法	4 平塚遺跡	67
(1) 遺物整理の方針と目的.....	(1) 繩文時代.....	67
(2) 遺構の記載・分析の方法.....	(2) 古墳時代.....	67
(3) 遺物の記載・分析の方法.....	(3) 近世.....	81
III 遺跡の地理的・歴史的環境.....	V 成果と問題点	82
1 地理的環境.....	1 各遺跡の様相	82
2 歴史的環境.....	VI 自然科学的分析	85
3 層序.....	1 テフラ分析.....	85
IV 遺跡各説.....	2 植物珪酸体分析	87
1 落合II遺跡.....	3 花粉分析.....	93
A区.....	4 古墳構築石材について	94
(1) 繩文時代.....	図 版	1~42

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

平成6年4月、群馬県農政部蚕糸課及び県教育委員会文化財保護課（以下県文化財保護課）から、安中市鷺宮地内に県人工飼料センター建設に関する照会が市教育委員会にあった。建設予定地内には遺跡が存在していることが確認されており、事業の実施により影響を受ける部分が存在する可能性が高いため、試掘調査を実施する必要が生じた。

そして、管理用施設の建設予定地部分については、平成6年5月に県文化財保護課が試掘調査（一次調査）を実施することになった。一次調査の結果、当初の予定地部分からは縄文時代前期の住居址が確認された。そこで、さらに当初予定地の南部と東部についても試掘調査を実施し、最終的に遺跡の範囲外である当初予定地の東部へ建設場所を変更し、遺跡を回避することになった。

また、建設用地の外周道路部分については、市教育委員会と県文化財保護課が合同で、同年7月に試掘調査（二次）を実施することになった。その結果、6カ所に遺跡が存在することが確認された。特に、南部（平塚遺跡）では、遺存状況の良好な古墳が存在しているため、道路の迂回により回避することを検討したが、実現は困難であることが明らかとなった。そこで、この古墳を含め試掘調査により遺跡の存在が明らかとなった部分については、本調査を実施し、記録保存の措置を講ずることになった。

（大工原 豊）

2 調査の経過

本調査は、平成7年10月3日から同年12月9日までの延べ48日間実施した。調査は原則として落合II遺跡、三本木II遺跡、平塚遺跡、三本木III遺跡の順に実施した。秋季から冬季にかけての調査であったため、天候に恵まれ順調に調査は進行した。平塚遺跡と落合II遺跡では、遺構面が2面存在したため、比較的長い期間の調査となった。

なお、調査期間中、三本木II遺跡B区でナイフ形石器が表面採集されたため、12月8日～9日には、落合II遺跡と三本木遺跡でVI層(As-YP)下部からVIIIb層(As-Op1)上部にかけて、旧石器時代の遺構・遺物の有無を確認する試掘調査を実施した。しかし、遺物は検出されず調査は予定どおり終了した。

調査の日程は次のとおりである。

落合II遺跡	平成7年10月3日～11月4日
平塚遺跡	同 10月19日～12月9日
三本木II遺跡	同 10月7日～12月2日
三本木III遺跡	同 10月13日～12月9日

（大工原 豊）

II 調査の方法

1 発掘調査の方法

(1) 調査の方針と目的

今回の調査は道路部分が中心であるが、それ以外にも工事により影響を被る可能性のある部分についても調査の対象区域とした。平塚遺跡の場合、浅間A軽石が人為的に集められた場所が古墳（K—1号墳）の周囲に広がっており、この直下に近世の畠址が存在することが、確認されていたため、畠址の遺存状態の良好な部分を含めた。また、古墳は道路の建設により主体部が消滅してしまい、周溝のみが残っても遺跡としての文化財的意味が失われるため、古墳全体を調査範囲とすることにした。そして、築造時の古墳の状態の復元を重点としつつ、現在に至るまでの変遷過程（歴史性）の把握も目的とした。ただし、古墳群全体の様相については、調査区が狭いため把握することはできなかった。

また、集落遺跡では全体像を把握するには調査区域が狭く、検出された遺構のみで集落の景観を復元することはできない。したがって、住居址などの遺構単位で、内包する諸属性をデータ化し、記録することを重点に置いた。また、可能な場合には遺構の性格を把握する必要から適宜調査区を拡張した。

(2) 調査区・グリッドの設定

道路部分が中心であるため、各遺跡とも非常に細長い調査区となった。グリッドの軸は調査区に平行になるように設定し、道路の巾杭を基準とした。したがって、グリッドは遺跡ごとに独立した設定となった。落合II遺跡B区では、「く」の字に調査区が屈曲するため、グリッドの軸を中央部で変更した。

グリッドは従来より本市で採用している単位・呼称を踏襲した。すなわち、4 m × 4 mを基本単位とし、東西方向を算用数字、南北方向をアルファベットで呼称することにした。なお、今回の調査では道路巾杭を基準としたため、国家座標との位置関係は確認していない。

(3) 遺構確認面

本遺跡群の基本層序は、中野谷地区遺跡群で確認されている横野台地の基本的な土層堆積状態に準拠している。したがって、各時期の遺構確認面はこれまでと同様のものであると判断された。したがって、近世はI b層（As—A）直下、古墳時代～平安時代はIII層下部からIV a層上面、縄文時代はIV層中位とした。なお、I b層～IV層が欠落する三本木II遺跡B区・C区西斜面ではV層が確認面となった。

遺構確認面が2面存在する三本木II遺跡と平塚遺跡では、上層の遺構面の調査終了後、バックホーで再度掘削し、下部の遺構を確認した。

(4) 遺構の調査方法・記録方法

各遺跡における遺構の調査方法は第1表のとおりである。この方法は、中野谷地区遺跡群の調査経験から導入されたものである。中野谷松原遺跡の調査（平成3年度）により、特に大規模な遺跡での有効性が確認された。ここでは紙面の都合、上個々の方法については説明しないので、詳細については『中野谷地区遺跡群』（1994年）を参照されたい。

なお、この調査方法はそれ以降の遺跡の調査において、適宜改善が行われている。今回の調査では、遺物の取り逃しを防止するため、新たに電動フリイを導入することにした。これにより、調査精度の均質化が保証されることになり、古墳主体部の調査である程度成果を上げることができた。（大工原 豊）

遺構 作業工程	遺構	土坑・ピット	集石土坑	古 墳			溝	包含層
				墳丘・盛土	周 溝	主 体 部		
グリッド杭設置	直営（光波測距儀）							
表土掘削・除去	バックホー	バックホー	バックホー	人力	バックホー	人力	バックホー	バックホー
遺構確認	ショレン	ショレン	ショレン	一	ショレン	一	ショレン	ショレン
遺構精査・掘削	移植ゴテ ねじり鎌 竹箆	移植ゴテ ねじり鎌 竹箆	移植ゴテ ねじり鎌 竹箆	バックホー ショレン ねじり鎌	バックホー ショレン ねじり鎌	移植ゴテ ねじり鎌 竹箆	移植ゴテ ねじり鎌 竹箆	一
遺物取り上げ法	分層16分割法	一括 一部アナログ	一括	分層8分割法	分層8分割法	分層4分割法 下層：アナログ	2m毎に分 割	グリッド
遺構平面図	ビデオ利用方式 遣り方 一部ビニール転 写法	ビデオ利用方 式 ビニール転写 法	ビデオ利用方 式	ビデオ利用方 式	ビデオ利用方 式 垂直写真 ビニール転写法	ビデオ利用 方式	ビデオ利用 方式	ビデオ利用 方式
遺物分布図	デジタル方式	なし	アナログ方式 ビニール転写 法	なし	アナログ方式 航空ビデオ	アナログ方式 光波測距儀	なし	なし
土層断面図	ビニール転写法	ビニール転 写法	ビニール転写 法	通常の方法	ビニール転写 法	ビニール転写法 通常の方法	ビニール転 写法	ビニール転 写法
遺構断面図	図面起こし	ビニール転 写法 (大形真弧)	ビニール転写 法	通常の方法	一	ビニール転写法 (大形真弧) 通常の方法	一	一
側面図	—	—	—	ビデオ利用方式 長焦点写真利用	ビニール転写 法	ビニール転写法 長焦点写真利用	—	—
遺構写真	地上写真	リバーサル（35mm, 35mmステレオ, 6×7） モノクロ（35mm・6×7）						
	航空写真	リバーサル（35mm） モノクロ（35mm・6×4.5）						

第1表 作業工程別調査方法一覧表

2 遺物整理の方法

(1) 遺物整理の方針と目的

今回の発掘調査で得た資料は、遺跡全体像を復元するためには断片的で不十分なものである。したがって、分析の対象は住居址や古墳といった遺構単位となった。こうした場合、各時期の遺構とも他遺跡との比較対比が可能な客観的数据を抽出する必要がある。そこで、遺物整理にあたっては、この地域で同じ方法で分析が行われている中野谷地区遺跡群に準拠して、データの抽出を行った。また、分析及び解釈は、今次調査では不十分と判断されるため、データの提示を主眼とした。

(2) 遺構の記載の方法

住居址は平面図・土層断面図・遺構断面図・遺物分布図・写真・調査時の所見等を総合的に判断し、図版を作成した。住居址に重複・同一場所建て替えがある場合、土層堆積状態から新旧関係の確認に努めた。また、主柱穴は調査時に配列を検討して確定に努めたが、はっきりしない場合は遺物整理の段階で、柱穴の深さ・位置を検討して推定した。時期の決定は炉体土器・竈出土土器・床直遺物・最下層遺物を総合的に検討して決定した。

本書には、住居址平面図・同遺物分布図（デジタル方式）・同土層断面図・同遺構断面図・炉址（竈）土層断面図・土層観察表・住居址観察表を掲載した。なお、主要な遺物については、分布図中に出土位置を図示した。

また、豊穴状遺構（小豊穴）・土坑・集石土坑・ピット群・溝については住居址に準じ、平面図・土層（遺構）断面図・土層観察表を掲載した。

古墳は構築時の状態を理解することと、構築から現在に至るまでの変遷過程が明らかになることを念頭において分析を行った。時期の決定は主体部出土の遺物と、構築方法から判断して推定した。また、主体部内の遺物分布状態を把握することに重点を置き、埋葬時の遺体の位置・副葬品の有無の解明に努めた。本書では浅間A軽石除去状態での平面図・側面図と、構築時の古墳平面図・墳丘断面図・周溝土層断面図・主要遺物分布図及び、主体部の各種平面図・側面図・断面図と遺物分布図を掲載した。

(3) 遺物の記載・分析の方法

[縄文土器の分析・記載方法] 土器群の分析については、型式学的方法により分類を行った。図示した土器は各層ごとに口縁部の残存するもの・時期的特徴を有するものを選択的に掲載した。また、出土状況からのクロスチェックの機能を果たすため、出土層位・出土位置を明示した。掲載資料については観察表を作成した。

なお、実測には効率化をはかるため、従来からの方法に加え、レーザーセンサーを利用した断面図化機（T & F社製クロシス）を新たに導入した。

[石器の分析・記載方法] 石器は土器に比べて形態変化が緩慢で、個体差も大きいことから、少数の石器により型式学的特徴を把握することは困難である。今回の報告資料はいずれの器種も少数であるので、

型式学的特徴の把握には限界がある。したがって、ここでは『中野谷地区遺跡群』の分類基準に基づいて、住居址ごとの種別組成・器種組成・石材組成と、各器種の実測図を提示するにとどめた。

実測図には石器製作段階の情報と、使用段階の情報を合わせて示した。そして、石器の石材が識別できるように個々の図には石材の略号を付した。また、共伴関係・「場」の機能を確認するため、出土位置・層位も付した。石器実測はデジタルコピー機（RICOH MF150）を利用し、効率化をはかった。図示した資料は狭義の石器の大部分であるが、一部図示していないものもある。

[土師器・須恵器の分析・記載方法] 土師器・須恵器は、原則として坂口・三浦編年（坂口・三浦1986）により時期の決定を行った。また、遺物の共伴関係についての検討も併せて行った。実測には縄文土器同様、従来からの方法に加え、レーザーセンサーを利用した断面図化機を用いた。図示した遺物は残存率の高い資料を中心に選択したものであり、図示可能遺物の全点ではない。

[鉄製品の分析・記載方法] 今回の調査により検出された鉄製品の大部分は古墳出土の釘であったが、遺存状態の良好な資料を中心に選択して掲載した。また、それ以外の資料については全点法量を計測し、統計的分析を行った。なお、今回は鉄の成分分析は実施していない。

(大工原 豊)

III 遺跡の地理的・歴史的環境

1 地理的環境

安中市は関東平野の周縁部である群馬県西部（西毛地域）に位置する。碓氷峠付近を水源とする碓氷川が西から東へ流れ、市域を南北に分断する。また、碓氷川の北側にはこれと並行して九十九川が流れ、安中市東部で碓氷川に合流する。これらの河川流域には河岸段丘が発達し、下位段丘（磯部地区）、中位段丘（原市・安中地区）、上位段丘（東横野地区）が存在する。また、市域の北部にあたる後閑・秋間地区は丘陵地帯であり、後閑川・秋間川により開析された谷地形となる。

本遺跡群の存在するは鷺宮地区は碓氷川の南側の上位段丘上に位置する。この場所は上位段丘の中でもなだらかな台地が広範囲に広がっており「横野台地」と呼称される。横野台地の中心は中野谷地区であり、鷺宮地区はその東に隣接する。横野台地と下位段丘面との間に急峻な段丘崖線が存在し、崖線下を柳瀬川が東流する。また、本遺跡群の北の位置には、磯部城山・石尊山といった丘陵が存在し、横野台地の中では特異な地形を呈する。横野台地の南側にも崖線が存在し、富岡市と境界をなす。これより南は星川（鏑川支流）により浸食された険しい峡谷地形が展開する（第1図）。

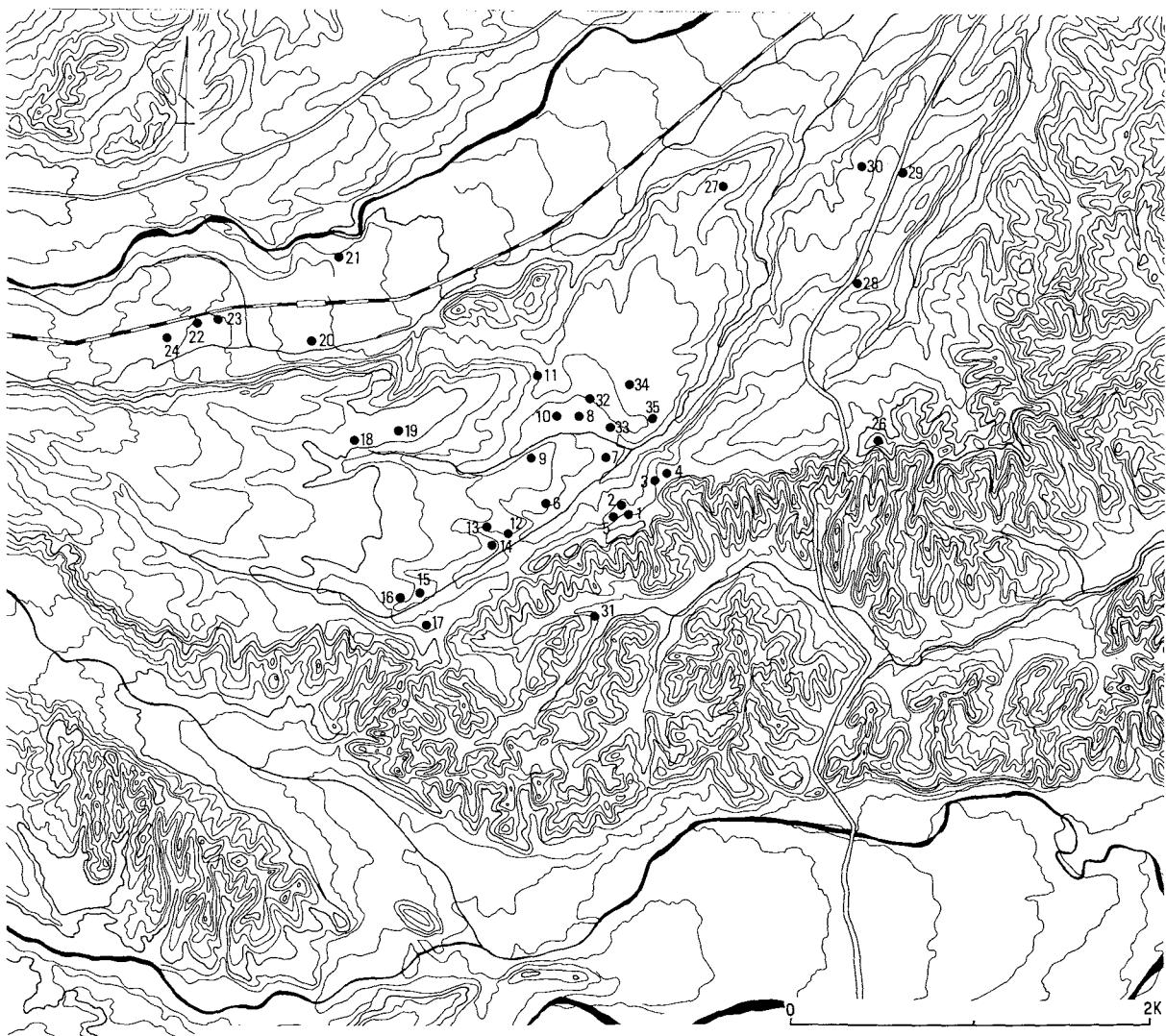
横野台地内を詳しくみると、南側に猫沢川が流れ、これに注ぎ込む多くの小河川により台地は浸食され、南北に細長い舌状台地が連続する地形をなす。また、猫沢川の南側には丘陵性の台地が存在しており、これが碓氷川と鏑川の分水嶺となる。本遺跡群は、通称天神川と呼称される小河川が猫沢川に合流する地点の東側に存在する比較的広い台地に存在する（第2図）。

次に、各遺跡の立地を詳細に観察する（付図1）。落合II遺跡は天神川に沿いに形成された沖積地部分と、南東に隣接する台地にかけての部分にあたる。標高は223～225mであり、沖積地との比高は1～3mである。なお、落合遺跡（昭和63年度調査）は西側に隣接しており、落合II遺跡とは同一の遺跡である。

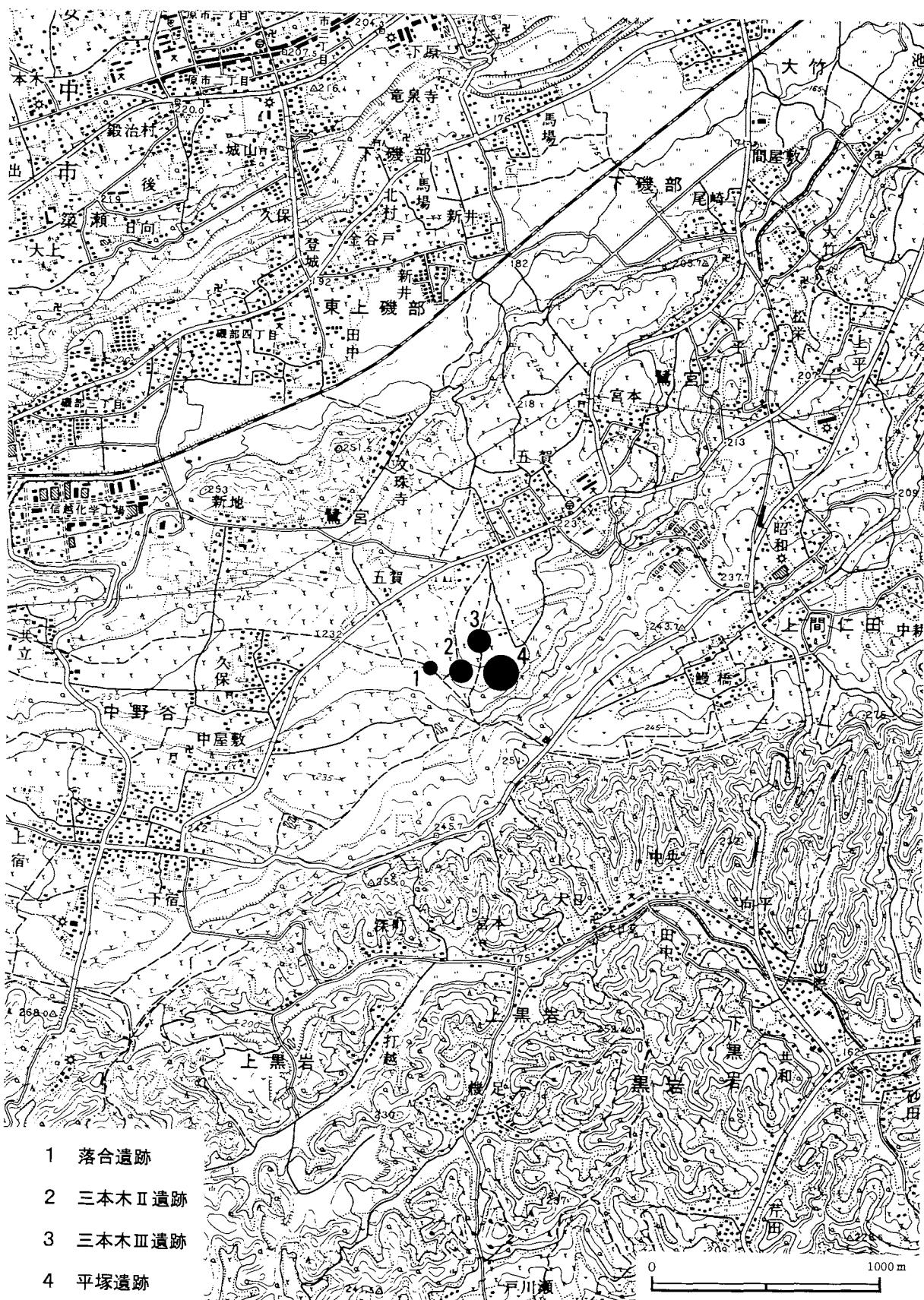
また、三本木II遺跡は落合II遺跡の東側に存在する南北に延びる「馬の背」状の台地の稜線上に位置する。本遺跡群では最高所にあたり、標高は229～232mである。沖積地との比高は7～10mである。三本木遺跡（昭和63年度調査）は本遺跡の北西約200～300mである。

三本木III遺跡は三本木II遺跡の北東約150～200mの場所に位置する。微地形をみると、台地の中央に存在する小支谷の北側に位置する。この小支谷は現在は埋没谷となっているが、遺跡が形成された時点では湧水点が存在していたとみられる。標高は225～228mである。

平塚遺跡は台地の南縁部に位置し、標高は228～229mである。遺跡の南側には猫沢川により形成された沖積地が存在し、比高は16mである。



第1図 本遺跡と周辺関連遺跡



第2図 遺跡群位置図 (1 : 25,000 松井田・富岡)

2 歴史的環境

本遺跡群は行政区界からは鷺宮地区にあたるが、中野谷地区に隣接した場所に位置し、立地環境もほぼ同一である。したがって、これまでに大規模な調査が実施されてきた中野谷地区遺跡群の一部として捉えることが可能である。

中野谷地区遺跡群の歴史的環境については、すでに『中野谷地区遺跡群』で詳述している。ここでは本遺跡と関連する時期の遺跡について概観する(第1図・表1)。本遺跡群では旧石器時代、縄文時代(前期・中期)、弥生時代(中期)、古墳時代(終末)、奈良・平安時代、中世、近世の遺構・遺物が検出されている。

旧石器時代の遺跡は中野谷松原(AT下位)・注連引原II(槍先形尖頭器)・落合(荒屋型彫器)の各遺跡が存在する。いずれの遺跡も単独出土であり、これまでに明確な居住の痕跡は確認されていない。

縄文時代前期前半(関山～黒浜・有尾期)の遺跡としては、中原・東畑・落合原・下塚田・金井谷戸・下宿東・大下原・吉田原・細田・注連引原・注連引原II・中野谷松原・天神原の各遺跡が存在する。また、前期後半(諸磯a～諸磯c期)の遺跡としては、北東堤下・中野谷松原・下塚田・大下原・吉田原・注連引原II・金井谷戸・東畑・下宿東・細田の各遺跡が存在する。このように前期の遺跡はこの地域に集中しており、反復的に集団が居住する場所であったことが窺える。三本木II遺跡はこれらの遺跡の一つとして捉えることが可能である。

縄文時代中期の遺跡としては、大下原・注連引原II・落合・下塚田・北東堤下・東畑・下宿東・細田・和久田・東向原・天神原・中野谷松原・などの遺跡が存在する。これらの遺跡はいずれも小規模であり、後半期には少数の住居址が存在する集落遺跡が確認されているが、前半期では土坑が検出される程度で集落自体は確認されていない。

弥生時代中期前半の遺跡としては、注連引原・注連引原II・大下原・下原・落合・中原等の遺跡が存在する。このうち住居址が検出されている注連引原遺跡・同II遺跡は、この時期の活動拠点と考えられる。それ以外の遺跡は小規模であり、両遺跡に付随して形成された生業の場と推定される。

中野谷地区では、落合II遺跡・平塚遺跡と同様の終末期の古墳群が、いくつか存在することが明らかになっている。これらの古墳はすでに消滅しているものが多く、不明な部分が多い。中野谷古墳群は中野谷松原遺跡周辺に存在していた。このうち1基は発掘調査が実施され、終末期のものと推定される。また、東向原遺跡の南の丘陵上にも古墳群が存在していたが、現在は消滅している。また、金井谷戸遺跡南方の丘陵上(富岡市域)にも古墳群が存在する。これらの古墳群はいずれも埴輪を有しておらず、終末期古墳と推定される。今回報告する平塚遺跡もこうした小規模な古墳群の一つと考えられる。

また、この時期の集落遺跡としては、鷺宮地区に荒神平・吹上遺跡が存在する。また、磯部地区から大王寺地区にかけては新寺・大王寺遺跡群が存在する。これらの遺跡は継続的に営まれた大規模な集落であり、この地域の中核的存在である。

奈良・平安時代の遺跡としては、前時代から継続する荒神平・吹上遺跡と新寺・大王寺遺跡群が代表的な集落遺跡である。これ以外には北東堤下・大下原・細田・和久田の各遺跡で住居址が検出されている。また、この時期には「牧」の放牧施設と推定される大規模な溝による区画が、下塚田・中原・細田・注連引原IIで検出されており、非常に大規模な施設とみられている。

	遺跡名	旧	縄文					弥生 中後	古墳				奈良	平安	中世	近世
			草	早	前	中	後		前	中	後	終				
1	大下原			◎	△			○					△			
2	吉田原			◎									△			
3	注連引原			◎				◎								
4	注連引原II	*		○	*	△		◎					△			
5	下原							○								
6	中原			△	◎			*	△				?	◎		
7	落合原				△								◎	◎		
8	落合原*				*	*		*	*		△		◎	◎		
9	北下原			○								?	◎			
10	下塚田			△	*				△	△		△				
11	北東・堤下			○	△					○		○				
12	金井谷戸			◎	△											
13	東畠			○	△											
14	下宿東	*		○	△	○				○			?	◎		
15	細田			○	△					△	○		?	◎		
16	和久田			*	*					△			?	◎		
17	東向原			*	*								?	?		
18	天神原			○	○	○	○			○			○			
19	中野谷松原	△	*	○	○	○				○			?	?		
20	田中田・久保田									○				○		
21	塩ノ久保										○					
22	西裏・西新井			△	△					○			○	○		
23	諏訪辺					*								○	○	
24	松井田工業団地					○			○	○			○	○		
25	上人見					○										
26	経塚古墳								○							
27	荒神平・吹上			△	○	○		○	○	○	○		○	○		
28	道前久保			○	○	○						○	○	○		
29	藏畠									○	○					
30	諏訪ノ木							○								
31	上黒岩	◎														
*32	落合II			*	*						○					
*33	三本木II	*		○	△								○			
*34	三本木III												○		△	○
*35	平塚			*								○				○

第2表 周辺遺跡一覧表

そして、同時期では鍛冶工房址群が下塚田遺跡で確認されているほか、天神原遺跡でも工房址群の存在が明らかになっている。これらの遺跡は「牧」の管理に関連する遺跡と推定されている。

沖積低地部分では、落合遺跡・中原遺跡で溜井が検出されている。なお、プラントオパール分析により、浅間B軽石降下前にはほとんどの場所で稻作が行われていたことが確認されている。

このように古墳時代終末期から平安時代にかけての中野谷地区周辺は、「牧」の形成とこれに関連する遺跡が存在する特異な地域性を有している。

中世では中原遺跡で掘立柱建物址が検出されている程度である。また、荒神平・吹上遺跡でも三本木III遺跡と類似した溝が検出されている。

(大工原 豊)

3 層序

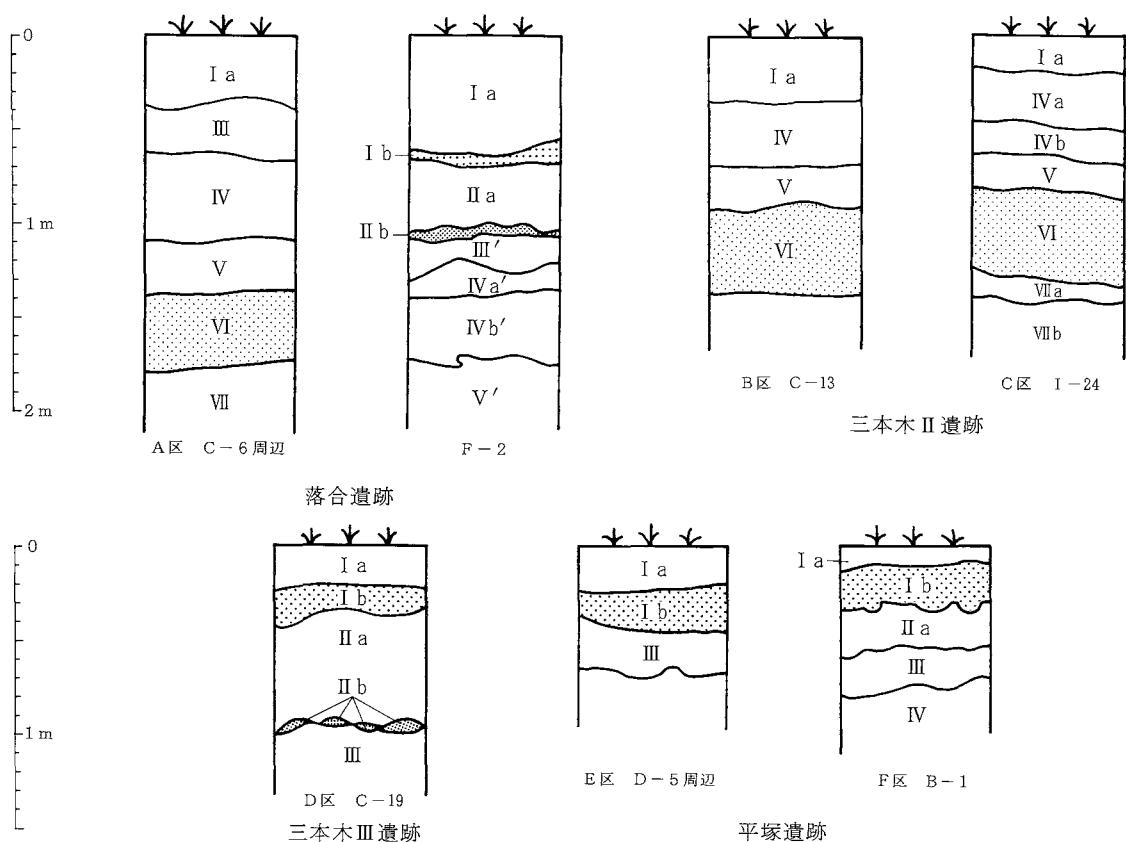
本遺跡群の基本層序は第3図のとおりであり、遺跡により土層堆積状態に若干の差異が認められる。落合II遺跡は台地部分と沖積低地に分かれるが、沖積低地部分では示準テフラである浅間A軽石(As-A:I b層)、浅間B軽石(As-B:II b層)とも純層で堆積していた。しかし、台地部分ではこれらのテフラは耕作等により攪乱を受けており、基本的には純層では存在していなかった。沖積低地部分における層序のうちIII'層以下の土層は水の影響を受けて、台地部分の土層とは色調が異なっているが、土質や示準テフラの位置は基本的には台地部分と同じである。

三本木II遺跡は台地の最高所から北西斜面にかけての部分であり、遺構確認面までの土層の堆積が薄い。表土層(I a層)の直下にはIV層ないしIV a層が堆積し、この間の層が欠落している場合が多い。特に、北西斜面ではこの傾向が顕著であった。縄文時代前期の遺構はIV層中位で確認される。また、この時期の遺構は、VI層(As-YP:浅間一板鼻黄色軽石・約1.3~1.4万年前)上部に位置する比較的硬い火山灰凝集層(As-YPの一部:通称スリッコ)、あるいはVI層を掘り抜いたVII a層上面を床面・底面とする傾向がある。

三本木III遺跡・平塚遺跡は横野台地での一般的な土層堆積状態を示していた。II b層(浅間B軽石)は古墳時代から平安時代の住居址・溝の覆土中では純層で認められるが、遺構のない場所では堆積が薄く、断続的に存在する。また、I b層(浅間A軽石)は人為的に集積された部分では純層で堆積しており、こうした場所では直下で近世の畑址が検出されている。

また、これまでIV a層を明確に区別していなかったが、本層はIV層に比べしまりがなく、IV層上部がソフト化したものと推定される。三本木II遺跡では縄文時代前期の住居址がIV a層により覆われていた。また、本遺跡群の南に位置する注連引原II遺跡では、本層が弥生時代中期初頭の住居址の壁面を構成していた。こうしたことから、本層は縄文時代前期以降に堆積した土層と推定される。

(大工原 豊)



第3図 基本層序柱状図

層名	色調	物					備考
		しまり	粘性	混RP	入RB	YP	
I a層	黒褐色土層	△	△			◎	
I b層	灰白色輕石層 I a < I b	×	×			◎	As-A純層
II a層	黒色土層 I b > II a	△	△			◎	
II b層	灰褐色土層 II a < II b	×	×			◎	As-B純層
III層	暗褐色土層 II a < III	△	○				
III'層	暗褐色土層 III' < II b	○	○				低地堆積
IV a層	暗褐色土層 VI a < IV	△	○	※		※	
IV層	暗褐色土層 III < IV	○	○	※		※	
IV a'層	暗褐色土層 VI a' < III'	○	○				低地堆積
IV b'層	暗褐色土層 VI b' < IV a'	○	○				低地堆積
V層	黄褐色粘質土層 VI < V	○	○	◎	○	※	
V'層	灰黃褐色土層 V' > IV b'	○	○				低地堆積
VI層	黄色輕石層 V < VI	×	×				YP純層
VII a層	明褐色粘質土層 VI < VII a	○	○				
VII b層	明褐色粘質土層 VII a = VII b	○	○				As-OP 1

第3表 基本土層説明

IV 遺 跡 各 説

1 落合II遺跡

A区

(1) 縄文時代

a 遺構

土坑 3 基と、陥穴 2 基が検出されている。

土坑 (第4図上段) D-1・3・4号土坑の3基が検出された。遺物は検出されておらず、時期・性格等詳細は不明であるが、D-2号陥穴付近に集中しており、関連性が推定される。

陥穴 (第4図中段) D-2号陥穴・D-5号陥穴の2基が検出された。平面形態は橢円形、断面形態は箱薬研状を呈し、両者ともほぼ同形態である。両者の距離は21mである。また、遺物は検出されておらず、細分時期は不明であるが、覆土の堆積状態からみて2基の陥穴は同時期のものである可能性が高い。

(大工原 豊)

b 遺物

低地部分より縄文前期の土器片と縄文中期のものと思われる土器片が数点検出されている。これらの遺物は遺構に伴うものではなく、台地部分から流れ込んだものと考えられる。

土器 (第4図1・2)

遺構に伴わず小破片が数点出土している。これらの土器は文様が磨滅していることと、小破片であるため、時期の特定は難しいが、胎土などから前期後半のものと推定される。

石器

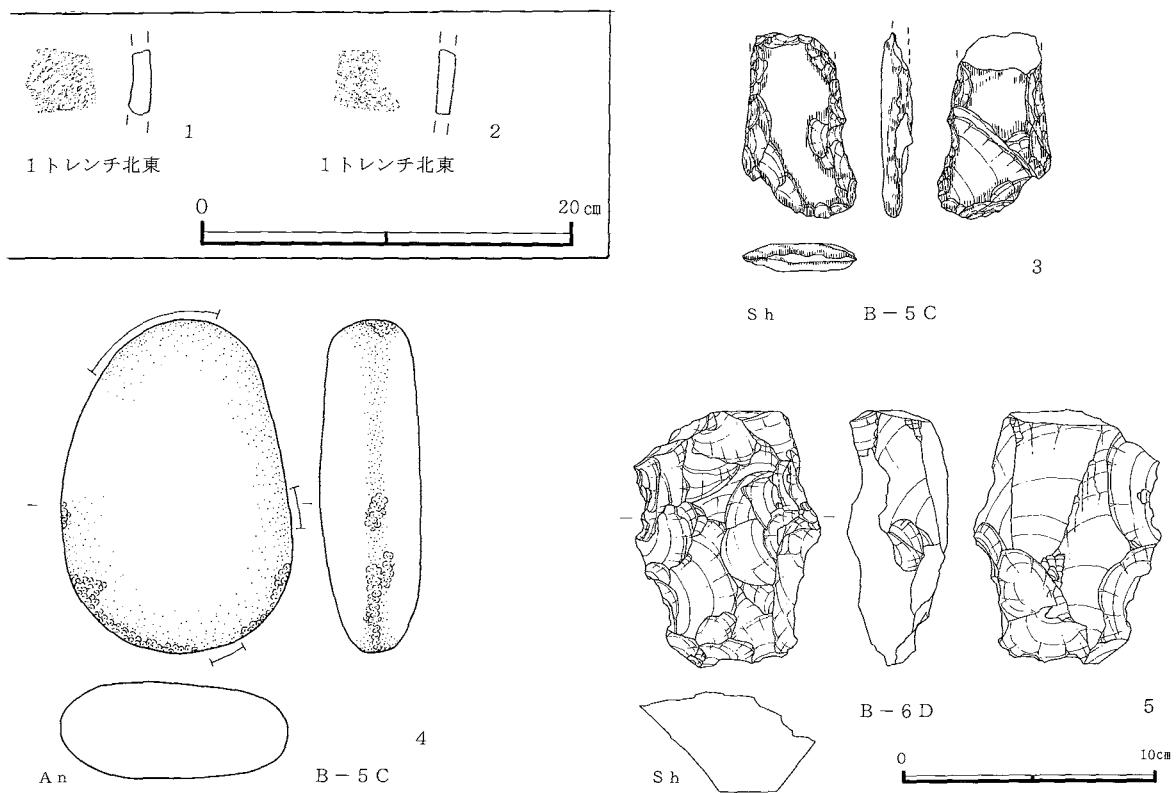
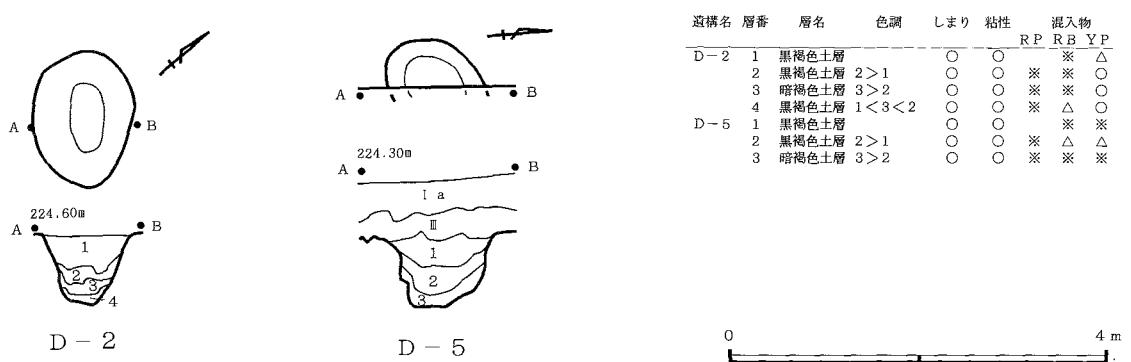
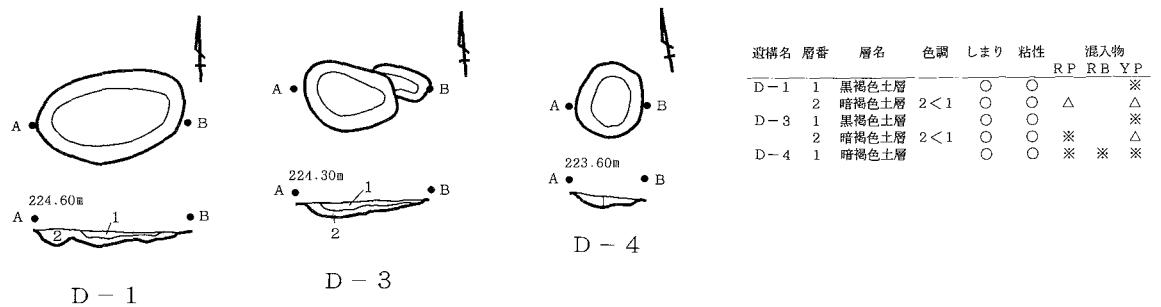
A区では4点出土している。内訳は剝片A類1、打製石斧1、石核B類1、磨石1である。いずれもB-5～B-6グリッドから検出されており、同時期のものである可能性がある。

打製石斧 (第4図3) II形態 (平面形: 短冊形～撥形・断面形: レンズ状) に分類されるものである。使用による刃部欠損及び磨耗痕が観察され、土掘具として用いられたものと判断される。

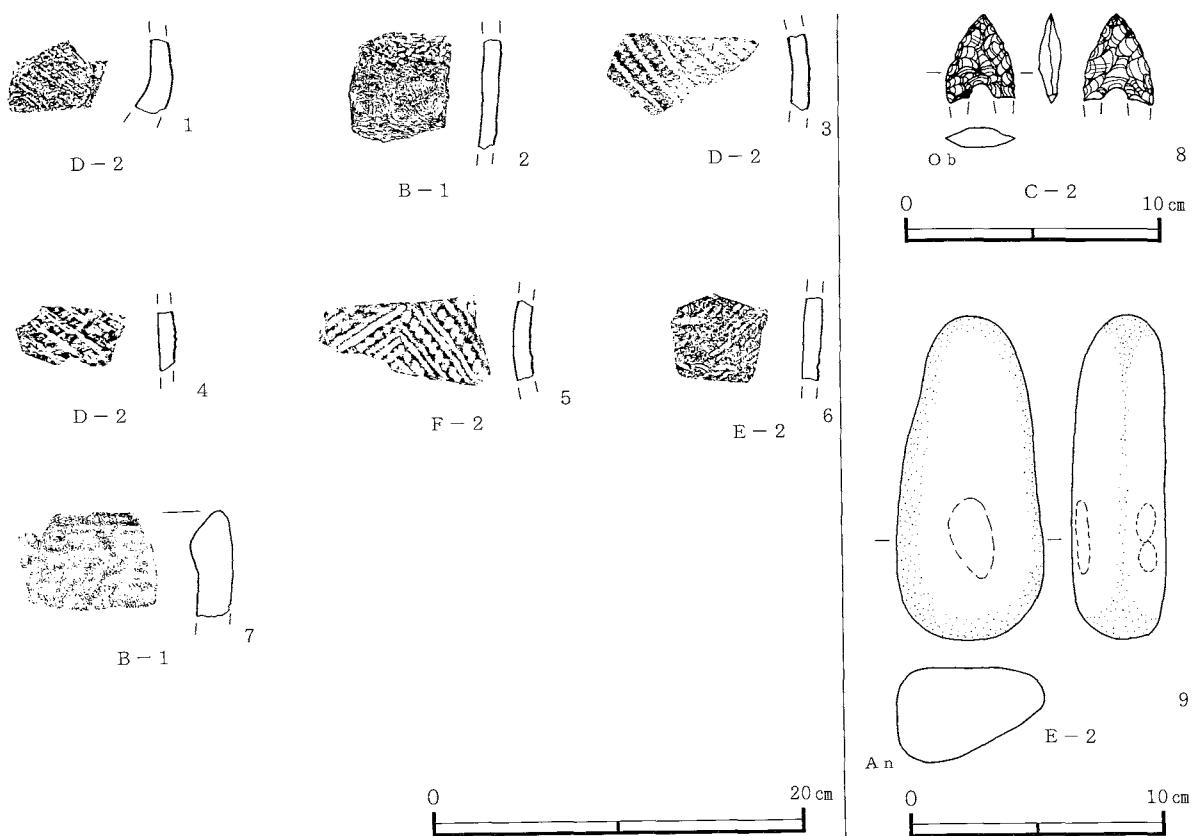
石核B類 (第4図5) 打面と作業面は交互に交代しながら、求心状剥離により剝片を作出している。目的剝片は幅広不定形剝片であり、スクレイパーB類の素材を供給していると考えられる。

磨石 (第4図4) II形態 (平面形: 橢円形) に分類される。側縁部には敲打痕が観察される。

(大工原 豊)



第4図 縄文時代の遺構・遺物実測図（A区）



第5図 縄文時代の遺物実測図（C区低地）

(2) 古墳時代

a 遺構

残存状態の悪い古墳 1 基が検出され、全体の 1 / 3 程度の調査を行った。

K—1号墳 (第 6 図・第 7 図) 調査区の隅に終末期のものと考えられる古墳の一部が検出された。すでに墳丘部分は削平されており、主体部の床石と周溝が部分的に検出されただけである。主体部の大部分は破壊されており、遺物は検出されていない。主体部は斜面下方、沖積地を望む方向に開口すると考えられる。周溝からは底部よりやや浮いた状態で 50cm 大の河原石が数点検出されているが、あるいは主体部に使用された石の可能性もある。周溝からも遺物は検出されていない。 (大工原 豊)

C 区低地

(1) 縄文時代

a 遺物

土器

本遺跡出土の縄文土器は、前期前葉の土器と前期終末、中期である。文様部部分の資料が少ないとから主として、状文原体によって型式を当てはめてみよう。

2 の土器文様が櫛状の工具による波状文を施文する事から関山 II 式土器に比定される。その他、1、3、4、の土器については、付加状縄文や異条斜縄文などを施文する事から 5 の関山 II 式土器と同様の時期と考えられる。6 については、縄文の施文状態から前期終末に、7 は口縁の断面形態から中期の所産と考えられる。 (関根慎二)

石器

C 区低地では 3 点出土しているのみである。内訳は石鏃 1 、剝片 B 類 1 、凹石 1 である。いずれも遺構には伴っていない。

石鏃 (第 5 図 8) I 形態 (凹基無茎石鏃) に分類される。両脚とも欠損している。黒曜石製である。

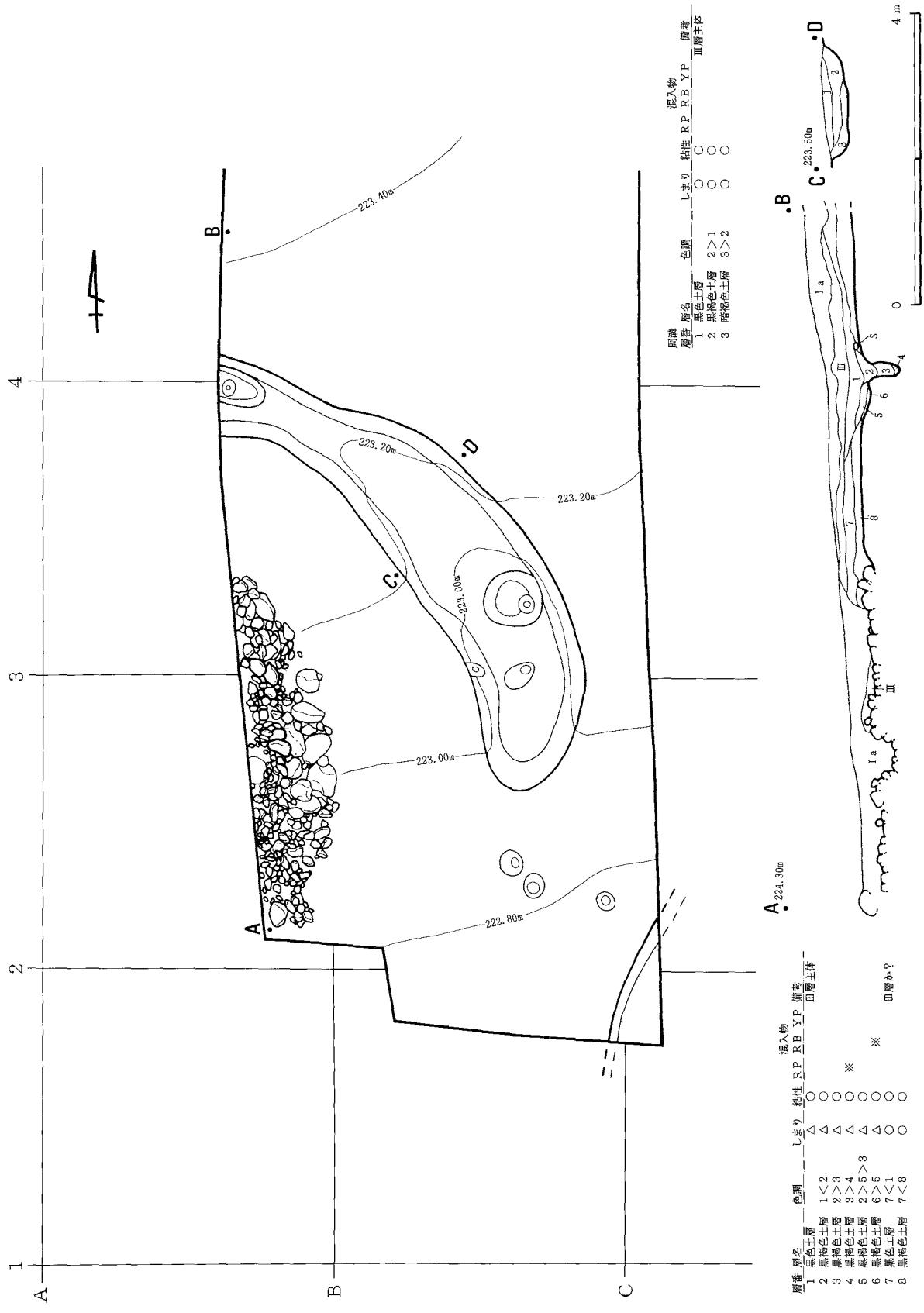
凹石 (第 5 図 9) V b 形態 (不定形・凹→磨) に分類される。安山岩製である。

(2) 平安時代

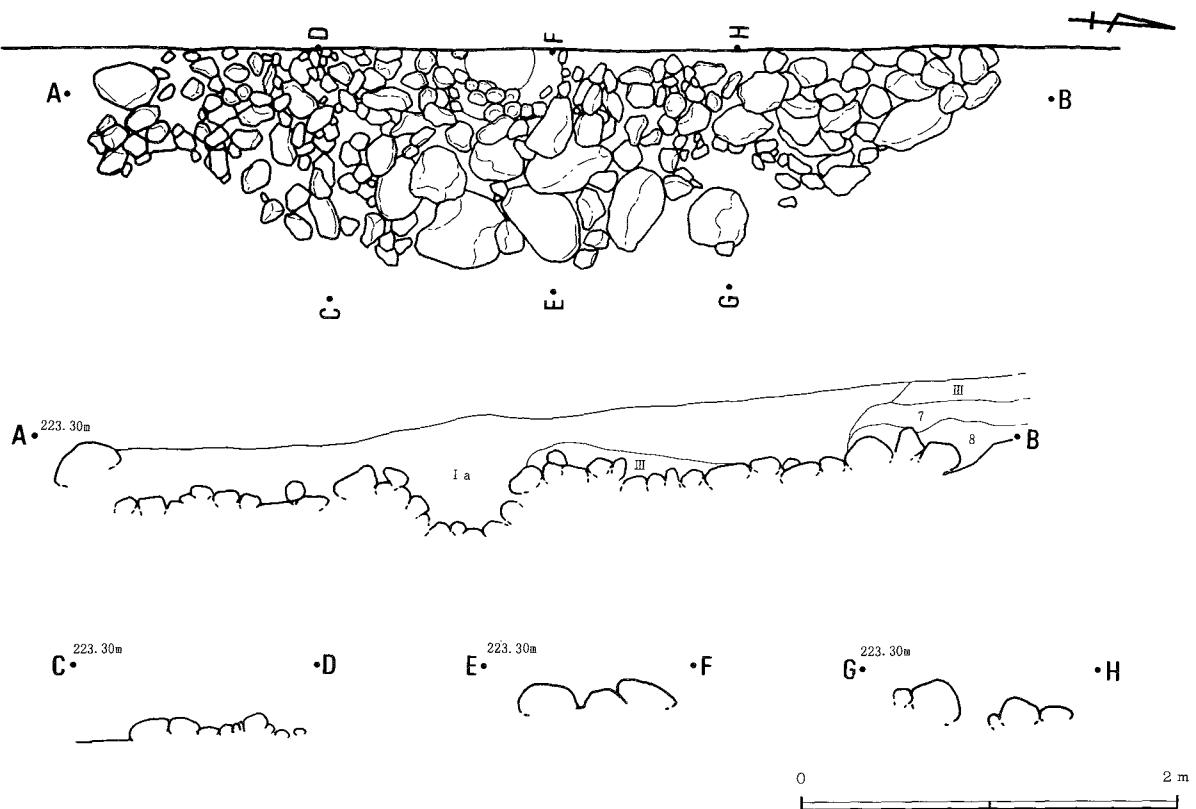
a 遺構

この時期の遺構としては、溝 2 条が検出されている。

溝 (第 8 図) 斜面地下部の低地に接する部分から平安時代のものと考えられる溝が 2 条検出されている。この溝は 2 条とも斜面に並行するように掘られており、あるいは沖積地までのびている可能性がある。M—1 号溝は途中で 1 度切れたように見えるが、これは遺構上部が削平されているため、本来は



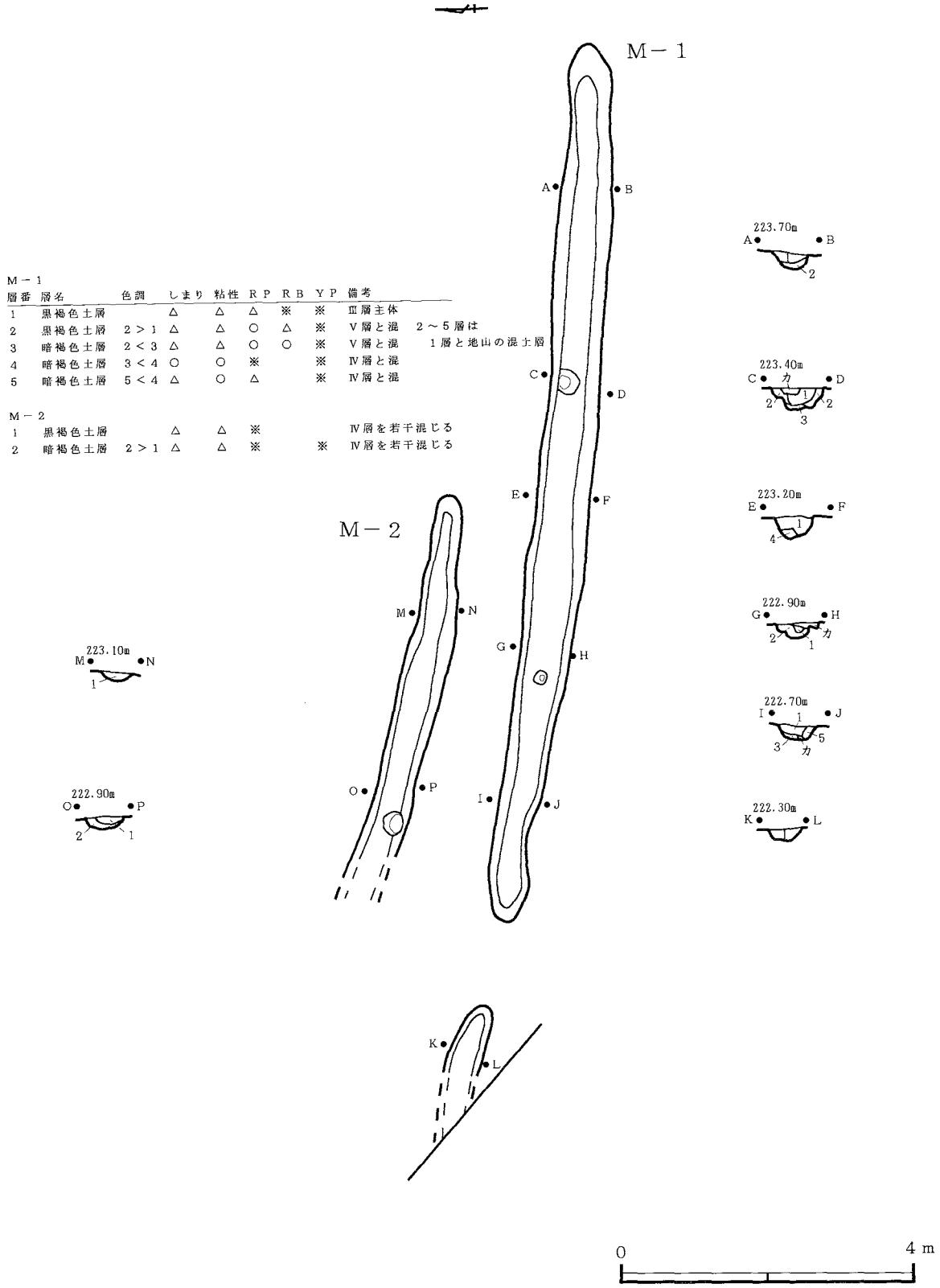
第6図 K-1号墳実測図



第7図 主体部実測図

つながっていたものと考えられる。部分的にしか検出されていないため、この遺構の性格を判断することは困難である。

(林 克彦)



第8図 M-1号溝・M-2号溝実測図

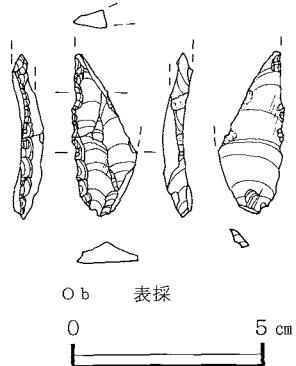
2 三本木II遺跡

B区

(1) 旧石器時代

a 遺物

ナイフ形石器 (第9図) B区北西部で表面採集されたものである。単剝離面打面の石刀を素材とする。打面を基部とし、表面左側縁部に調整が施される。先端部は欠損している。黒曜石製。この石器が出土した周辺にトレンチを設定し試掘を行ったが、これ以外に石器は検出されなかった。出土層位は不明であるが、形態的特徴から群馬編年II期後半(武藏野IV層上部相当)と推定される。



(2) 縄文時代

第9図 ナイフ形石器実測図

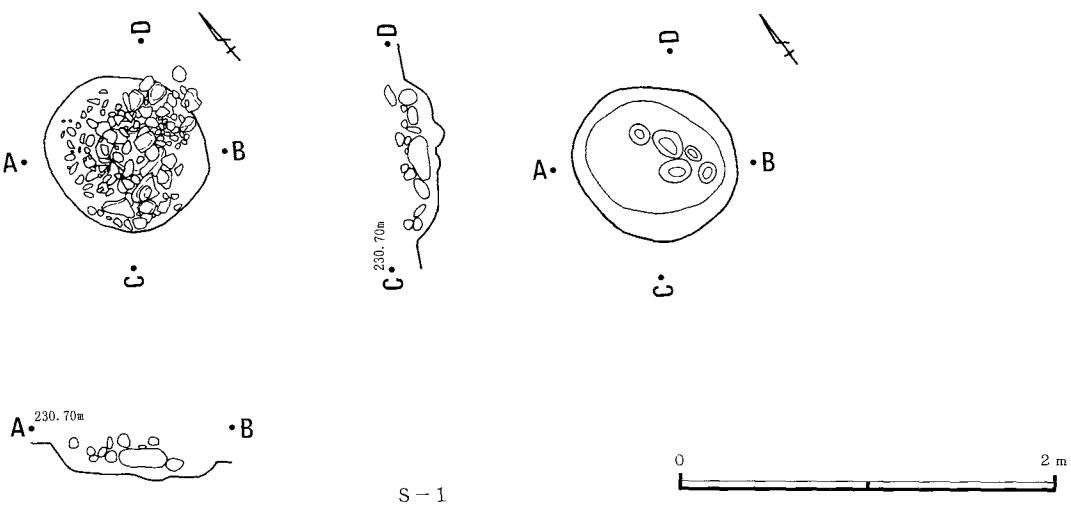
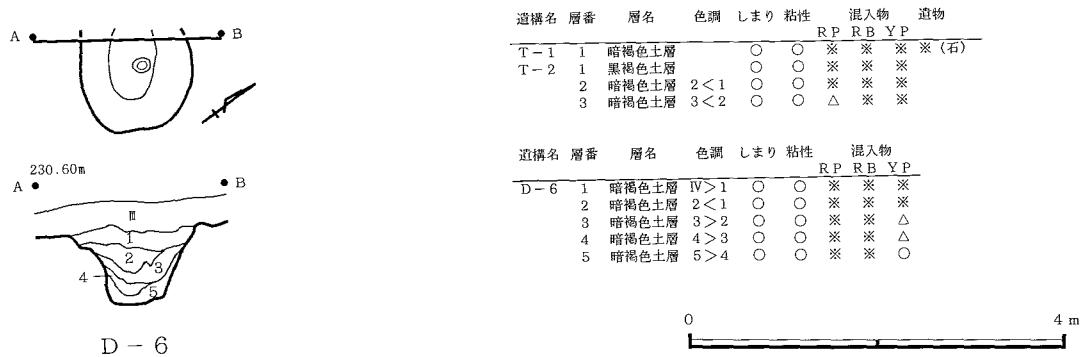
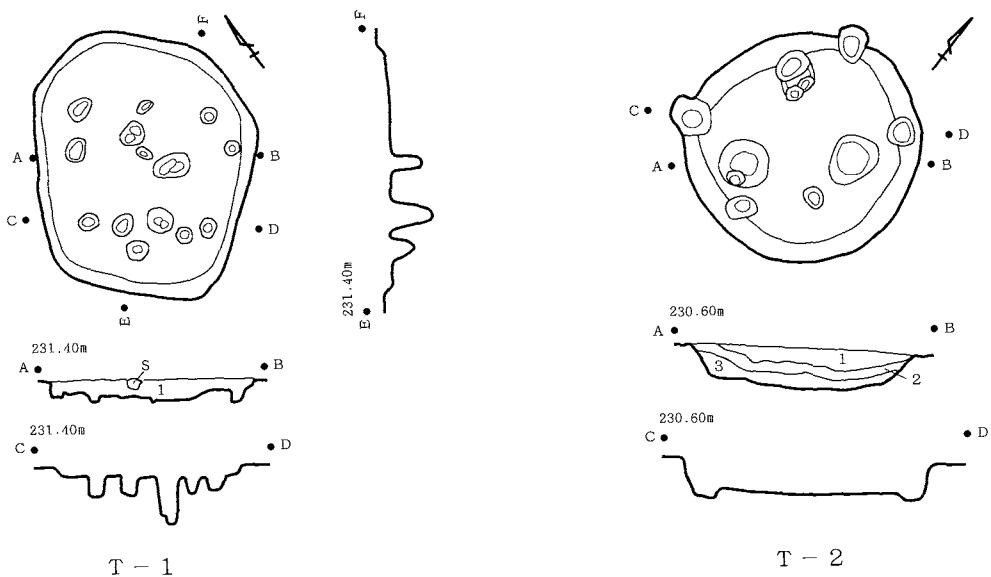
a 遺構

縄文時代の遺構としては、竪穴状遺構2基、陥穴1基、集石土坑1基、土坑16基検出されている。

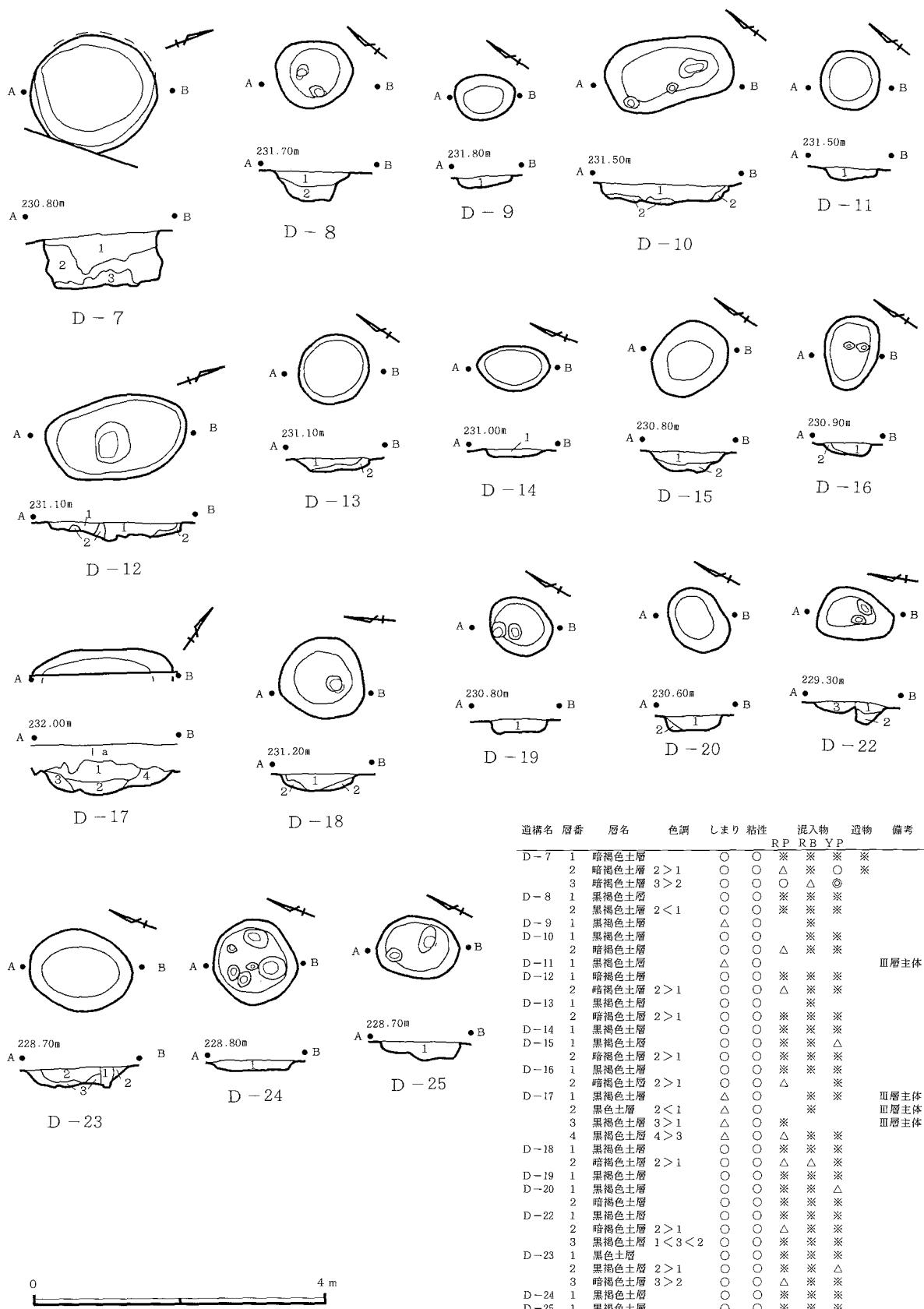
竪穴状遺構 (第10図) T-1・T-2の2基の竪穴状遺構が検出されている。いずれも径3m程度の竪穴である。T-1は掘り込みが比較的浅く、覆土からは礫が数点検出されている。ピットは比較的深く、しっかりした上屋の存在を推定させる。T-2は掘り込みは比較的深いが、検出されたピットは比較的浅く、しっかりとした柱穴とはならない。これらの竪穴状遺構からは時期の明確に解る遺物は検出されておらず、正確な時期決定はできないが、近接する大下原遺跡で基検出されている縄文時代前期の竪穴状遺構に近似しており、本遺跡の竪穴状遺構も前期のものである可能性が高い。ただし、これらの遺構が前期の集落のどのような位置に存在し、どのような機能を持っていたのかは、本遺跡では調査区の関係上明確には捉えられない。

陥穴 (第10図) 1基検出されている。調査区の端にかかっており、全掘はしていない。覆土、形態とも落合II遺跡の陥穴と近似しており、時期、機能について同様のものと考えられる。

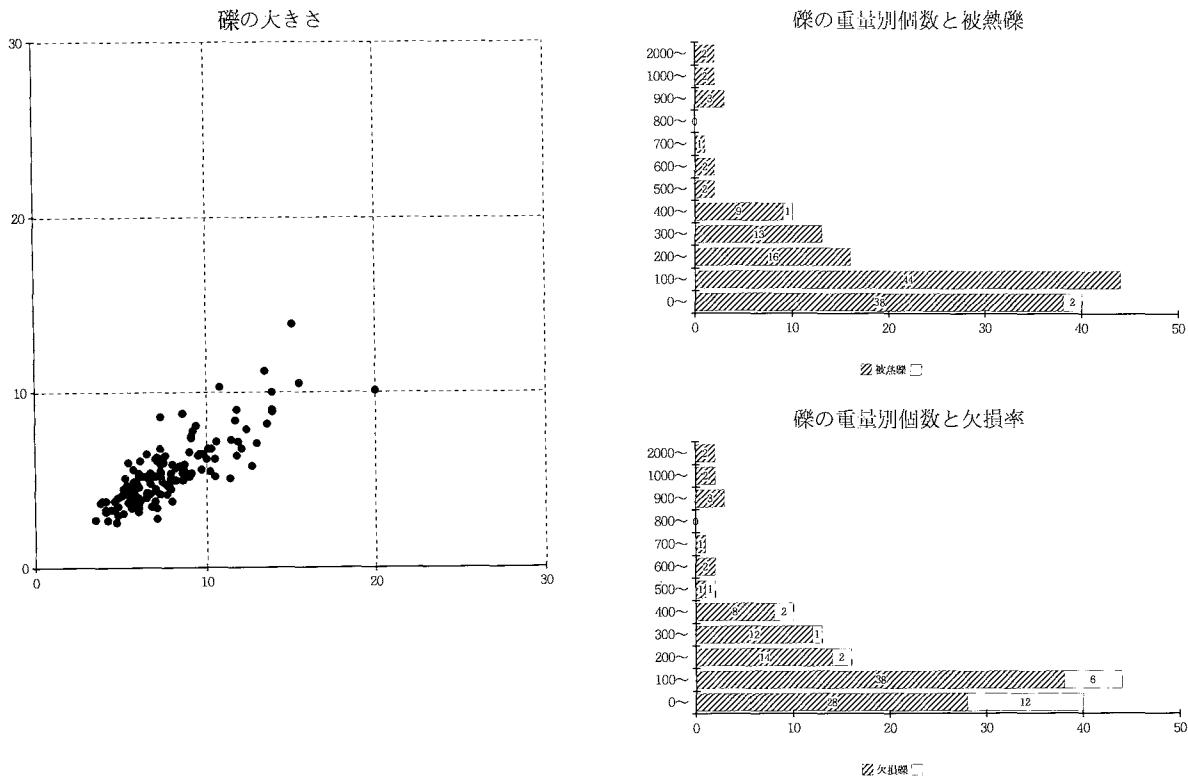
集石土坑 (第10図・第12図) 集石土坑は1基検出されている。五領ヶ台式の土器片が覆土から検出されており、同時期の遺構と推定される。土坑中央にやや大きめの底石を配し、その底石を中心に小礫を充填している。被熱率は99%、欠損率は81%とどちらも高い比率を示しており、この土坑が繰り返し使用された可能性が高い。この土坑は覆土に焼土、炭化物がやや多く含まれており、從来言われてきているように(谷口1986など)調理施設(earth-oven)としての利用が考えられる。



第10図 壇穴状遺構・土坑・集石実測図



第11図 土坑実測図



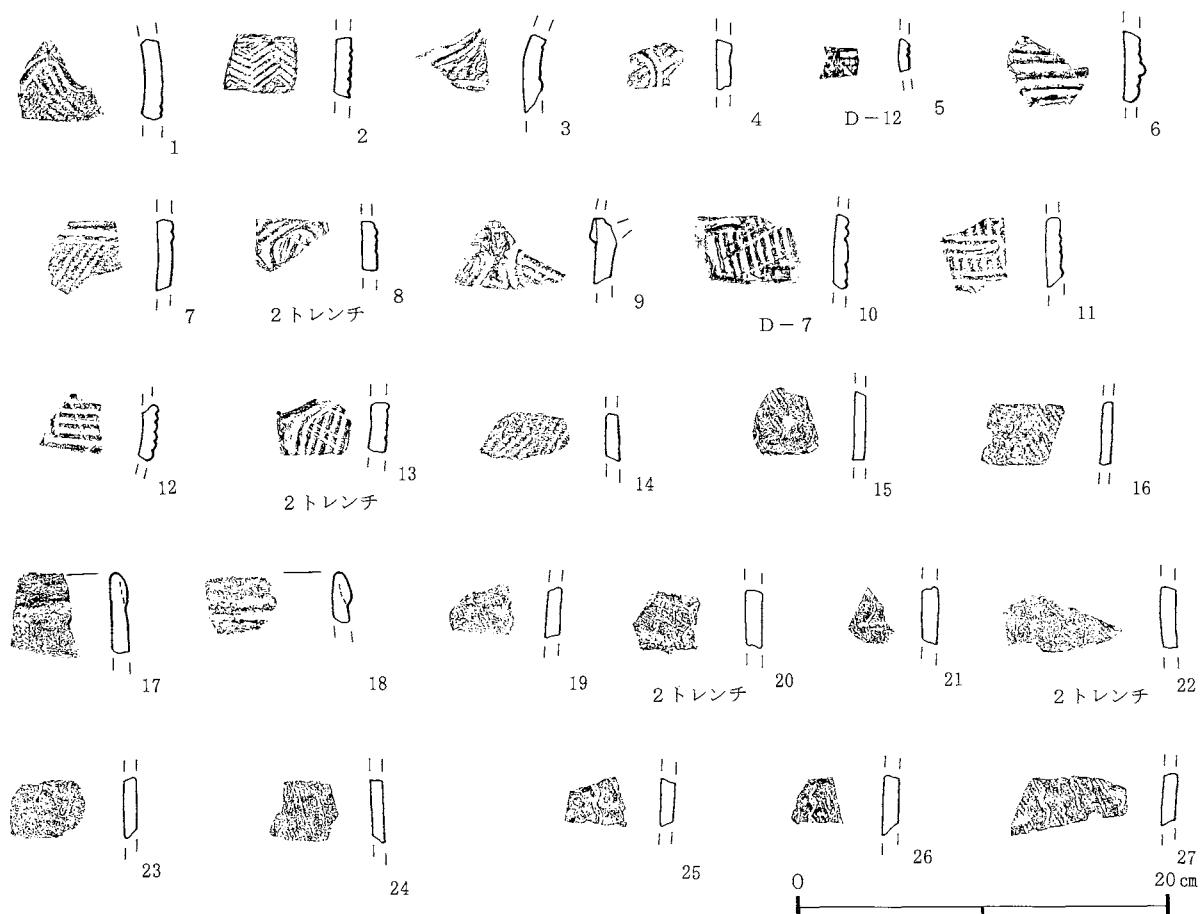
第12図 集石土坑の重量別個数及び被熱・欠損

土坑（第11図） 本遺跡からは機能・用途不明の土坑が18基検出されているが、このうち縄文時代のもとのと考えられるものはD-11、D-17を除いた16基である。

D-7は掘り込みが深く、底部がやや広がっている形態となることから、「小豎穴」（堀越1975ほか）ないし「袋状土坑」（桐生1985ほか）と言われる土坑に分類される。覆土から縄文中期末葉の加曾利E4式が検出されていることから、この時期の遺構と判断される。この形態の土坑の多くは貯蔵穴としての利用を考えており、この土坑も貯蔵穴としての機能を持つことが考えられる。

これ以外の土坑は、いずれも掘り込みの浅い小円形を呈する。

（林 克彦）



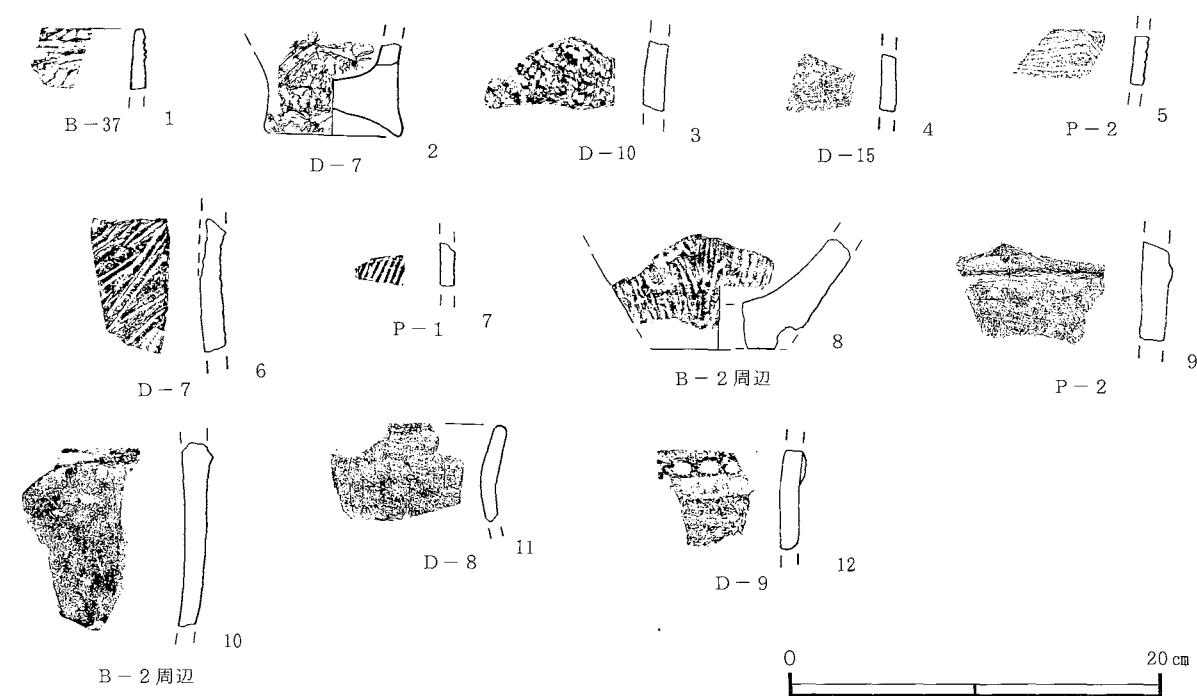
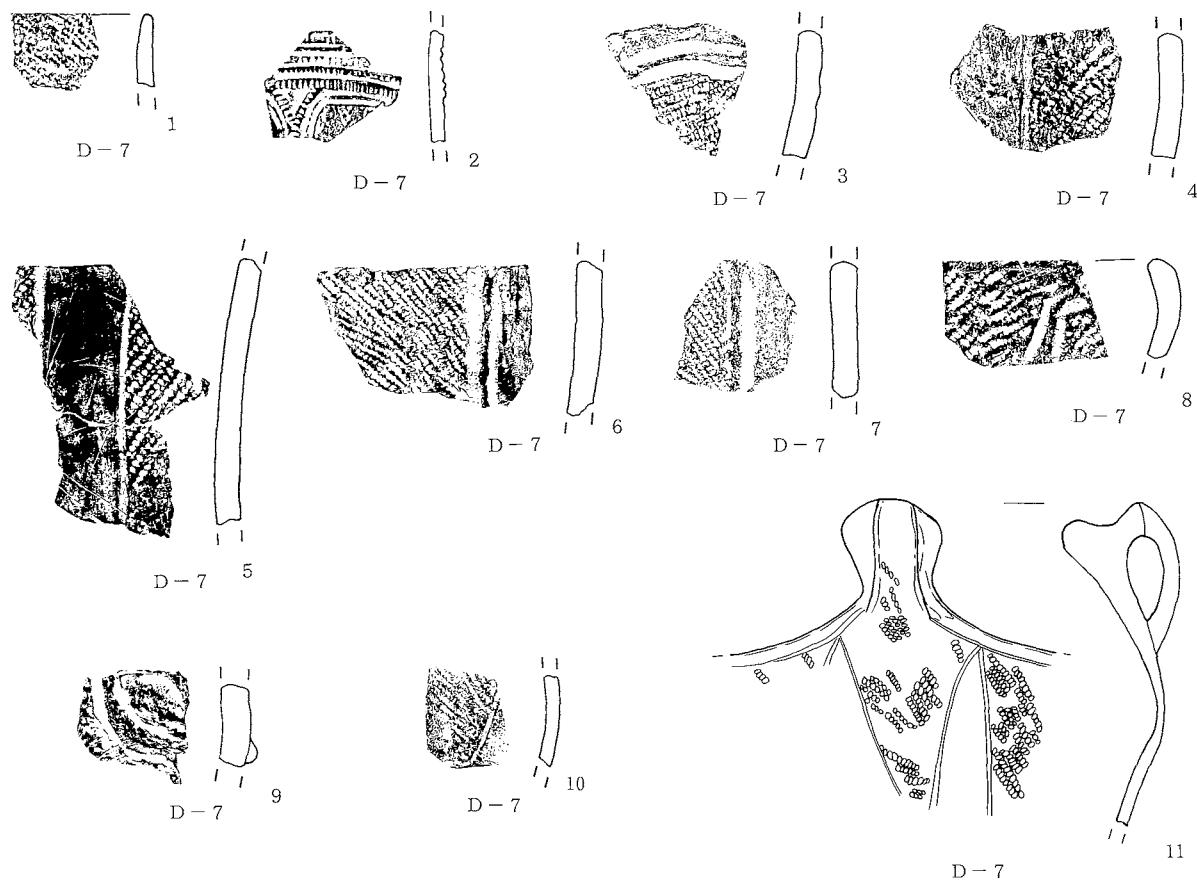
第13図 縄文土器実測図（1）

b 遺物

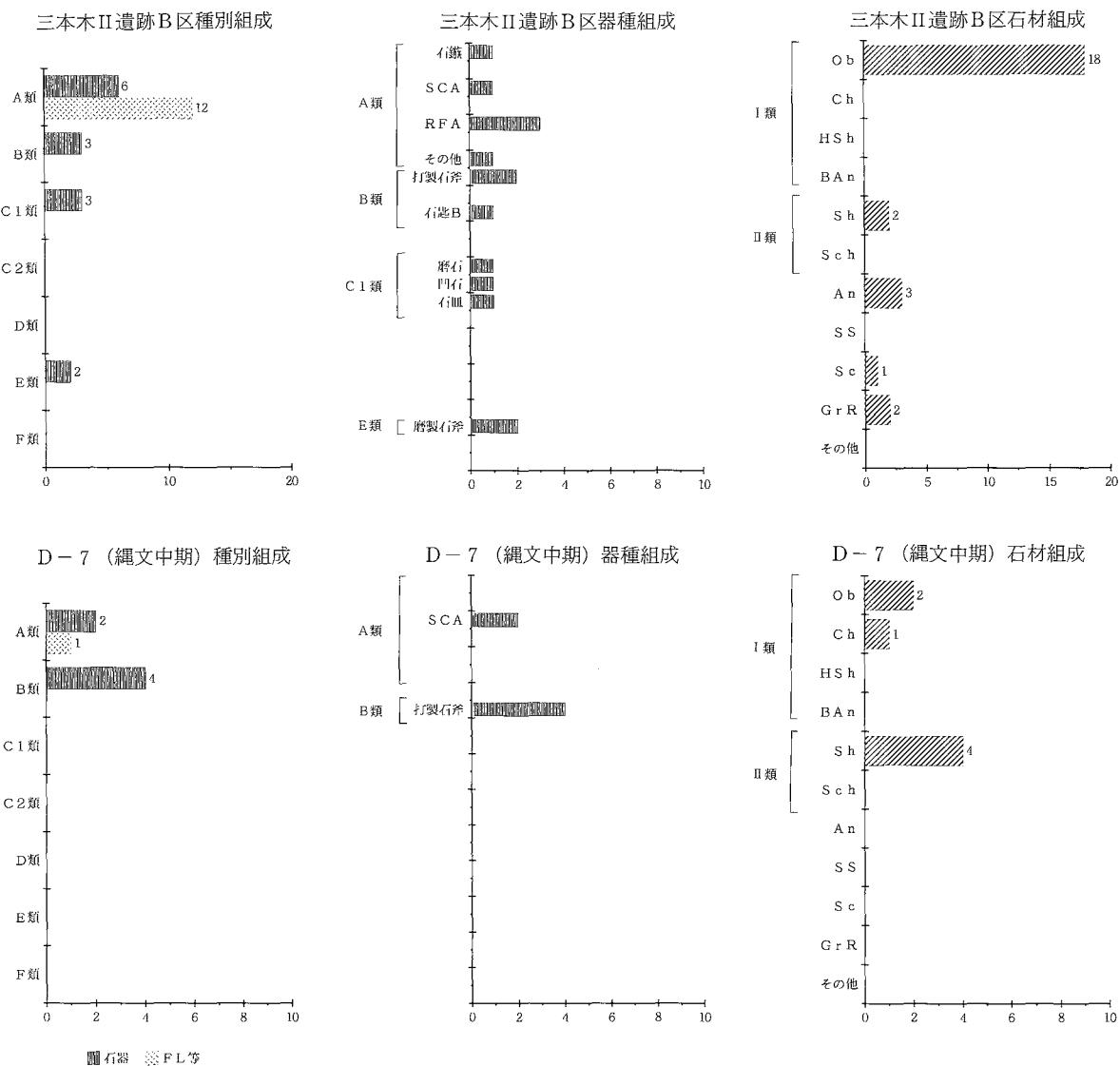
土器（第13図・第14図）

S-1号集石土坑、D-7号土坑から多数の土器が検出されている。第13図は集石土坑から検出された土器である。半截竹管の腹面で直線的な文様を施しているもの（1・2・8～13）、折り返し口縁のものの（17・18）、縦位の結束縄文を施したもの（19・27）などの種類がある。何れの土器も細かい雲母片を含み、結束縄文を施した類には、結晶片岩が含まれている。これらの土器は縄文時代中期初頭の五ヶ台式に比定されている。D-7号土坑からは、縦位の磨消縄文の一群（第14図4～8・10・13）が主体的に検出されている。6・7は縄文部と無文部の境に隆帯を張り付けており、4・5・8・10・13は縄文部と無文部を沈線で区画している。13には波頂部に橋状把手が付けられている。加曾利E4式に比定される。この他に、調査区から縄文前期の土器が数点検出されている（第14図1～3など）。

（林 克彦）



第14図 繩文土器実測図（2）

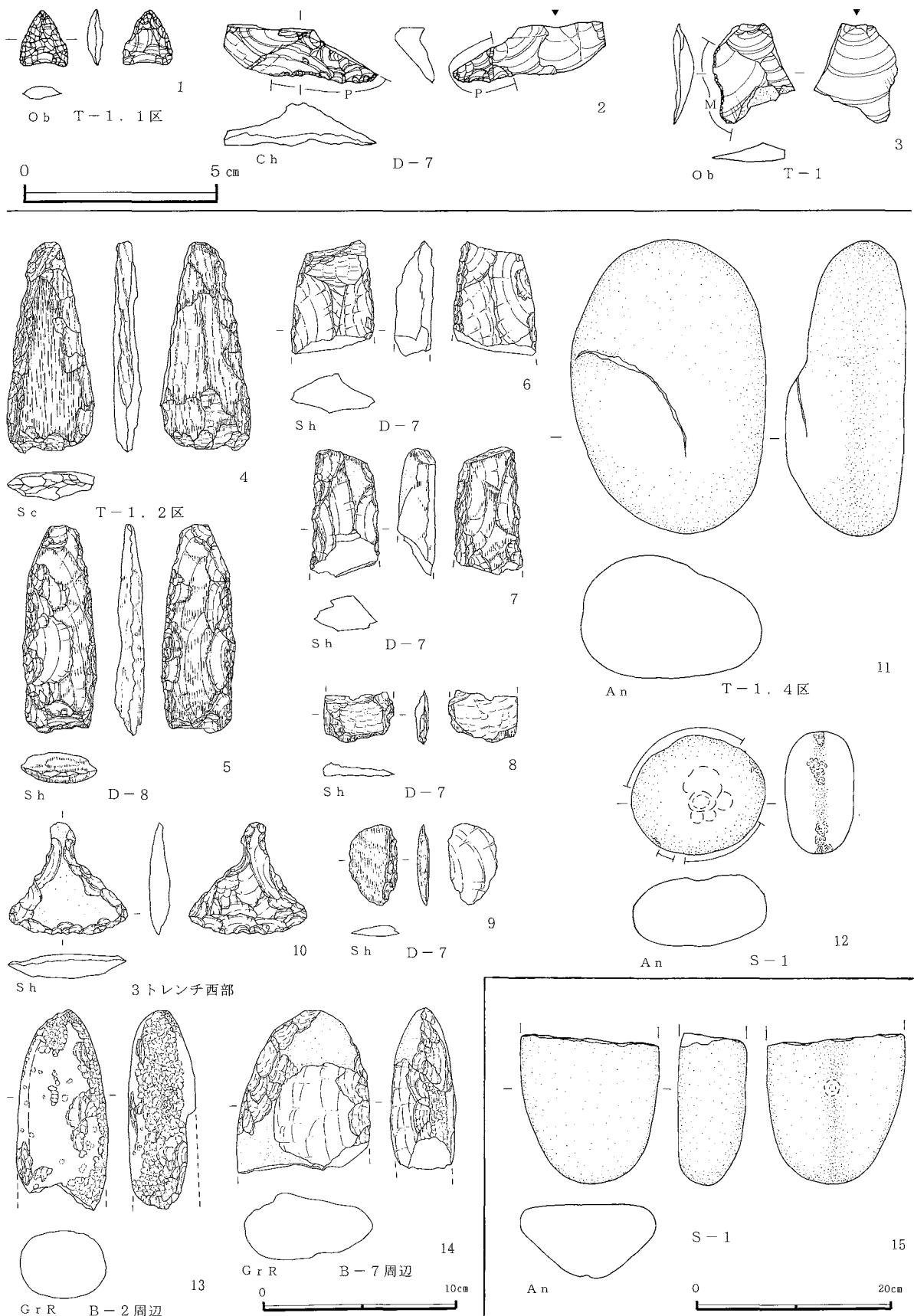


第15図 石器種別組成・器種組成・石材組成

石器

1) 石器組成

B区における石器組成は第15図に示したとおりである。全部で26点出土している。数量が少ないとこと、帰属時期の特定が困難なため、統計学的分析は意味を持たない。土器の様相からみて、前期から中期の石器が混在していると考えられる。ただし、中期（加曾利E式期）のD-7号土坑から検出されている7点は、この時期に帰属すると判断される。7点中6点が石器（打製石斧（II形態）4点、スクレイパーA類2点）であり、留意される。



第16図 石器実測図

2) 石器各説 (第16図)

A類石器

石鎌 (1) 1点検出されている。I形態 (凹基無茎鎌) に分類されるが、II形態 (平基無茎鎌) に近い。黒曜石製である。

スクレイパーA類 (2・3) 3点検出されている。Ia形態 (2) III形態 (3)

リタッヂド・フレイクA類 3点検出されている。図示していないが、すべて幅広不定形剝片を素材としたもので、黒曜石製である。

B類石器

打製石斧 (4~8・9) 6点検出されている。すべてII形態 (短冊形~撥形・断面レンズ状・両面加工・両刃) である。このうち2点 (8・9) は刃部破片である。石材は結晶片岩製の1点 (4) を除き、在地の頁岩製である。6以外は使用による磨耗痕が顕著に観察される。

石匙B類 (10) 1点検出されたのみである。形態としては、II形態 (直接打撃を多用) 横形に分類される。頁岩製である。

C1類石器

磨石 (11) 1点検出された。II形態 (橢円形) に分類されるが、比較的大形である。安山岩製。

凹石 (12) 1点検出された。Ib形態 (円形・凹→磨) である。比較的小形である。安山岩製。

石皿 (15) 1点検出された。IIb形態 (橢円形・作業面平坦) に分類される。作業面の使用痕はほとんど観察されないが、裏面には凹痕が存在する。安山岩製である。

E類石器

磨製石斧 (13) 1点検出された。Ib形態 (断面橢円形・中形) に分類される。刃部は欠損している。側縁部を中心に観察される敲打痕は製作時のものと判断される。緑色岩類製である。

磨製石斧未成品 (14) 1点検出された。基部の破片であり、第1工程 (剥離) と第2工程 (敲打) は観察されるが、第3工程 (研磨) が観察されないので未成品とした。緑色岩類製である。

(大工原 豊)

C区

(1) 縄文時代

a 遺構

縄文時代前期前半の住居址が5軒検出されている。このうち関山式期のものは3軒、神ノ木式～有尾式段階のものが2軒検出されている。これらの住居址の平面形態・規模等は第4表に示すとおりである。また、縄文時代のものと考えられる集石土坑1基と土坑2基が検出されている。

J-1号住居址（第17図）

出土土器から関山II式期のものと考えられる。平面正方形で、全周する壁溝を有する。主柱穴は炉址を挟んで南北に並行に存在する8本と、炉址を挟む東西方向の2本が考えられる。炉址は埋設土器とそれに付随する「コ」の字形の石匂炉である。炉体土器の底部は欠損しており、また、口縁部には使用痕と思われる欠損部分が認められる。炉体土器内部から拳大の礫が検出されているが、これは石匂炉に利用されていた石が流入したものであろう。住居南西部にはローム主体の土坑が検出されているが、本住居址とどのように関わるかは明確ではない。

遺物出土状態

[土器] 住居址中央部にやや多い傾向が認められるが、顕著な差異は認められない。

[礫] 住居址中央部に集中する傾向が認められる。炉址との関連性が推定される。

[石器] 住居址中央部に集中する傾向が認められる。

J-2号住居址（第18図）

出土土器から関山II式～有尾式古段階のものと考えられる。土層堆積と柱穴配置から2軒の住居址の重複が認められる。覆土の堆積状況からJ-2a号住居址が新しい縮小住居であると考えられる。J-2a号住は推定正方形を呈し、主柱穴は壁に近い4本で、補助柱穴が壁に沿ってほぼ全周すると考えられる。炉址は楕円形の地焼炉で拳大の枕石を2個配置している。J-2b号住は平面正方形で、周溝が全周する。主柱穴は南北の壁に接する4本と考えられ、周溝内に無数の補助柱穴が存在する。炉址は明確ではない。

住居址名	平面形態	規模(cm)			主柱穴		補助柱穴		炉址形態	規模		付帯施設
		NS	EW	深さ	位置	本数	位置	本数		長軸	短軸	
J-1号住	正方形	327	294	38	内	10	内・壁	21	埋甕・枕石	47	28	壁溝
J-2 a号住	正方形(推定)	356	340	42	内	4	内	25	枕石	60	40	壁溝
J-2 b号住	正方形	452	458	42	内	4	内・壁	18				壁溝
J-3 a号住	長方形	648	546	33	内	8	内・壁	38	地床(1)	55	52	壁溝
J-3 b号住	長方形	778	564	33	内	6	内	5	地床(2)	60	52	壁溝
J-4号住	長方形	610	500	36	内	4	内・壁	49	地床	80	50	壁溝
J-5号住	長方形	334	280	26	内	8	内	10	地床	50	42	

第4表 三本木II遺跡縄文時代住居址観察表

遺物出土状態

[土器] 下層の南西隅にやや多く認められる他は、出土量も少なく偏在性は認められない。

[礫] 極めて少なく、傾向を指摘できない。

[石器] 出土量は少なく、顕著な偏在性は指摘できない。

J—3号住居址（第19図）

出土土器から有尾式期のものと考えられる。覆土や炉址、主柱穴の数から2軒の重複が認められる。この住居址もJ—2号住と同様にJ—3a号住が新しい縮小住居であると考えられる。J—3a号住は比較的大形の平面長方形で、部分的に壁溝が巡る。主柱穴は8本で、炉は地焼炉である。J—3b号住も比較的大形の平面長方形で壁溝は認められない。主柱穴は6本で、炉は地焼炉である。

遺物出土状態（第20図）

[土器] 出土量は極めて少なく、遺物の偏在性は認められない。

[石器] 出土量は極めて少なく、遺物の偏在性は認められない。

[礫] 出土量は極めて少なく、遺物の偏在性は認められない。

J—4号住居址（第21図）

出土遺物から関山II式期のものと考えられる。平面長方形で、部分的に壁溝が巡る。主柱穴は4本で、炉は地焼炉である。西側には貼り床と思われる硬化面が認められた。

遺物出土状態

[土器] 出土量は少ないが、下層の南西隅にやや多い傾向が認められるが、全体的に偏在性は認められない。

[石器] 出土量は極めて少なく、顕著な遺物の偏在性は指摘できないが、下層南側にFLA類が比較的多い。

[礫] 出土量は極めて少なく、顕著な遺物の偏在性は指摘できないが、下層南側に比較的多く認められる。

J—5号住居址（第22図）

出土遺物から関山II式のものと考えられる。比較的小形の平面長方形で、壁溝は認められない。主柱穴は対称の配置とならない8本と考えられ、その深さは西側が深く、東側が浅い。特殊な上屋構造を持つことが推定される。炉は地焼炉である。

遺物出土状態

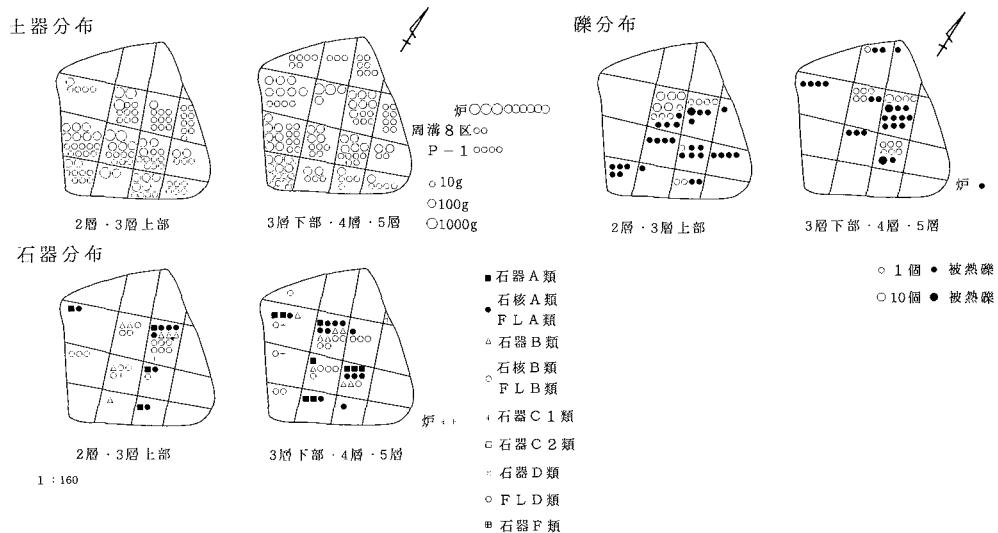
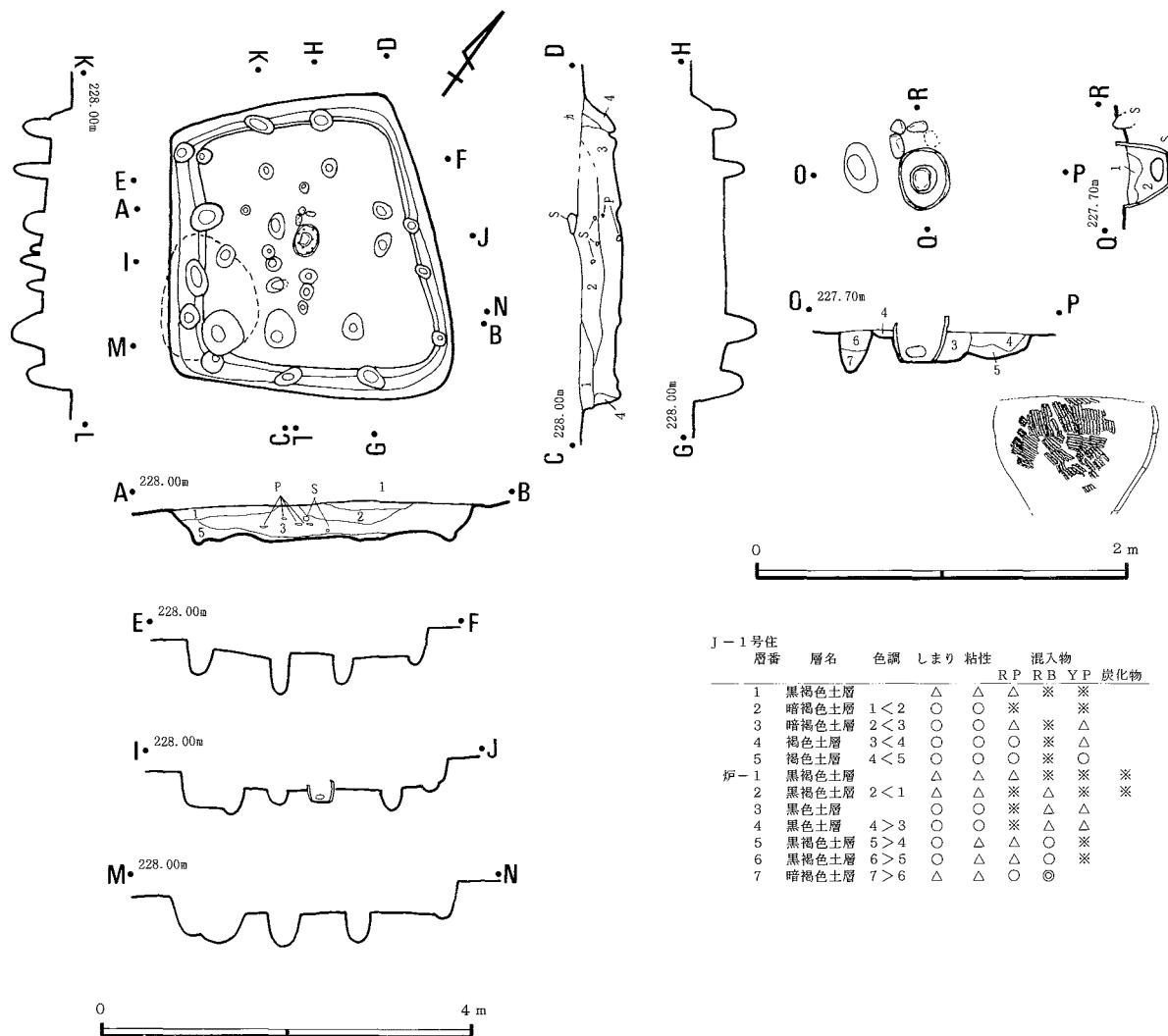
[土器] 遺物量は極めて少なく、遺物の偏在性は認められない。

[石器] 南西隅に石皿が検出された他は、遺物の偏在性は認められない。

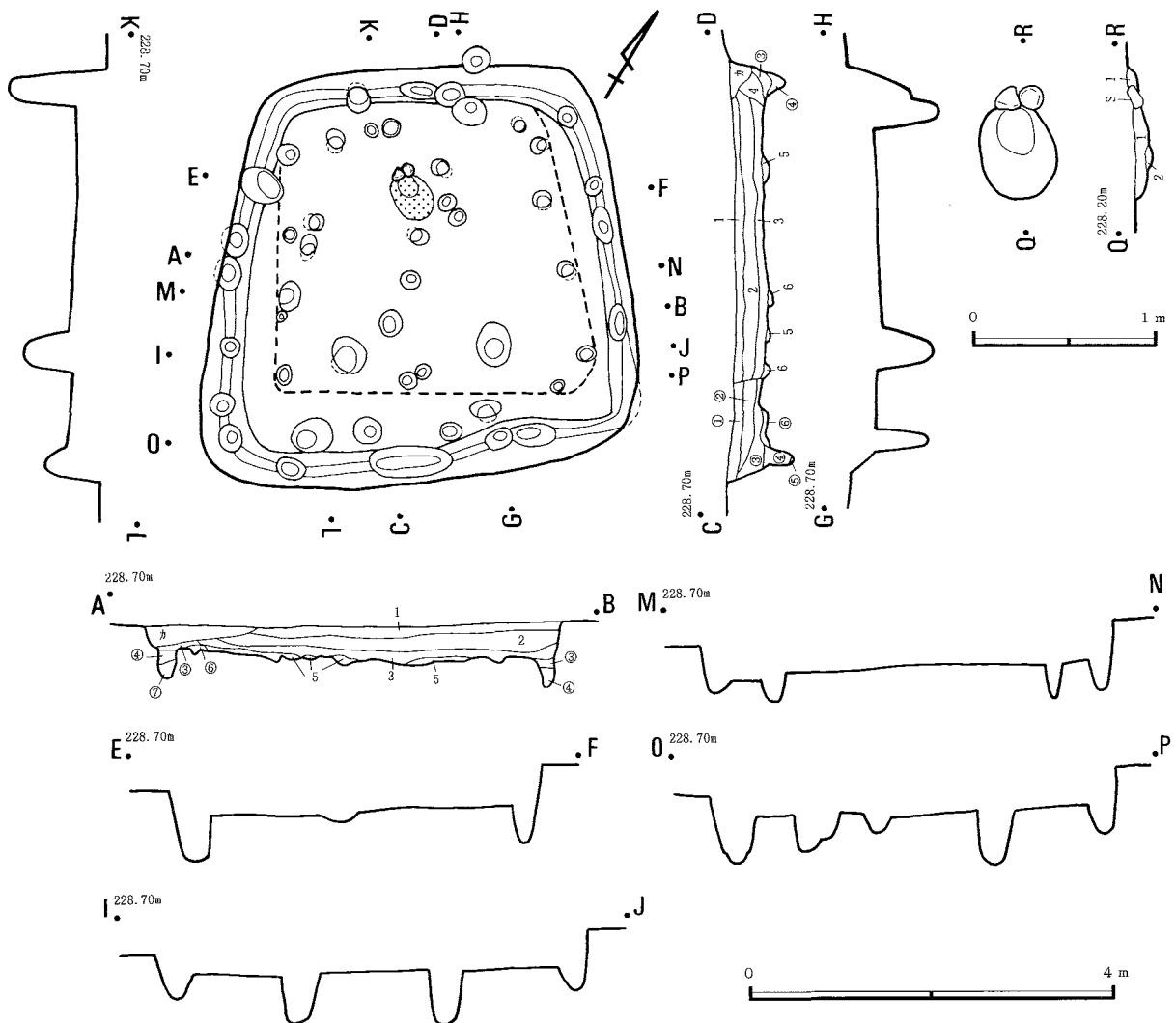
[礫] 遺物量は極めて少なく、遺物の偏在性は認められない。

集石土坑（第23図・第24図）

集石土坑が1基検出されている。落合II遺跡の集石土坑と同様に、底石を配してから礫を充填する充填型の集石である。土坑は2段掘り込みで、底石を置く部分をピット状に掘り込んでいる。礫の被熱率



第17図 J - 1号住居址実測図



J-2号住 層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物					備考
					R	P	R B	Y P		
1	黒褐色土層	○	○	○	※	※	△			
2	黒褐色土層	2 < 1	○	○	※	※	△			
3	黒褐色土層	1 > 3 > 2	○	○	※	△	△			
4	暗褐色土層	4 > 2	○	○	△	△	△			
5	黒褐色土層	○	○	○	○	○	○			
6	暗褐色土層	6 > 3	△	△	○	○	※	※		
①	黒褐色土層	① > 1	○	○	○	△	※	△		
②	黒褐色土層	② < ①	○	○	△	○	※	△		
③	暗褐色土層	③ < 4	○	○	△	○	△	△		
④	暗褐色土層	④ > ③	△	△	○	○	△	△		
⑤	黄褐色土層	⑤ > ④	△	△	○	○	○	○		
⑥	暗褐色土層	⑥ > ④	△	△	○	○	△	○		
⑦	暗褐色土層	△	△	△	○	○	○	○		

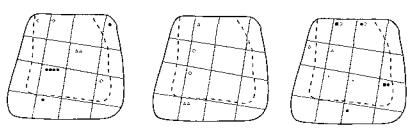
土器分布



P = 1個
P = 2個
P = 3個
P = 4個
○ 10g
○ 100g

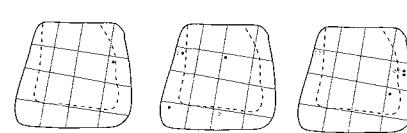
- 石器 A 類
- 石核 A 類
- F L A 類
- △ 石器 B 類
- 石核 B 類
- F L B 類
- 石器 C 1 類
- 石器 C 2 類
- 石器 D 類
- F L D 類
- 石器 F 類

石器分布



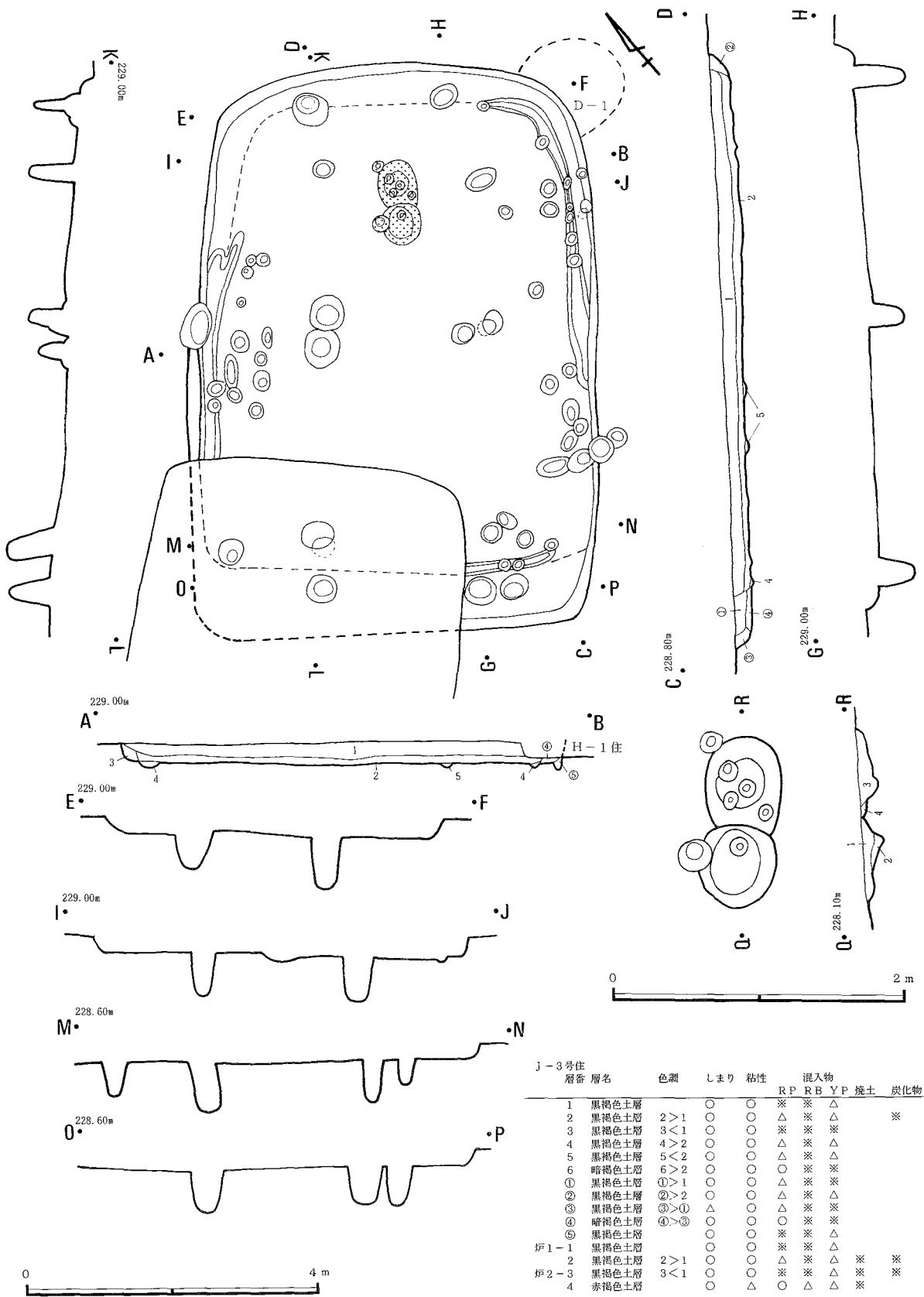
- 1個
- 被燃跡
- 炉

礫分布



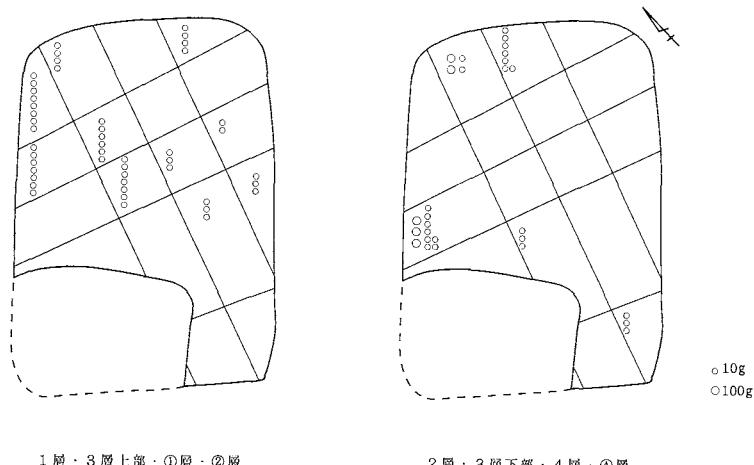
1 : 320

第18図 J-2号住居址実測図

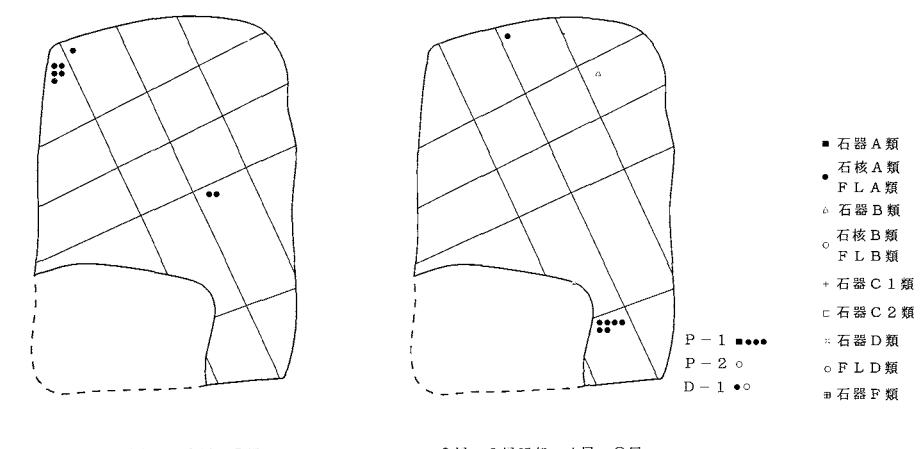


第19図 J-3号住居址実測図

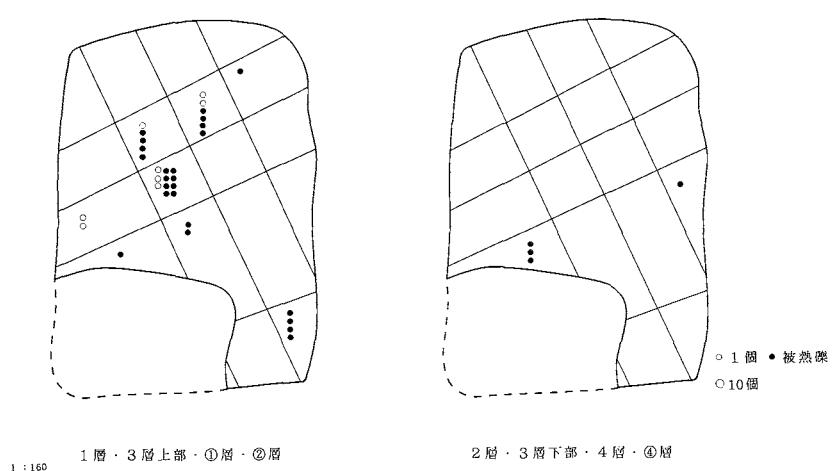
土器分布



石器分布

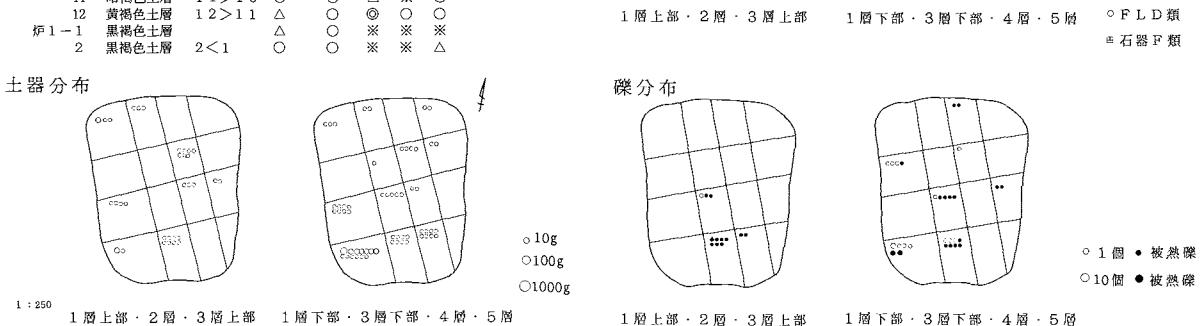
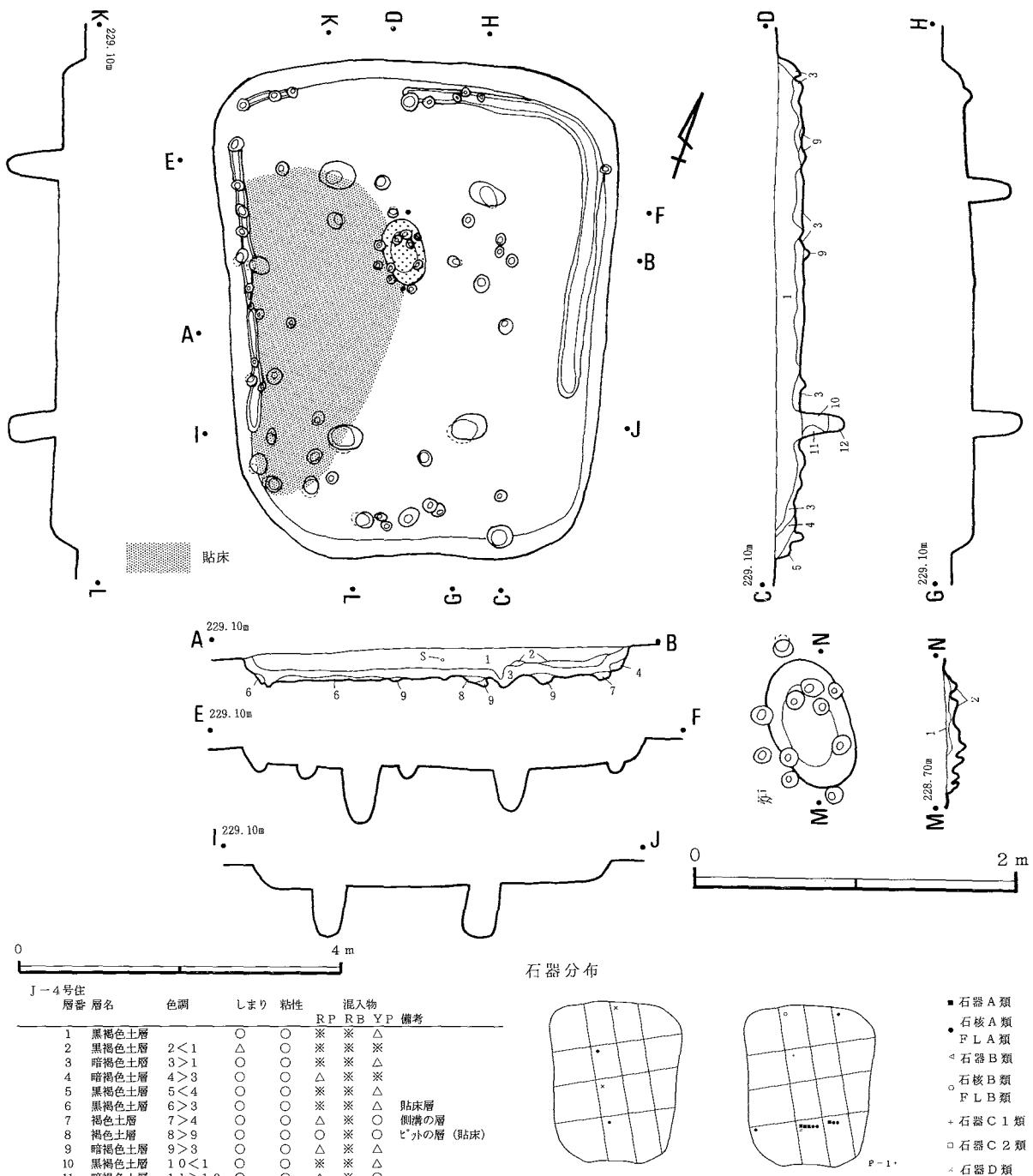


礫分布

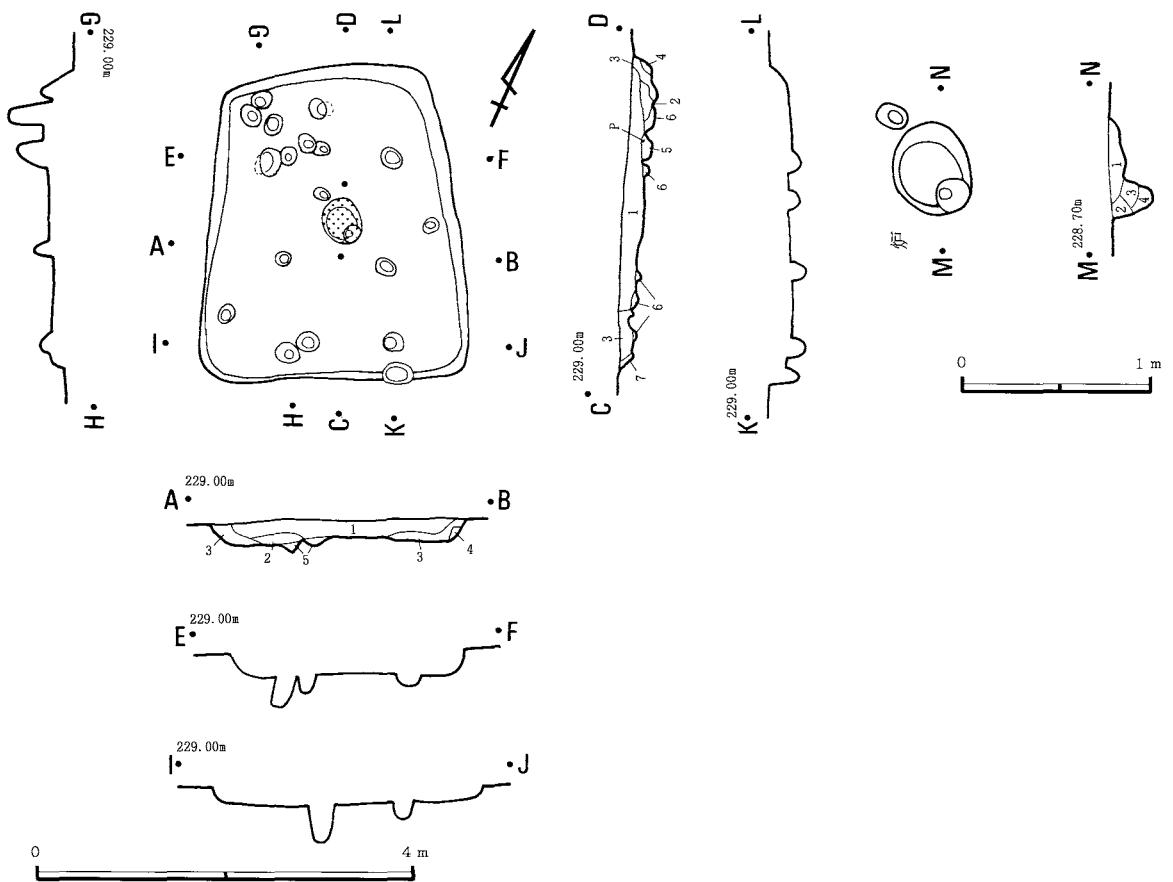


1:160

第20図 J—3号住居址遺物分布図

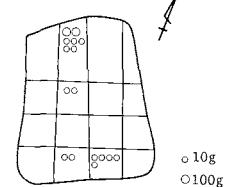
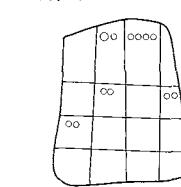


第21図 J-4号住居址実測図

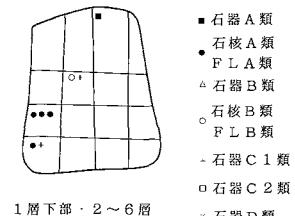
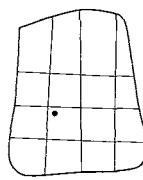


土器分布

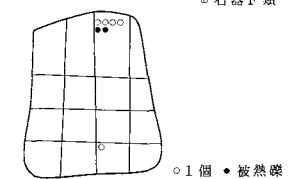
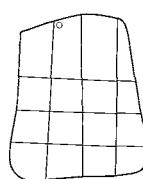
J-5号住		層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物			
R	P	R	B	Y	P					
1	黒褐色土層	○	○	※	※	△				
2	暗褐色土層	2>1	○	○	※	※	△			
3	暗褐色土層	○	○	△	※	※	△			
4	褐色土層	4>3	△	○	○	※	※	※		
5	暗褐色土層	5>1	○	○	△	※	○			
6	暗褐色土層	6>1	△	○	△	※	※	○		
7	暗褐色土層	7>3	○	○	△	※	※	○		
炉1-1		1	黒褐色土層	○	○	※	※	※		
2			暗褐色土層	1>2	○	○	△	※	△	
3			暗褐色土層	1>3>2	○	○	△	△	※	
4			黒褐色土層	○	○	※	※	※		



石器分布

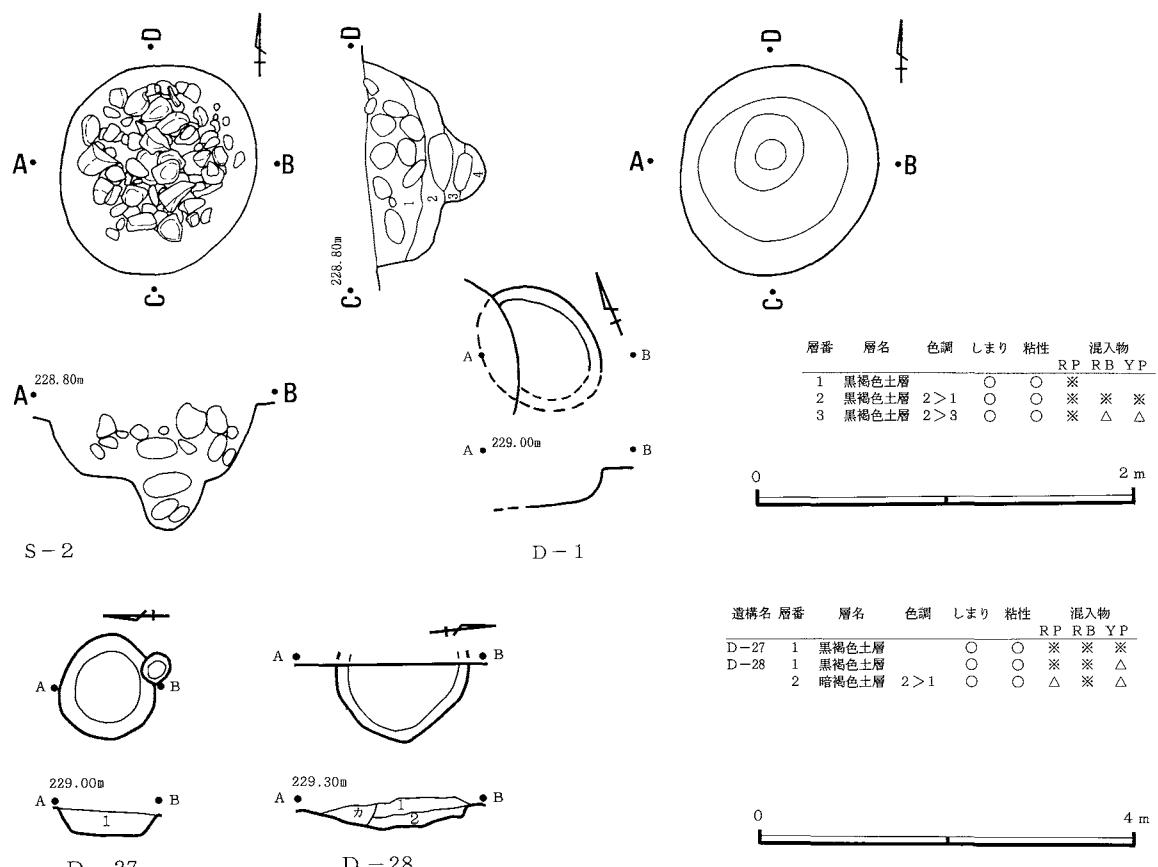


礫分布

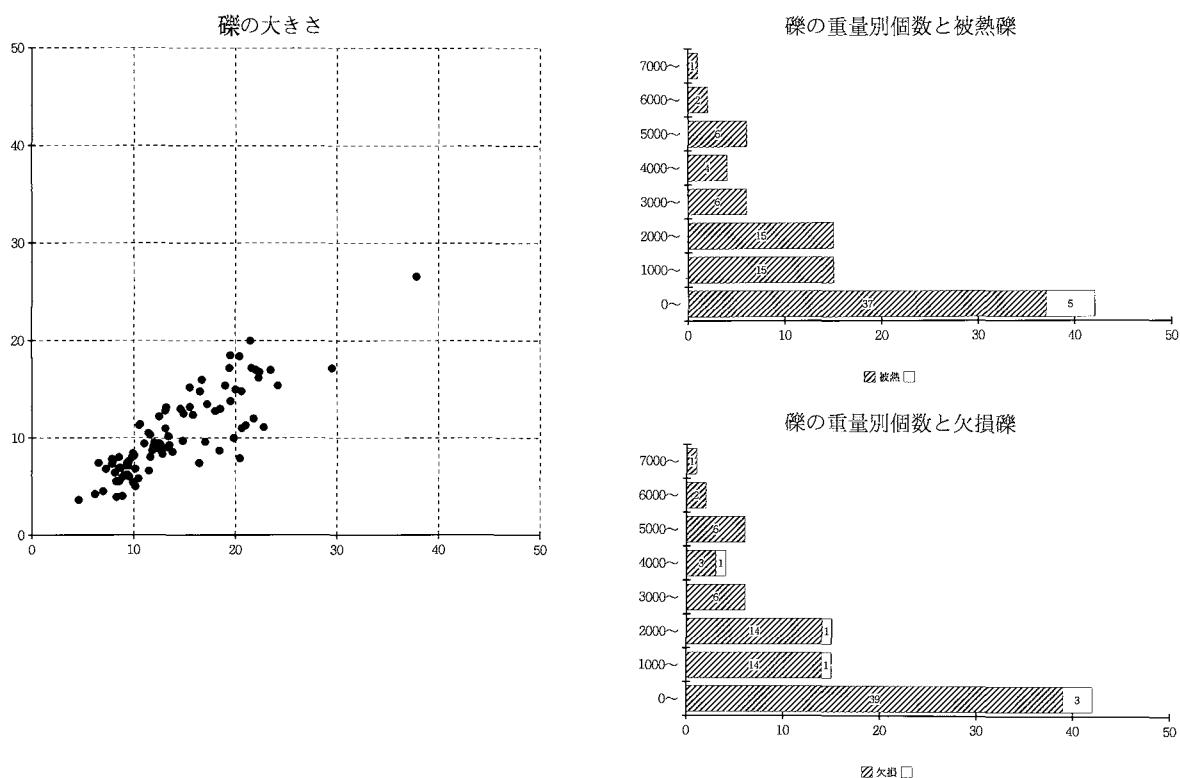


1:160

第22図 J-5号住居址実測図



第23図 集石土坑・土坑実測図



第24図 集石土坑の重量別個数及び被熱・欠損

は95%、欠損率は94%と高い比率を示し、継続的な利用が推定される。ただし、土坑壁面には顕著な被熱の状況は認められることから、落合II遺跡の集石とは利用方法が異なっていた可能性も考えられる。時期の解る遺物が出土していないことから、本集石の正確な時期は不明である。

土坑（第23図）

掘り込みの比較的浅い、小円形の土坑が2基検出されている。D-27は出土遺物から前期前半のものと考えられる。

（林 克彦）

b 遺物

土器

本遺跡から出土した縄文土器は、住居址にともなって出土した前期中葉の土器が主体である。本項では、住居址出土の前期中葉土器について概観してみたい。

J-1号住居址（第25図・第26図） 関山II式土器の特徴である半截竹管を使用した平行沈線による、鋸歯状文、幾何学文を持つ土器が出土している。また、神ノ木式とみられる櫛歯状工具による刺突を持つ土器が供伴している。縄文施文の土器では、異節斜縄文と呼ばれる前後段合撫等、組み紐を持つ土器などとともにループ文を施文する若干古い様相を持つ土器もある。

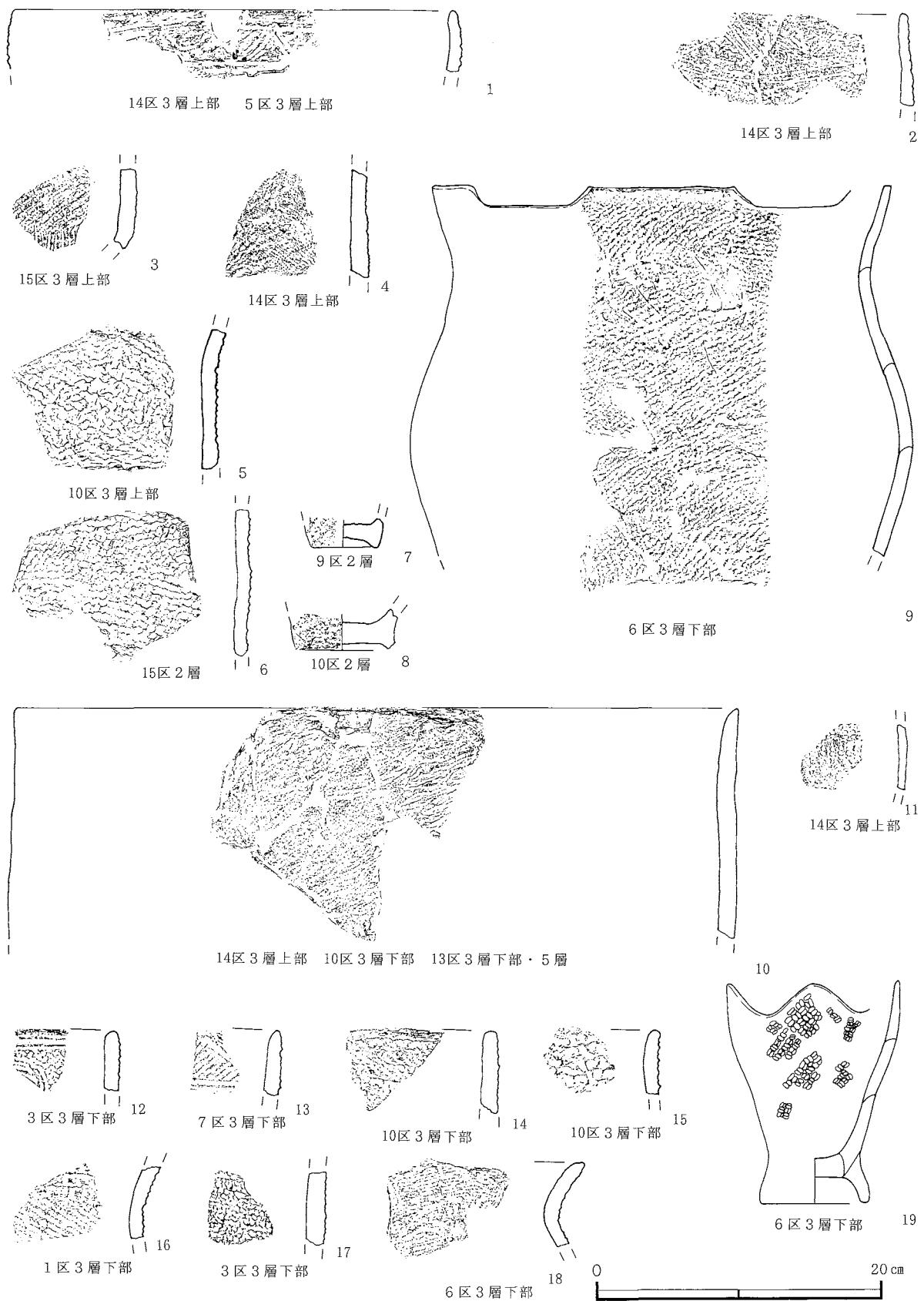
J-2号住居址（第26図下段） 確実な関山II式土器は、出土していないが、櫛歯状工具による刺突と条線を施文された土器が出土している。また、束の縄文を持つ土器など神ノ木式土器が出土している。それ以外の文様施文の土器では、半截竹管による行沈線で鋸歯状に施文した土器や爪形文が施文される土器など有尾式の特徴を持った土器が出土している。また、縄文施文の土器では、異条斜縄文に似せた付加条第二種の土器が出土していることから、1号住居址とは、趣を異にしている。

J-3号住居址（第27図上段） 櫛歯状工具を刺突して引くように施文している神ノ木式土器が出土している。また、縄文施文の土器は、比較的単純な斜行縄文で無纖維土器が出土していることから、2号住居と同じく神ノ木・有尾式系統の住居であろうか。

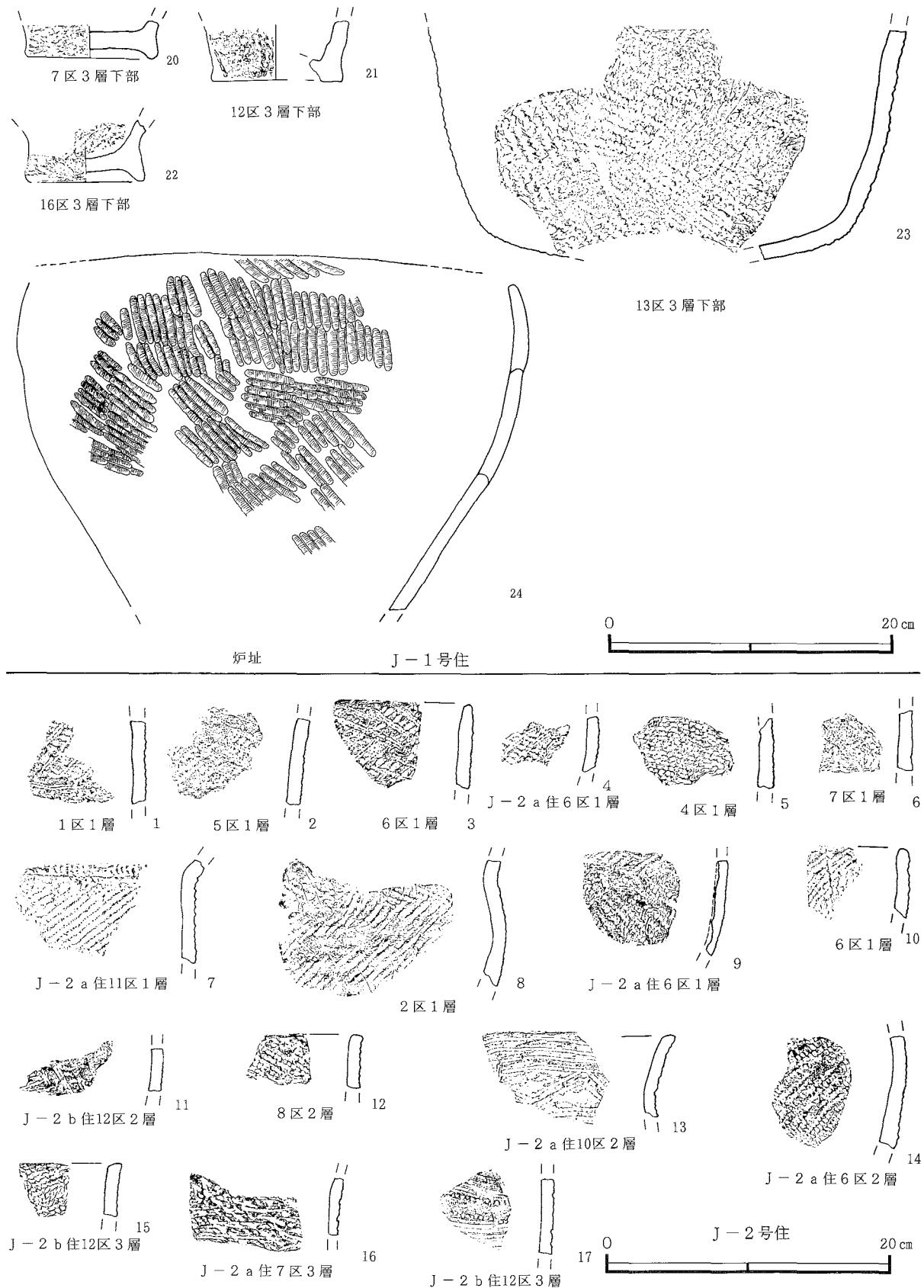
J-4号住居址（第27図中段） 縄文施文の土器のみの出土である。縄文施文土器は、ループ文土器、異条斜縄文の土器、異節斜施文の土器等関山式土器に見られる特徴を持つ。

J-5号住居址（第28図） やや太めの沈線による幾何学文施文の土器が出土している。また、縄文施文の土器では、異条斜縄文等関山式土器にみられる特徴を持つ。

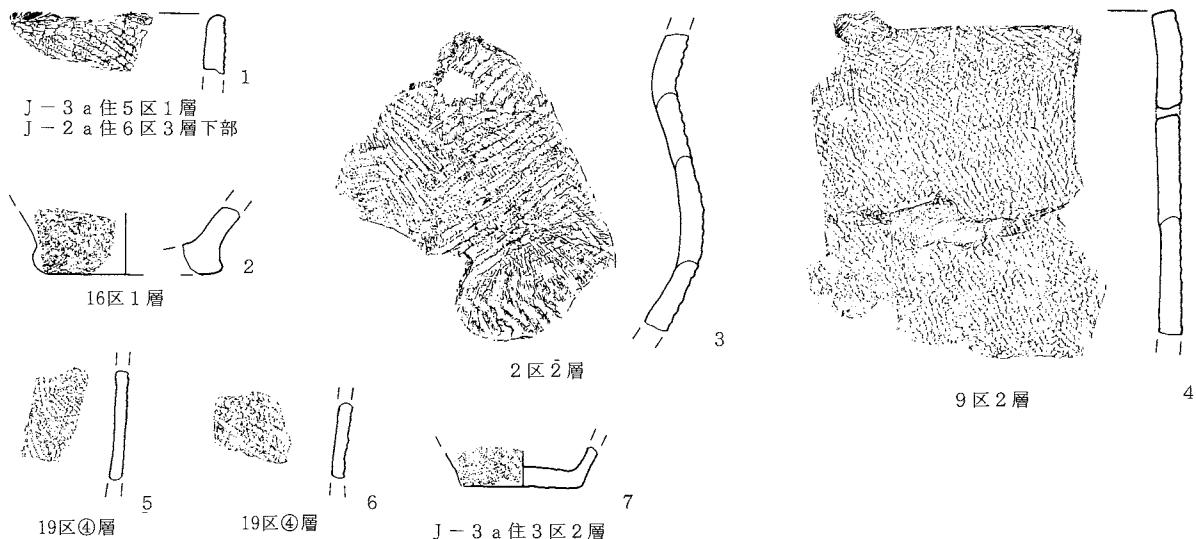
関山式土器と神ノ木・有尾式土器の出土傾向を住居址別にみると、J-1号住、J-4号住、J-5号住では関山式を主体として出土している。J-2号住、J-3号住では、神ノ木・有尾式が主体となって出土している。また、J-2号住とJ-3号住が重複していることから、神ノ木・有尾式の住居址では時間差があることが分かる。関山式の住居址では、J-1号住、J-4号住にループ文を持つ土器や異節斜縄文を持つ土器など共通点もあり、J-1号住、J-4号住、J-5号住の順に住居址が存在したと考えらる。J-1号住からは、神ノ木式と思われる土器が出土していることから、J-1号住・J



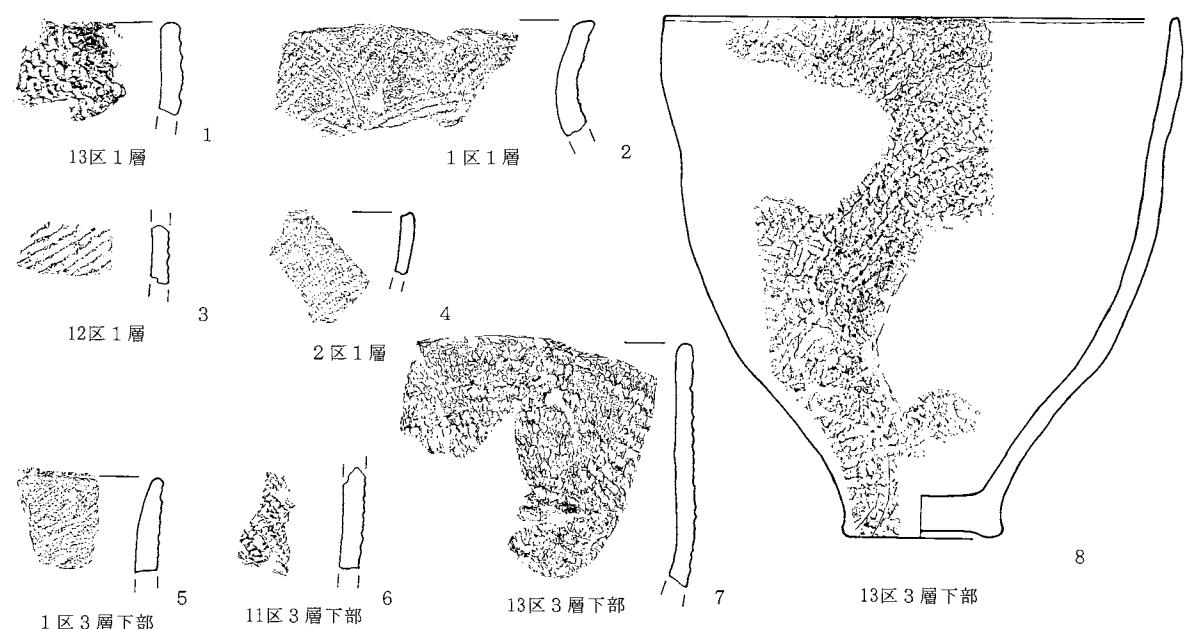
第25図 J-1号住居址出土の土器



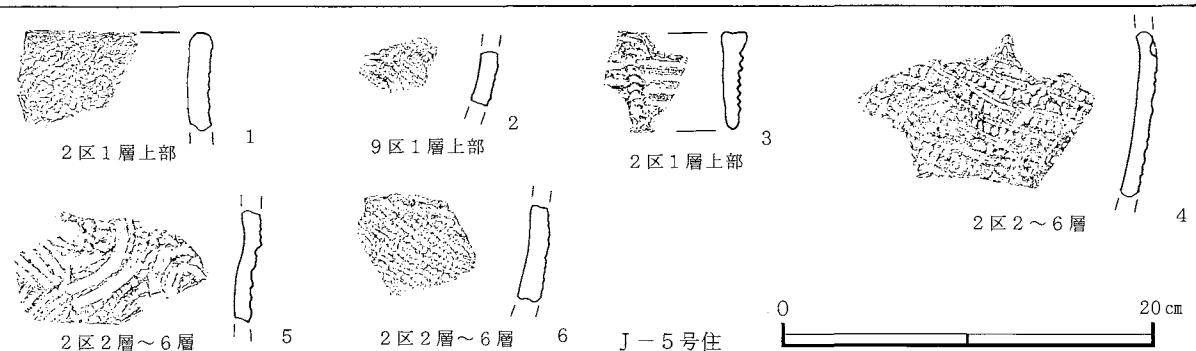
第26図 J-1号・J-2号住居址出土の土器



J-3号住

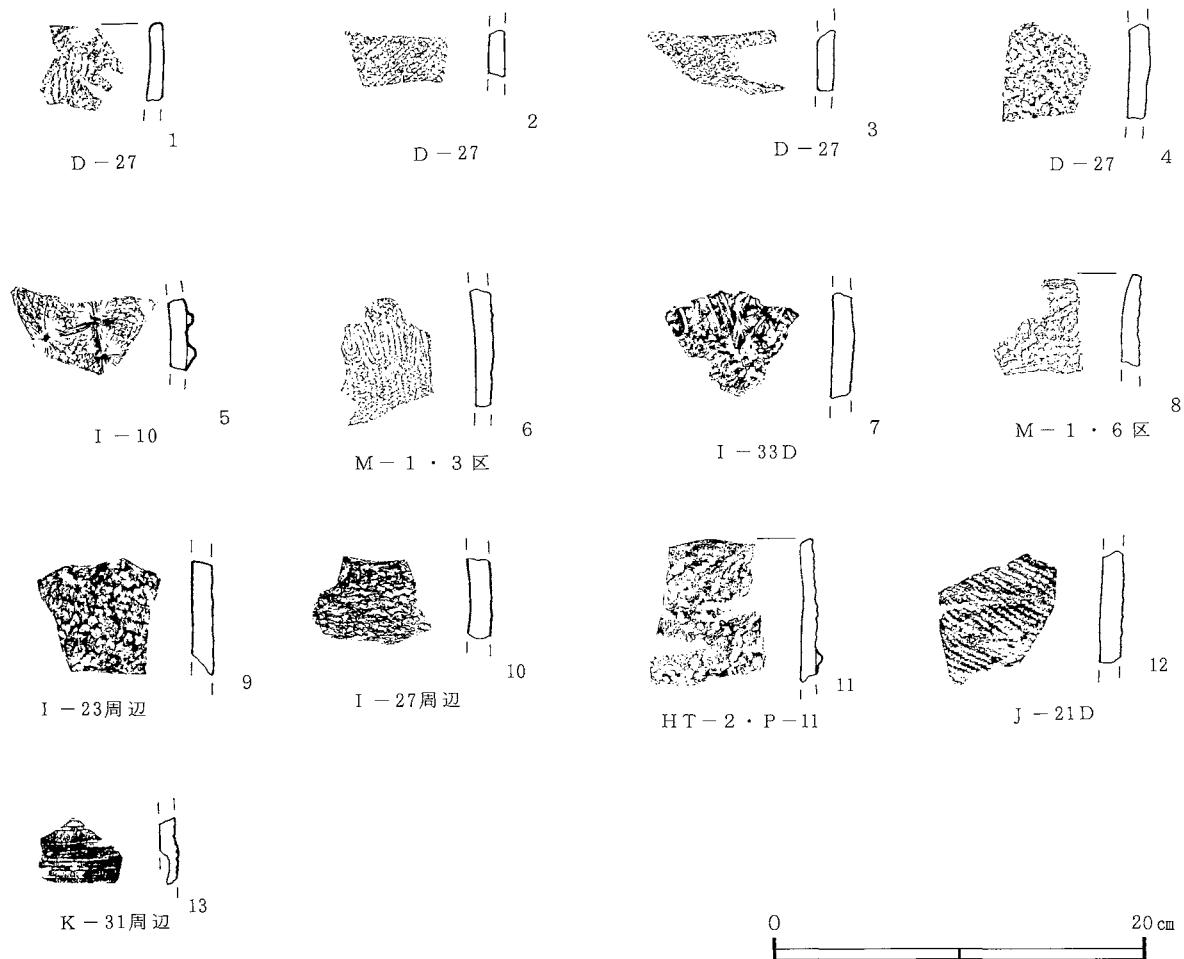


J-3号住



0 20 cm

第27図 J-3号・J-4号・J-5号住居址出土の土器



第28図 土坑・調査区出土の土器

—2号住→J—3号住・J—4号住→J—5号住の順に構築されたと推定される。

次に、本遺跡周辺の前期中葉の遺跡の様相を含めて検討してみたい。この時期の集落遺跡としては、中原遺跡、東畠遺跡、大下原遺跡、吉田原遺跡があげられる。これらの遺跡と住居址の時期を比較すると、中原遺跡が関山I式と間を開けて有尾式の集落である。東畠遺跡では関山II式の古い段階が主である。また、大下原遺跡は有尾式を主体とする遺跡である。吉田原遺跡は本遺跡と傾向が似ており、関山II式の古い段階、関山II式新段階と神ノ木式、有尾式の住居址が検出されている。吉田原遺跡の規模も本遺跡と同様に関山II式新段階・神ノ木式の時期においては、小規模な集落が営まれており共通する点がみられる。以上、安中市中野谷地区における前期中葉の集落は、本遺跡と周辺の遺跡をみるとことによって、集落の変遷を考えることができる。

土器の出土量及び住居軒数などからみた集落の規模は、関山I式から関山II式の古段階にかけて比較的まとまった集落が作られ、関山II式と神ノ木式の時期になると、遺物量の少ない小規模な集落が作られる。次の有尾式段階になると、規模の大きな集落になる傾向にある。これらの消長は、発掘面積によるものなのか、遺跡の立地する地形的な条件によるものなのか。または、関山II式新・神ノ木式の時期では遺構量、遺物量の少なくなる時期なのか、今後さらに検討を加えて行かなければならないと考えるが、本遺跡や、吉田原の状況を考えると、この段階では、集落規模が縮小されると思われる。

群馬県内においては、土器の変遷は、関山式から有尾式に変わる段階で、神ノ木式を介在させることによって、土器変遷がスムーズにとらえられる。一方、社会的状況（集落の変遷）では、関山式から有尾式に変わる過程において、一度関山式を否定して神ノ木式を採用し、そして神ノ木式から有尾式になるが、この段階で大きな変化があったと考えられる。それが、この時期の集落規模の縮小となって現れていると推測される。

（関根慎二）

石器

1) 石器組成（第29図～第31図）

C区における石器組成は第29図～31図に示したとおりである。全部で196点出土しており、本遺跡群の中では最も多い。しかし、このうち87点はJ-1号住居址からの出土であり、それ以外の住居址・遺構から出土したものは非常に少ない。また、共伴する土器群からみて関山II段階を中心とした時期に限定される。

以下、石器種別組成、石器器種組成、石材組成の順に検討してみたい。

石器種別組成 中原遺跡ではA類・B類の石器（狭義）と剝片類（石核を含む）の数量比からパターンを抽出した。これに即して本遺跡を見た場合、すべての住居址、土坑・調査区ともパターンa₁（A類・B類とも低調な石器製作的パターンを示すもの）に分類される。このパターンは中原遺跡南群（関山I段階：3例）、東畠遺跡（関山II段階：4例）に偏在したパターンである。本遺跡の特徴として捉えることができる。

なお、a₁・a₁といったA類の製作・消費が低調な傾向は本地域の有尾段階には特徴的であり、先行する本遺跡の場合でも、この傾向は変わりない。

石器器種組成 個々の住居址・土坑別にみた場合、石器の数量が少なく、一般的傾向の抽出は困難である。ここでは、最も出土量の多いJ-1号住居址（関山II段階）の器種組成について、所見を述べることにする。A類石器、B類石器、C1類石器から構成される。最も多い器種はスクレイパー、リタッヂ・フレイク類であり、A類・B類とも主体をなす。これに対し、打製石斧は少ない。また、石鏃やC1類石器（磨石、凹石、石皿）も必要最低量存在しているのみであり、この場所での生業活動はスクレイパー類の使用に特徴付けられるものと言えよう。

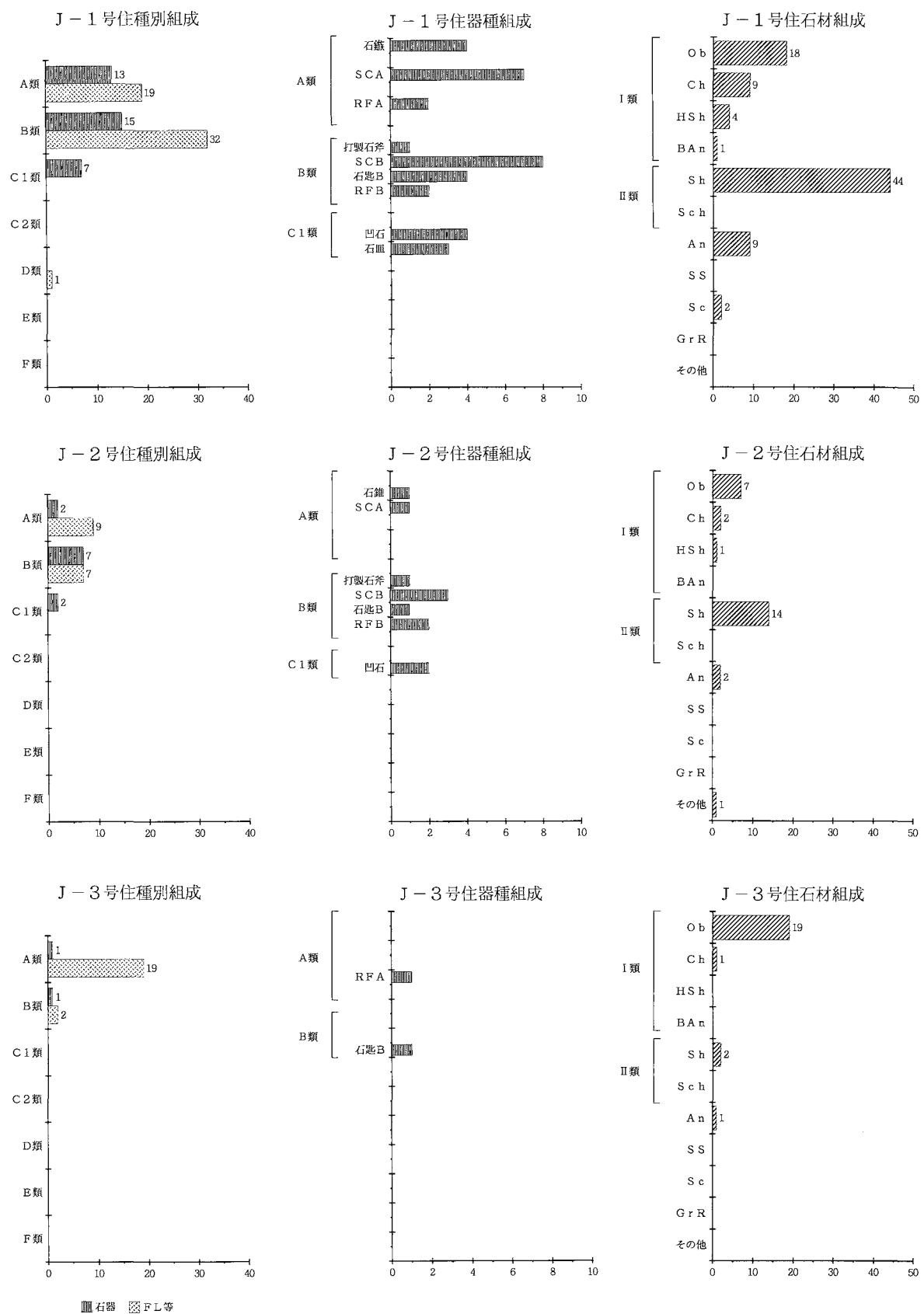
石材組成 遺跡全体としてみた場合、個数組成では第30図のとおり、I類とII類が多い傾向が顕著である。また、石材種別ごとの内訳をみると、I類では黒曜石が多く、次いでチャートである。II類は頁岩に限られる。安山岩（IIIa類）は数量としては少ないが、重量組成では圧倒的に大きな割合を占めている。IIIb類（砂岩）、V類（緑色岩類）が欠落している点を除けば、本地域の前期前半期の石材組成としては一般的な傾向を示している。

2) 石器各説

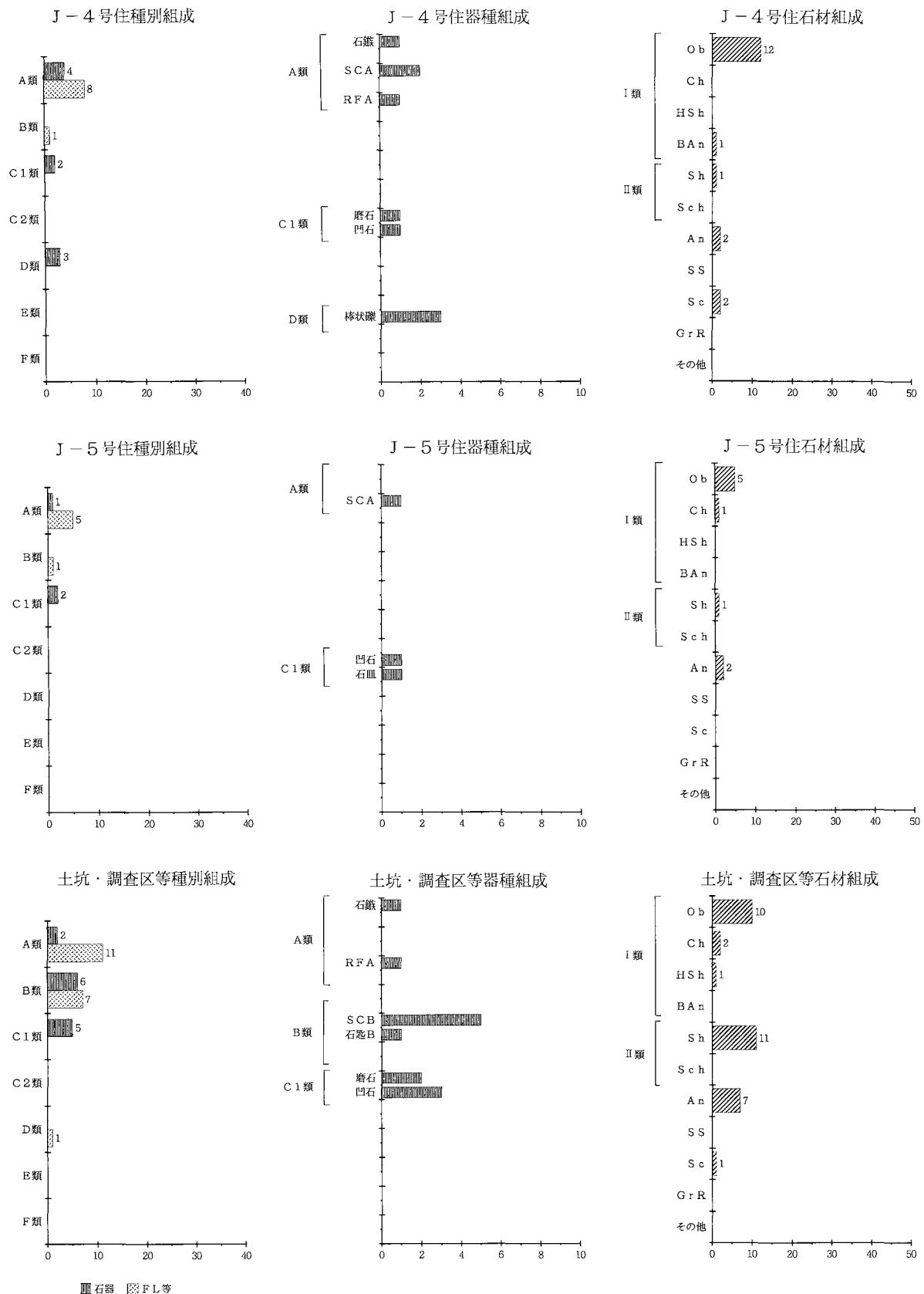
A類石器

石鏃（第32図1～5） 5点検出されている。内訳はI形態（凹基無茎）4点、II形態（平基無茎）1点である。石材は2を除きすべて黒曜石製である。

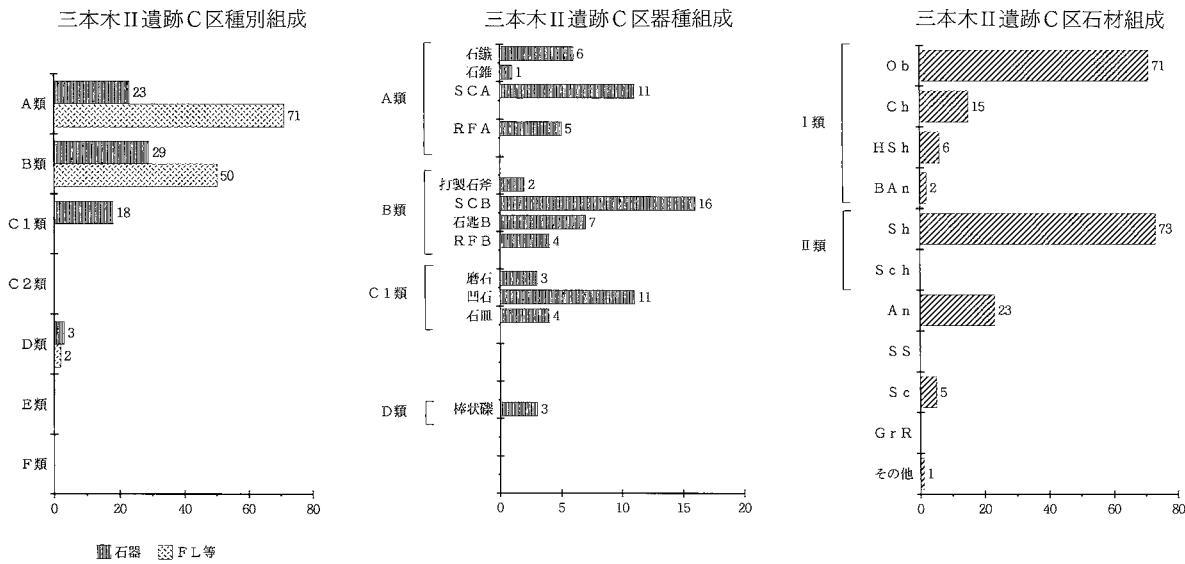
石鏃未成品（第32図8） 1点検出されている。II形態（平基無茎）の未成品とみられるが、あるいは



第29図 石器種別・器種・石材組成（1）



第30図 石器種別・器種・石材組成（2）



第31図 石器種別・器種・石材組成（3）

スクレイパーA類の一部の可能性もある。

石錐（第32図6） 1点のみ検出されている。定型的な石錐ではなく、スクレイパーA類（I a形態）の一部に錐部が作出されたような形状を呈する。黒曜石製である。

スクレイパーA類（第32図7～16） 11点検出されている。内訳はI a形態（凹圧剝離：9・11）3点、I b形態（直接打撃+凹圧剝離：7・10）2点、II形態（直接打撃：13・15）2点、III形態（縁辺微細調整：14・16）4点である。この器種の素材は多様な不定形剥片であり、特定の素材剥片が用いられる事はない。また、石材別では黒曜石3点、チャート5点、硬質頁岩3点である。チャートはII・III形態のみに用いられ、I a・I b形態では黒曜石・硬質頁岩のみが用いられ、形態と石材との間にある種の選択性が認められる。

リタッヂド・フレイクA類 図示していないが、スクレイパーA類同様多様な剥片である。石材別内訳は黒曜石3点、チャート2点である。

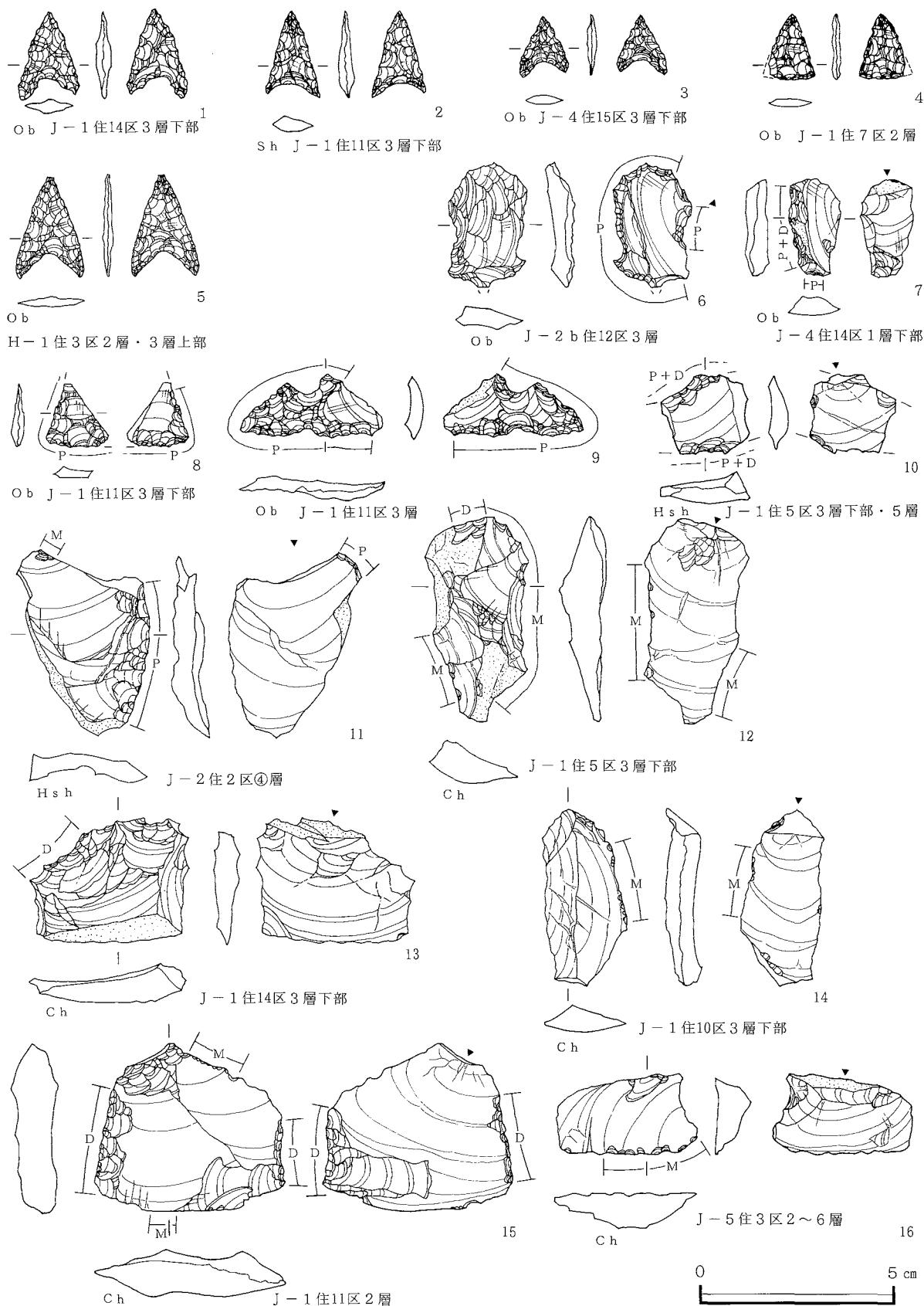
B類石器

打製石斧（第33図1・2） 2点検出されている。1はII形態（両面調整・階段状剝離多用・両刃）に分類される。大形で非常に特徴的な形態を呈するが、前期での類例は少ない。使用による刃部磨耗痕と剝離（刃こぼれ）が観察される。頁岩製である。2はI形態（断面蒲鉾形・片刃）に分類される。風化が著しい頁岩を用いている。

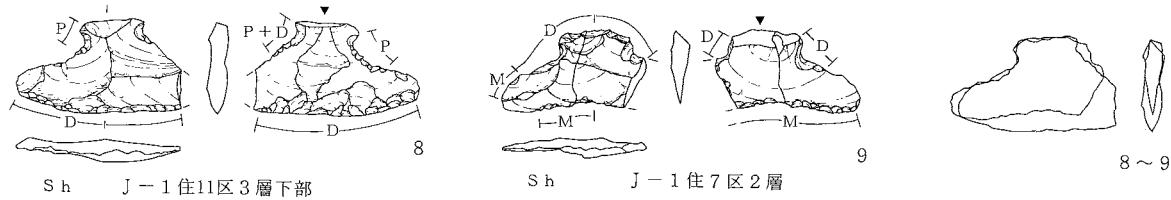
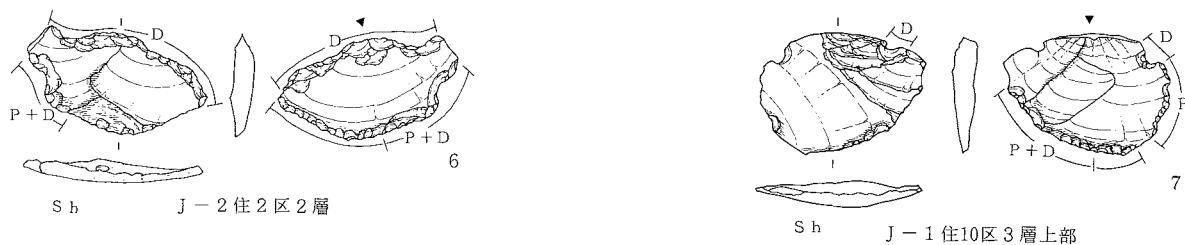
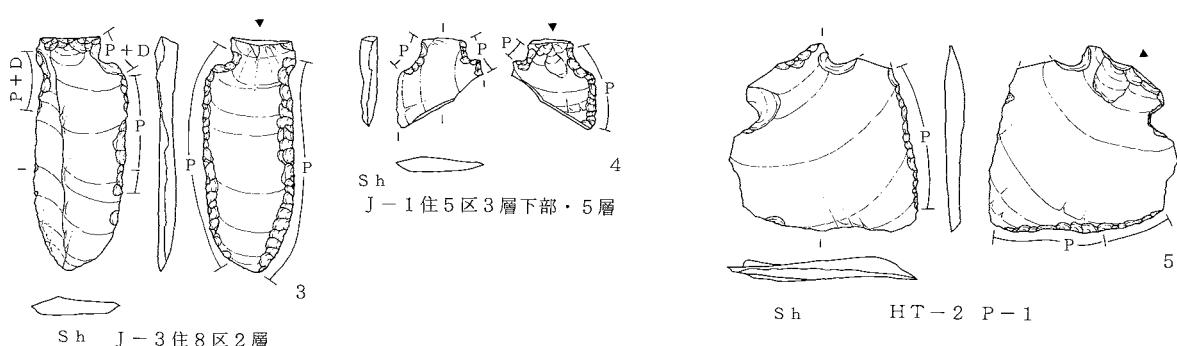
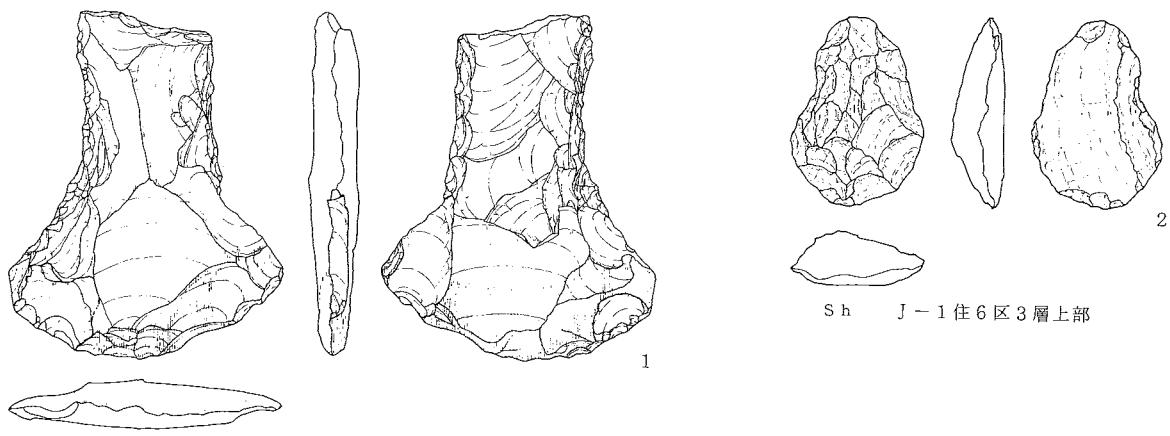
石匙B類（第33図3～9） 7点検出されている。形態別ではI a形態・縦形（3・4）2点、I a形態・横形（5）1点、I b形態・横形（6・7）2点、II形態・横形（8・9）2点である。

スクレイパーB類（第34図1～15） 16点検出されている。形態別ではI a形態（1～5）5点、I b形態（7・8）2点、II形態（6・9～13）6点、III形態（14・15）3点である。I a形態では形状の整った縦長剥片を用いた例（1・2）や横長剥片を用いた例（4）が認められるが、それ以外の形態では幅広不定形剥片が多用されている。なお、II形態では9～11のように幅広剥片を素材としたものに弱い範型が認められる。

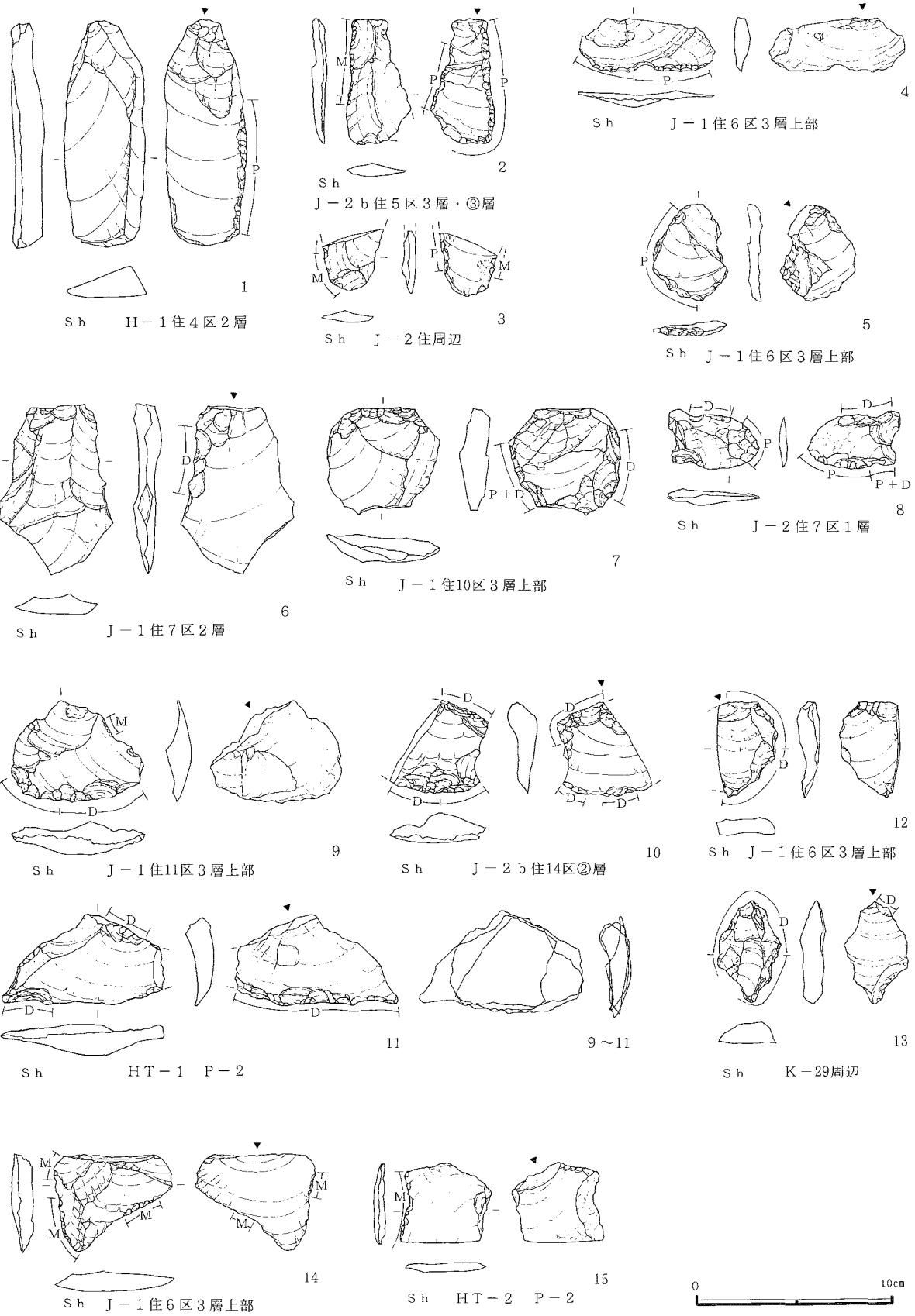
リタッヂド・フレイクB類 図示していないが4点検出されている。いずれも幅広不定形剥片を用いて



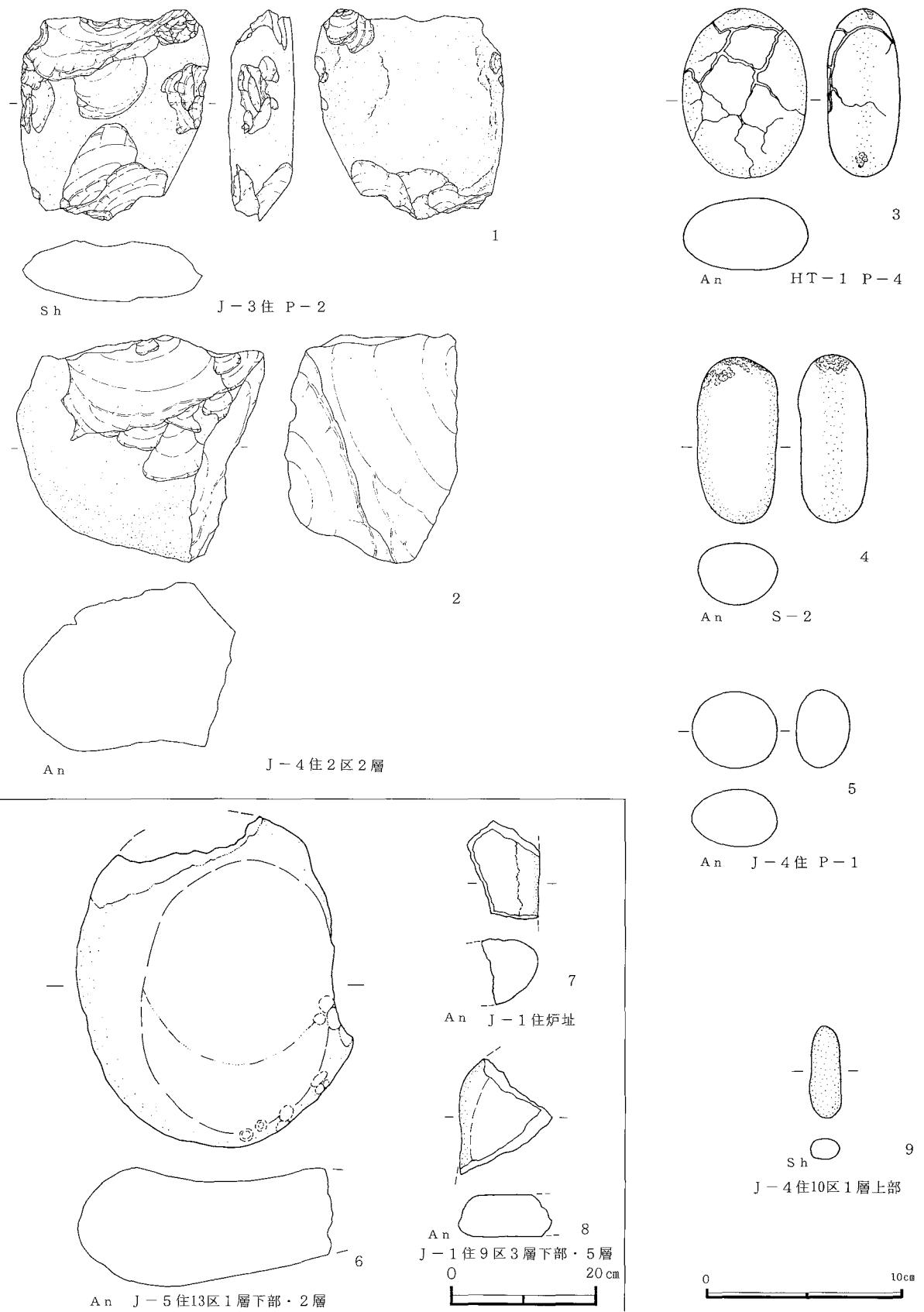
第32図 石器実測図 (1)



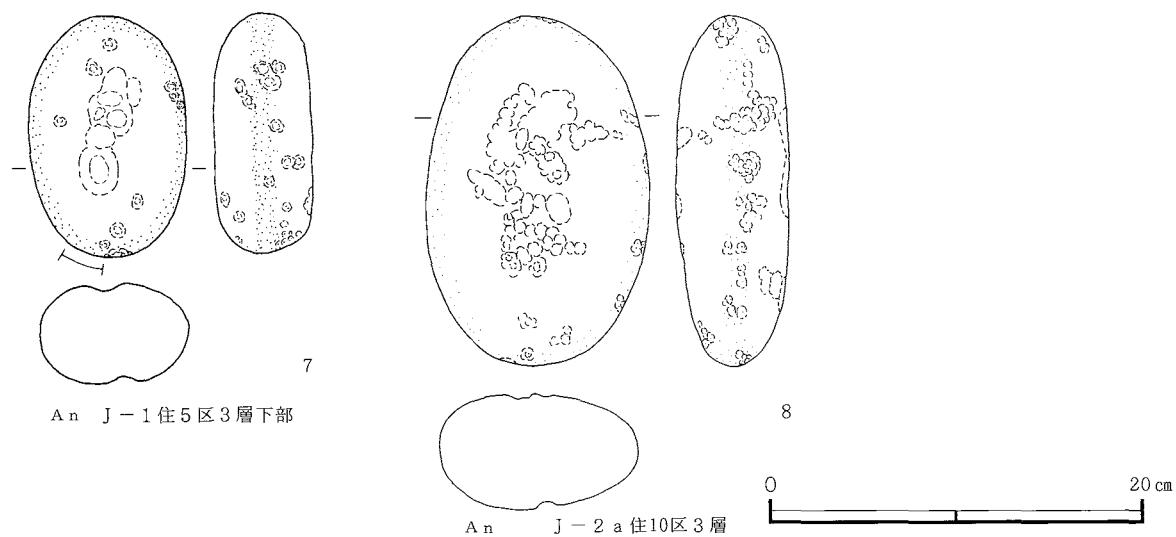
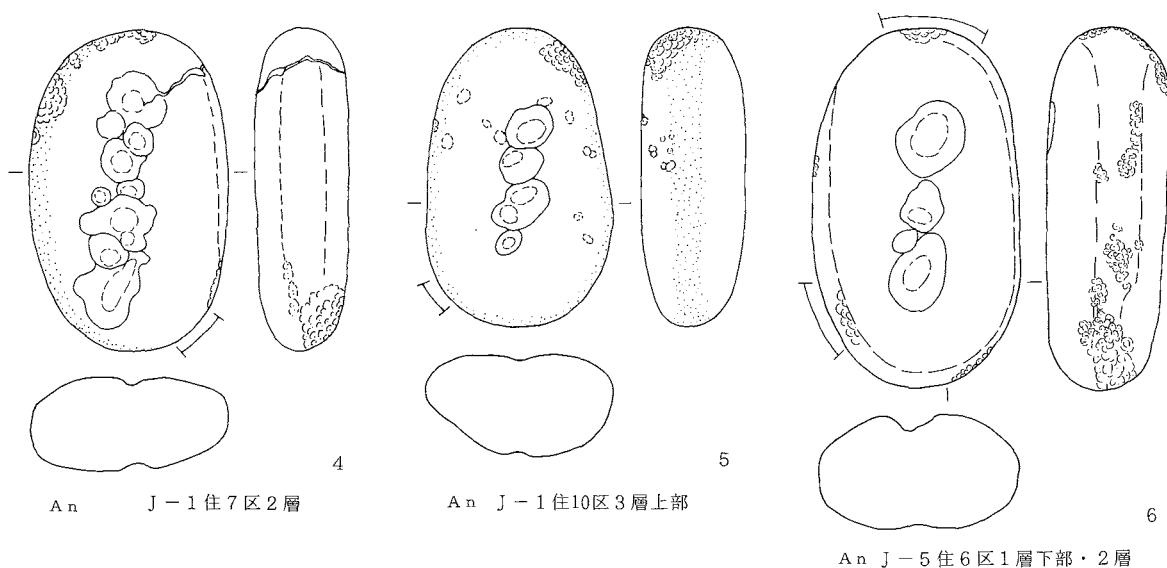
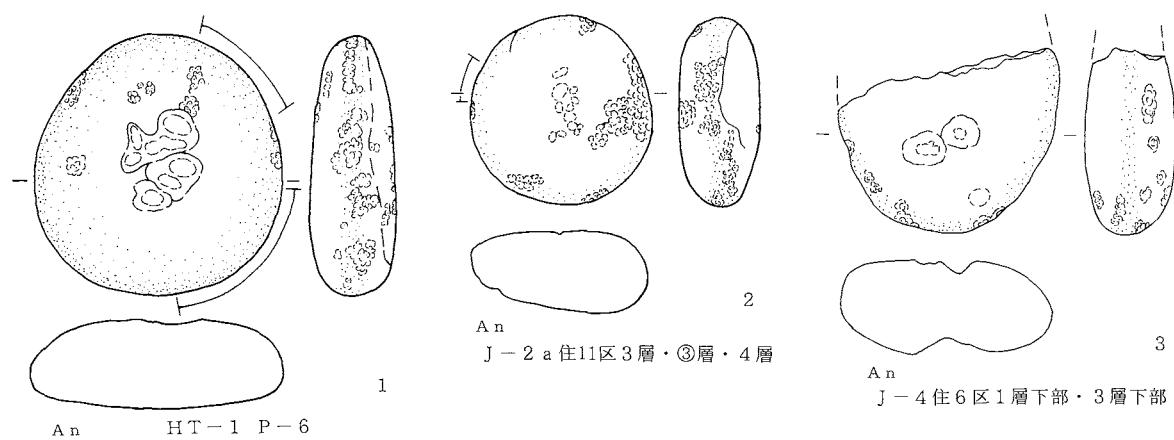
第33図 石器実測図 (2)



第34図 石器実測図 (3)



第35図 石器実測図 (4)



第36図 石器実測図（5）

おり、すべて頁岩製である。

石核B類（第35図1・2） 3点検出されている。図示した2例はいずれも打面と作業面を交互に入れ替え、幅広剝片を作出することを目的としている。スクレイパーB類では幅広剝片を素材とするものが多いことからみて、これらの石核はスクレイパーB類作出を目的としたものと判断される。

C 1類石器

磨石（第35図3～5） 3点検出されている。内訳はI形態（円形：5）1点、II形態（楕円形：3・4）2点である。すべて安山岩製である。

凹石（第36図1～8） 11点検出されている。内訳はIa形態（円形・磨→凹：1）1点、Ib形態（円形・凹→磨：2）1点、IIa形態（楕円形・磨→凹：3～6）4点、IIb形態（楕円形・凹→磨：8）1点、II形態（楕円形）1点、Vc形態（不定形・凹のみ）1点である。このうち8点に被熱の痕跡が観察された。また、欠損しているものは2点と少ない。石材はすべて安山岩製である。IIb形態が圧倒的に多いことが一般的であるのに対し、本遺跡ではIIa形態が卓越している点が大きな特徴である。凹石の使用サイクルの中で、本遺跡では「磨る」行為より、「叩く」行為が行われた頻度が極めて高かったことに帰因すると考えられる。

石皿（第35図6～8） 4点検出されている。6はIIa形態（楕円形・作業面凹面）で、安山岩製である。残り3点は破片で形態は不明である。結晶片岩製の1点を除き安山岩製である。

D類石器

棒状礫（第35図9） 3点検出された。棒状を呈した自然礫であるが、遺跡へ搬入されたものである。内訳は結晶片岩製2点、頁岩製1点である。中原遺跡・東畠遺跡・吉田原遺跡・大下原遺跡など本地域の前期の遺跡では、普遍的に存在しており、何らかの用途に用いられた「道具」と推定される。

（大工原 豊）

（2）平安時代

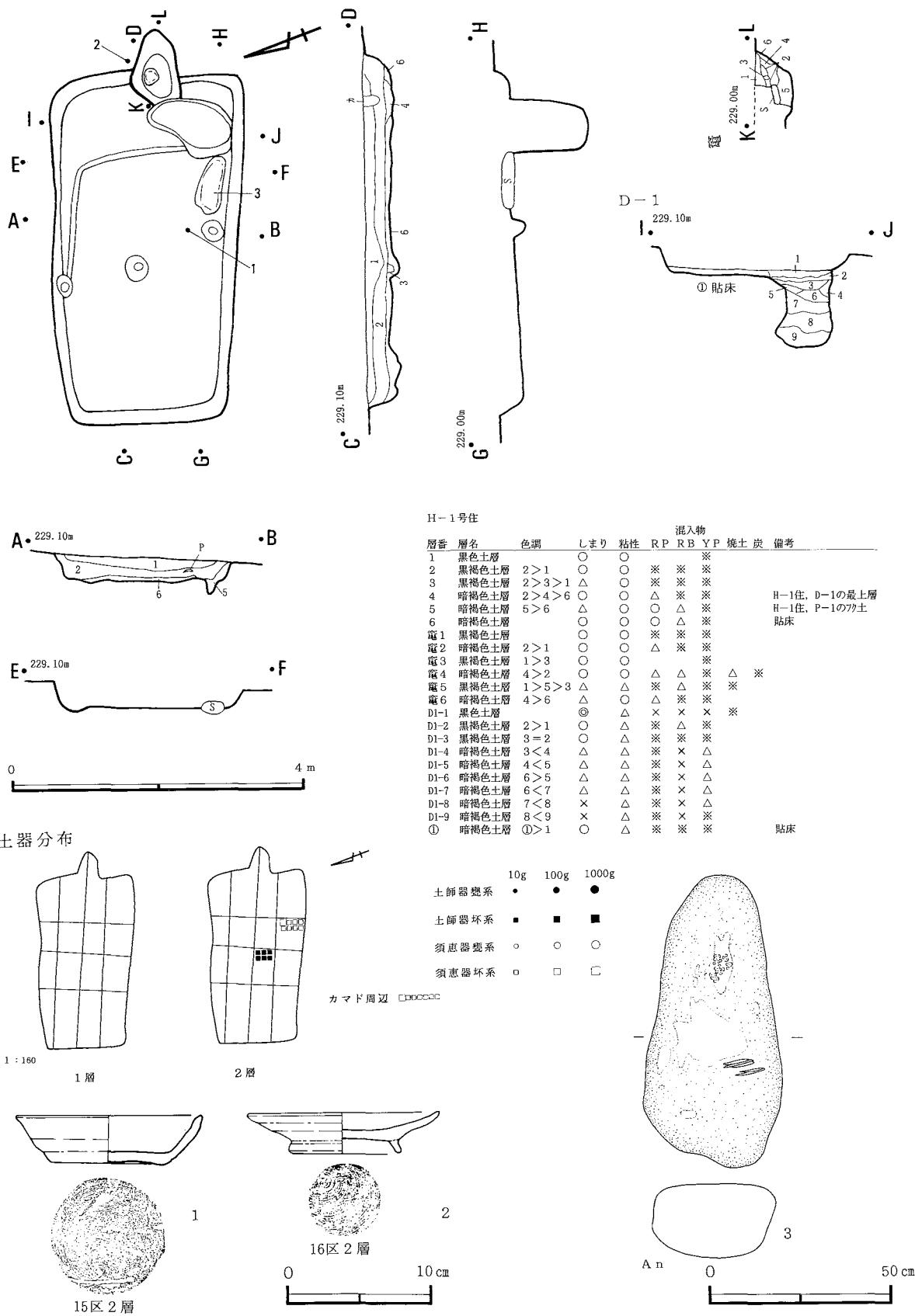
a 遺構

平安時代のものと考えられる住居址1軒とピット群、2本の溝址が検出されている。ピット群のピットは掘り込みが深く、掘立柱建物の柱穴と考えられたが、1軒を除いて建物配置を明確に捉えることはできなかった。

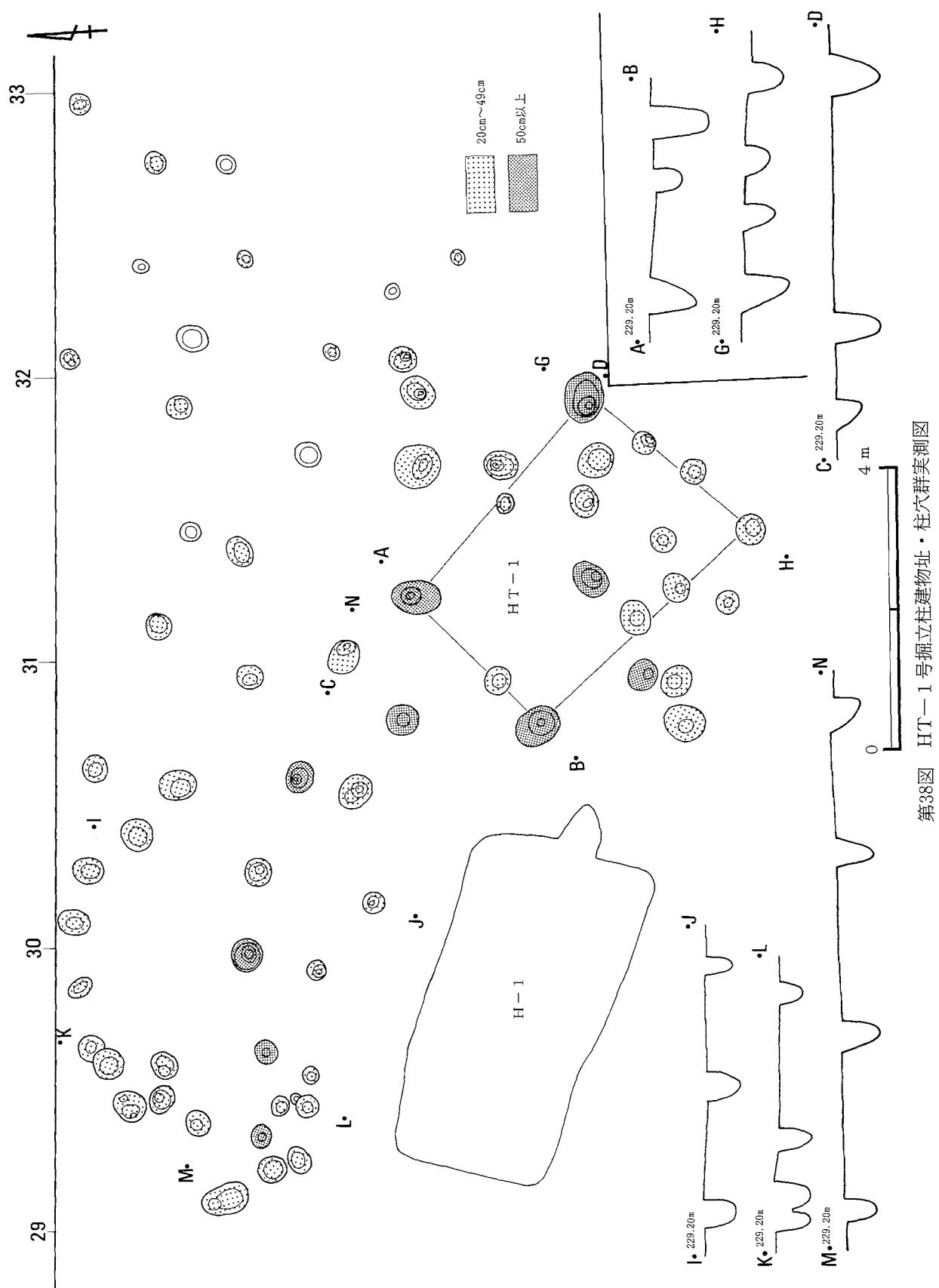
H-1号住居址（第37図）

平面長方形の竪穴で、周溝は認められない。また、柱穴も認められない。竪穴内部の竈付近はほかの床と比べ一段掘り窪められており、北側壁の中央から浅い溝がこの窪に向かって連結されている。また、この窪みに伴って、竈右側に1m強の深さを持つ土坑の存在が認められる。この土坑に接して床上に1m50cm大の台石が置かれており、何らかの作業台として機能していたと考えられる。これらの状況から、この竪穴は一般的の住居とは異なり、何らかの作業を行った工房的な性格をもっていたと考えられる。

遺物出土状態 土器の出土状態を見ると、完形の須恵器壺（1）は台石に隣接して、同じく須恵器皿は竈の上縁部から遺棄された状態で出土している。また、それ以外の破片類は土坑周辺の部分にやや多く偏在しているが、流れ込みに近い状況を呈している。



第37図 H-1号住居址実測図



第38図 HT-1号掘立柱建物址・柱穴群実測図

H T—1号掘立柱建物址（第38図）

H T—1号掘立柱建物址は2間×1間の建物と判断される。柱穴は深くしっかりとしたものである。
 柱穴群（第38図） H—1号住居址の周辺には無数の同時期と考えられる柱穴群が認められたが、明確に掘立柱建物址として捉えられたものはほとんどない。工房址と推定されるH—1号住と関連する遺構とみられる。

（林 克彦）

b 遺物

土器

H—1号住居址から土師器・須恵器が出土している。土師器は甕・壺の小破片が多い。また、須恵器では遺棄されたと判断される完形の壺（1）、皿（2）が各1点出土している。これらの土器は8世紀後半のものと判断される。

石器

台石（第37図3） H—1号住居址内に据え置かれていた大形の台石である。表面には作業による平滑面と敲打痕が観察されるが、いずれも弱い。安山岩製である。

（大工原 豊）

項目 遺構名	平面形態	規模 (m)			床面	壁溝	土坑 (床下)	主軸方向	時 期
		長軸	短軸	深さ					
H—1号住	中形縦長方形	4.7	2.5	0.4	貼床	なし	1	N—119°—E	9世紀第3四半期

項目 遺構名	形 態	規模 (m)		柱 間				主軸方向	時 期
		長軸	短軸	北辺	南辺	東辺	西辺		
H T—1建物	1間×2間	3.8	2.7	2.5	2.9	1.8	2	N—40°—W	不明

第5表 三本木II遺跡、平安時代住居址・掘立柱建物址観察表

3 三本木III遺跡

(1) 平安時代

a 遺構

この時代の遺構としては、住居址が4軒と柱穴群1ヵ所が検出されている。

H-2号住居址（第39図）

平面正方形で、周溝が認められる。竈は東竈で東壁やや南側に付けられており、竈右側には土坑が認められる。主柱穴は認められない。貼り床下部から2基の床下土坑が検出されている。

遺物出土状態 完形の遺物は出土しておらず、遺棄された形跡は認められない。復元可能個体の分布をみると、土師器壺・同甕、須恵器壺が、壁寄りの場所から出土している。それ以外の破片の分布では、土師器甕系の破片は竈周辺に、須恵器壺系では南壁部分に、須恵器甕系では北西部にそれぞれ偏在する傾向が認められる。

H-3号住居址（第40図）

2軒の重複が認められる住居址である。東竈の住居址は平面正方形で周溝を持たない。竈は壁の南側に付けられており、竈右側には土坑が認められる。土坑の覆土からは拳大の礫が3点検出されている。北竈の住居址は平面長方形で、部分的に周溝を持つ。竈は壁の東側に付けられており、構築材は礫である。土坑は認められない。床下土坑が1基存在するが、どちらの住居址に伴うものかは明確ではない。

遺物出土状態 完形の遺物は出土しておらず、遺棄された形跡は認められない。破片の分布状況を検討すると、土師器甕が竈1・竈2周辺に集中する。また、須恵器壺系の破片も同様な分布傾向を示している。

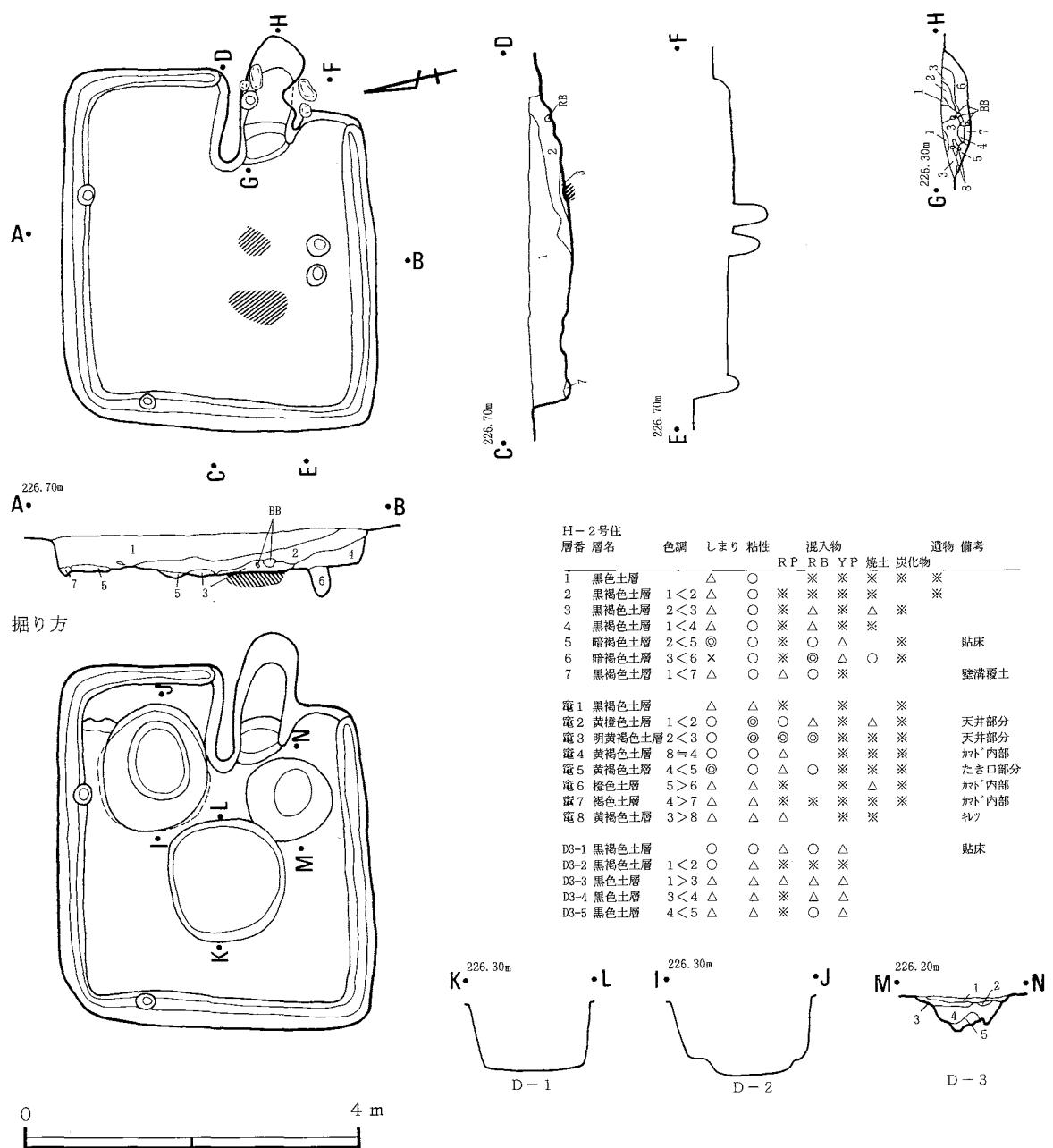
H-4号住居址（第41図）

H-4号住居址は中世の溝によって東側部分を壊されており、依存状態は良好ではない。中世の溝の底面に竈底部の被熱部分が認められたため、住居のおおよその規模は推定される。この住居址は平面長方形で、周溝が認められる。東竈は東壁の南側に付けられており、竈の右側に土坑が認められる。また、住居址南西隅にこれと同様な形態の土坑が認められる。主柱穴は認められない。

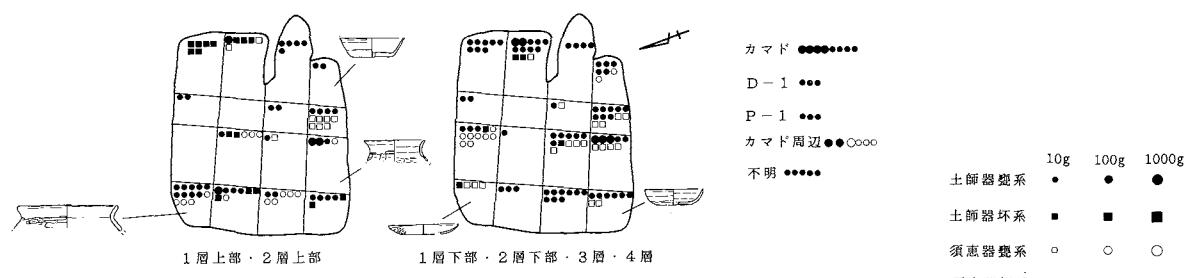
遺物出土状態 ほぼ完形の須恵器壺が10区及びD-1号土坑よりそれぞれ1点出土しているが、それ以外は破片であり、遺棄された状態とは異なる。破片の分布状態をみると、各器種とも住居址全体に分布するが、竈の南側にやや集中する傾向が認められる。

H-5号住居址（第42図）

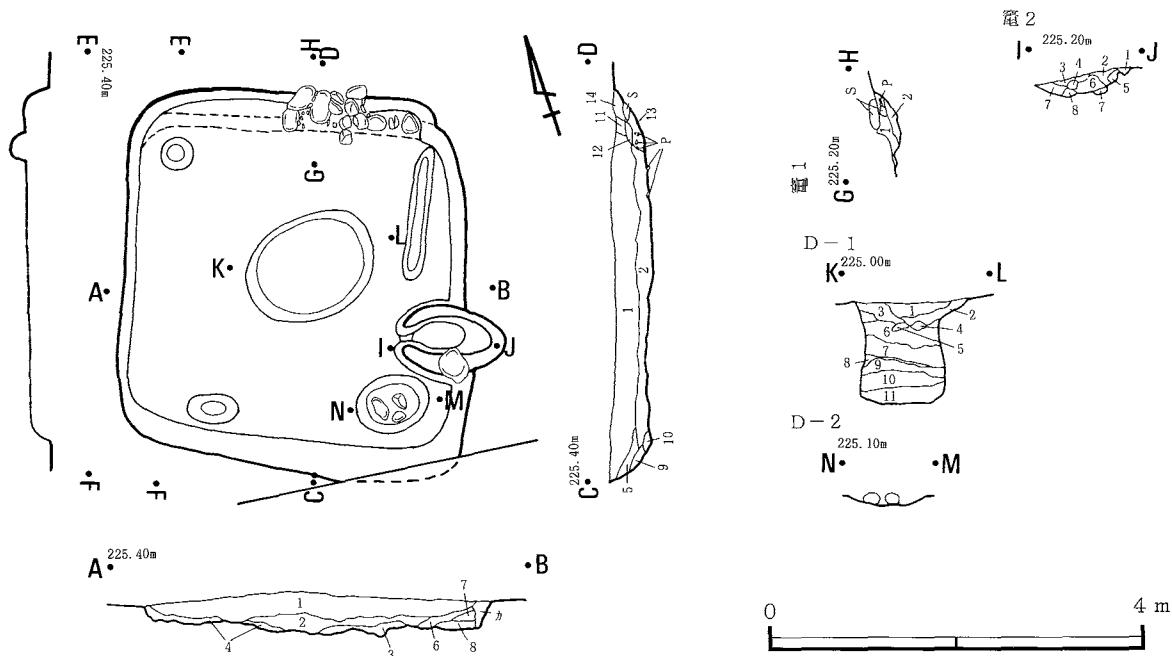
平面正方形で、周溝が認められる。主柱穴は認められない。竈は東壁の南側に付けられており、竈の右側に土坑が認められる。また、住居址中央に同様な規模の土坑が2基認められる。竈の残りは非常によく、天井部分が崩落しないで残っていた。煙道の煙出し付近には土師器の甕をもちいていた。この住居址からは鉄滓が多数検出されている。



土器分布



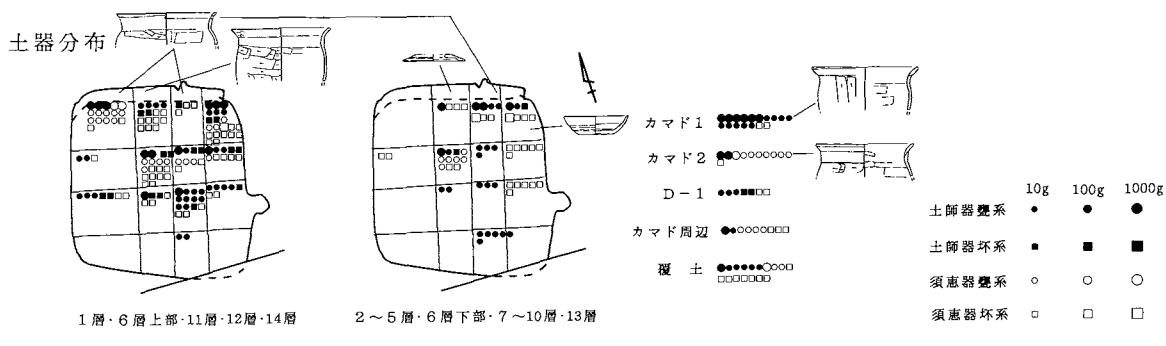
第39図 H-2号住居址実測図



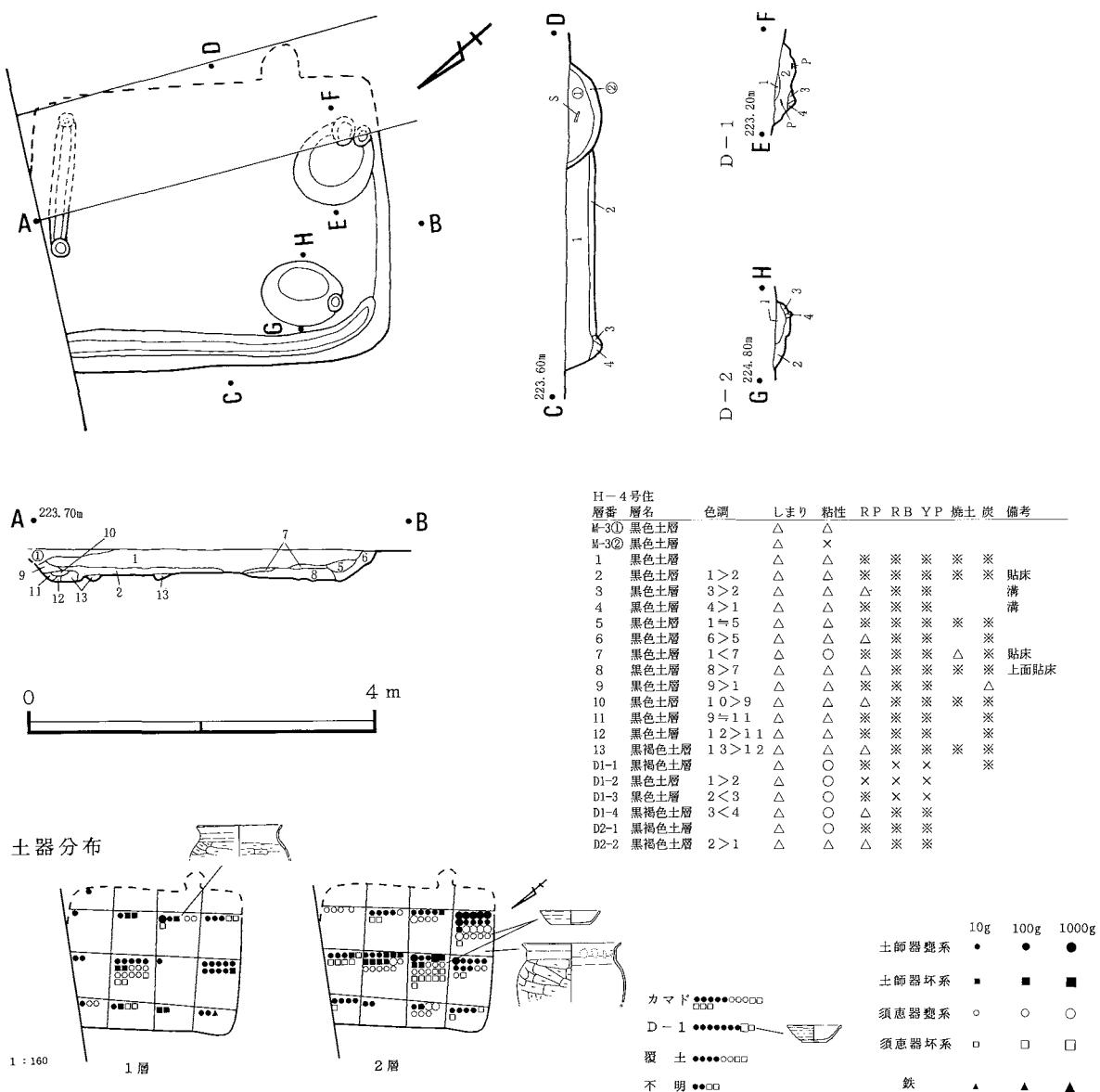
H-3号住

層番	層名	色調	しまり	粘性	R P	R B	Y P	焼土	炭	遺物	備考
1	黒褐色土層		△	△	※	※	※				
2	黒褐色土層	1 ≈ 2	△	△	※	△	※	※	※		
3	黒褐色土層	2 ≈ 3	△	△	※	※	※	※	△ φ1~3cm		
4	黒褐色土層	4 > 1	△	△	△	※	※	※	※		
5	黒褐色土層	1 > 5	△	△	※	※	※	※			
6	黒褐色土層	6 > 1	△	△	※	※	※	△	※		
7	黒褐色土層	7 < 6	△	△	※	※	※				
8	黒褐色土層	8 > 7	△	○	※	※	※	※	※		
9	黒褐色土層	9 > 2	△	○	※	※	※				
10	黒褐色土層	10 > 9	○	○	※	※	※				IV層のプロフ
11	黒褐色土層	11 > 1	△	△	※	※	※	※	※	炉址2	
12	黒褐色土層	12 > 11	△	△	※	※	※	※	※	炉址2	
13	黒褐色土層	13 > 12	△	△	※	※	※	※	※	△	

層番	層名	色調	しまり	粘性	R P	R B	Y P	焼土	炭	遺物	備考
D1 1	黒褐色土層		△	△	△	※	※	※	※		
D1 2	黒褐色土層	2 < 1	△	△	※	※	※	※	※		
D1 3	褐色土層	3 > 1	△	△	○	○	○	※	※	※	
D1 4	黒褐色土層	4 > 2	△	△	△	○	※	△	※		
D1 5	褐色土層	5 > 4	△	△	○	△	※	○	※		
D1 6	暗褐色土層	6 > 4	△	△	△	※	※	△	※		
D1 7	黒褐色土層	7 > 4	△	△	※	※	※	※	※		
D1 8	暗褐色土層	8 > 7	△	△	△	※	※	○	※		
D1 9	黒褐色土層	9 < 6	△	△	△	△	※	※	※		
D1 10	黒褐色土層	10 > 9	△	○	×	×	×	×	×	×	
D1 11	黒褐色土層	11 > 10	△	○	※	※	※	※	※	※	
D2 1	黒褐色土層		△	○	×	×	×	×	×	×	
D2 2	黒褐色土層	1 < 2	△	○	※	※	※	※	※	※	
D1 1	黒褐色土層	◎	◎	※	※	※	※				
D1 2	黒褐色土層	1 < 2	◎	◎	※	※	※	※			
D1 3	褐色土層	2 < 3	△	△	△	※	△				
D1 4	褐色土層	2 < 4	○	○	△	×	△				
D1 5	褐色土層	3 > 5	○	○	※	※	※				
D1 6	明黃褐色土層	4 < 6	×	×	※	※	◎				
D1 7	黒褐色土層	6 > 7	×	×	※	※	△				
D1 8	明黃褐色土層	8 > 9	×	×	※	※	※	◎			
D1 9	黒褐色土層	9 > 9	×	×	※	※	※	※			
D1 10	明黃褐色土層	9 < 10	×	×	※	※	※	○			
D1 11	明黃褐色土層	10 > 11	×	×	※	×	※	※	※		



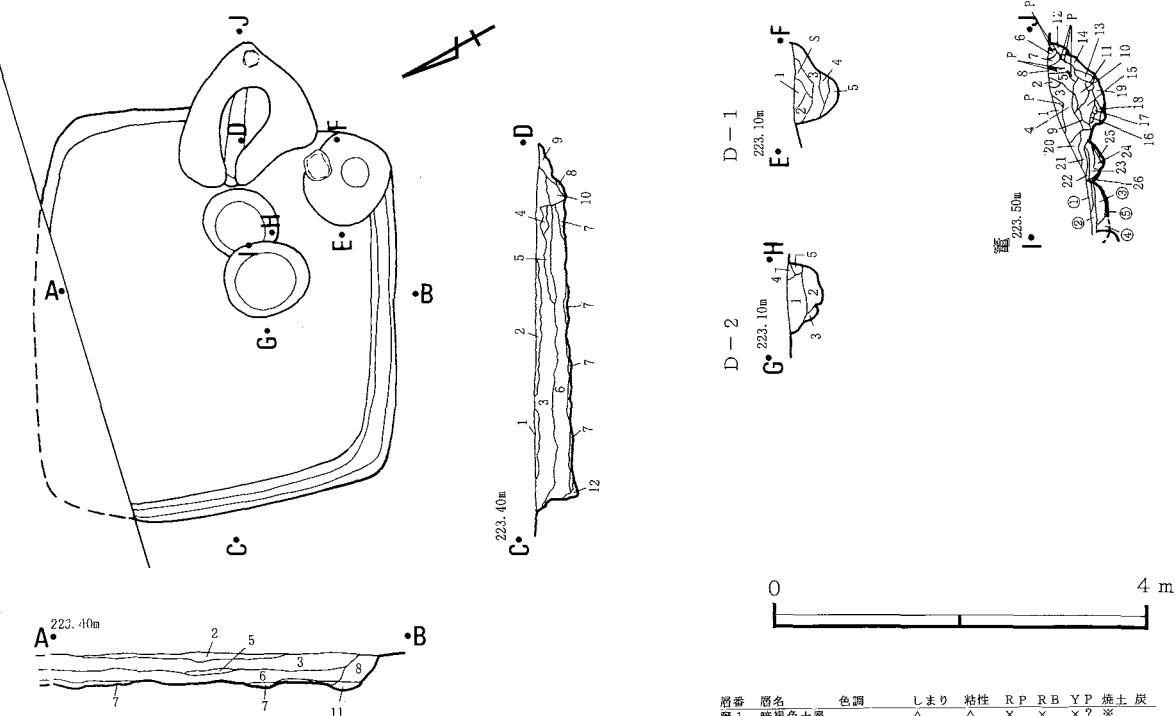
第40図 H-3号住居址実測図



第41図 H-4号住居址実測図

項目 住居名	平面形態	規模 (m)			床面	壁溝	竈		土坑 (床下)	主軸方向	時期
		長軸	短軸	深さ			構造	主軸方向			
H-2号住	中形縦長方形	4.3	3.7	0.5	貼床	○	粘土	N-110.5°-E	(3)	N-106.5°-E	9世紀第1四半期
H-3(a)号住	中形縦長方形	4.0	(3.2)	0.4	—	—	石組	N-26.5°-E	2(1)	N-21.5°-E	8世紀第2四半期
H-3(b)号住	小形正方形	(3.7)	3.6	—	—	—	粘土	N-114.5°-E	—	N-111.5°-E	9世紀第3・4四半期
H-4号住	中形横長方形	(3.9)	(3.2)	0.2	貼床	○	—	—	(2)	N-130.5°-E	9世紀第3四半期
H-5号住	中形正方形	4.2	(3.8)	0.3	貼床	○	粘土	N-127.5°-E	3(2)	N-122.5°-E	9世紀第4四半期

第6表 三本木III遺跡住居址観察表



層番	層名	色調	しまり	粘性	R P R B Y P				焼土	炭	遺物	備考
					R	P	R B	Y P				
1	黒褐色土層	3 > 1	△	○	※	※	※	※	※	※	※	※
2	黒褐色土層	2 > 3	△	○ ○	△	△	△	※	※	※	※	※
3	蒸蒸褐色土層	3 < 5	△	○ ○ ○	△	※	※	※	※	※	※	※
4	黒褐色土層	4 > 3	△	○ ○ ○	△	※	※	※	※	※	※	※
5	暗褐色土層	5 > 6	○	○ ○ ○	△	※	△	○ ○ ○	△	△	△	△
6	黒褐色土層	6 < 7	△	○ ○ ○	△	※	△	○ ○ ○	△	△	△	△
7	黒褐色土層	7 > 1 0	○	○ ○ ○	△	※	△	○ ○ ○	△	△	△	△
8	黒褐色土層	8 < 2	△	○ ○ ○	△	※	△	○ ○ ○	△	△	△	△
9	暗褐色土層	9 > 1 0	○	○ ○ ○	△	※	△	○ ○ ○	△	△	△	△
10	黒褐色土層	10 < 7	○	○ ○ ○	△	※	△	○ ○ ○	△	△	△	△
11	黒褐色土層	8 < 1 1	△	○ ○ ○	△	※	△	○ ○ ○	△	△	△	△
12	黒褐色土層	7 < 1 2	△	○ ○ ○	△	※	△	○ ○ ○	△	△	△	△

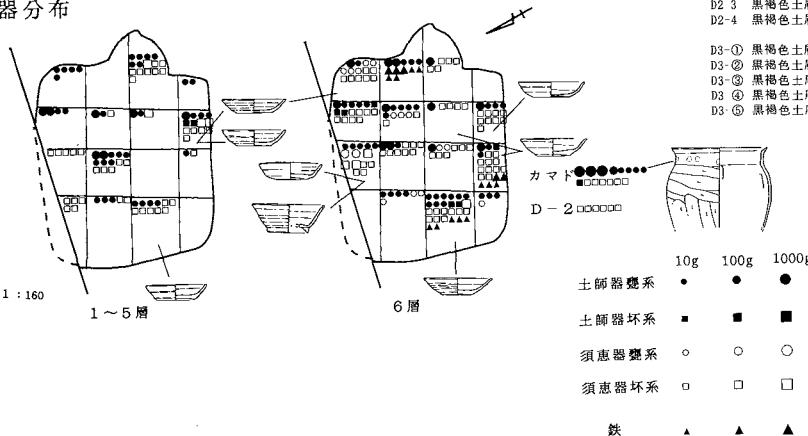
層番	層名	色調	しまり	粘性	R	P	R B	Y P	焼土	炭	遺物	備考
竈1	暗褐色土層	△	△	△	×	×	×	?	※	※	※	※
竈2	暗褐色土層	2 > 1	△	△	△	※	※	※	?	※	※	※
竈3	黒褐色土層	3 < 1	△	△	△	△	△	△	?	※	※	※
竈4	黒褐色土層	4 > 3	△	△	△	△	△	△	?	※	※	※
竈5	褐色土層	5 > 2	△	△	△	△	△	△	?	?	○	※
竈6	褐色土層	6 > 2	△	△	△	△	△	△	?	?	○	※
竈7	黒褐色土層	7 < 6	△	△	△	△	△	△	?	?	△	※
竈8	褐色土層	8 > 7	△	△	△	△	△	△	?	?	○	※
竈9	黒褐色土層	9 > 3	△	△	△	△	△	△	?	?	○	※
竈10	黒褐色土層	10 > 8	△	△	△	△	△	△	?	?	○	※
竈11	黄褐色土層	1 1 > 1 0	△	△	△	△	△	△	?	?	△	※
竈12	黄褐色土層	1 2 < 1 4	△	△	△	△	△	△	?	?	○	※
竈13	褐色土層	1 3 < 1 1	△	△	△	△	△	△	?	?	○	※
竈14	黒褐色土層	1 4 > 1 3	△	△	△	△	△	△	?	?	○	※
竈15	褐色土層	1 5 < 1 1	△	△	△	△	△	△	?	?	○	※
竈16	黄褐色土層	1 6 > 1 5	△	△	△	△	△	△	?	?	○	※
竈17	黒褐色土層	1 7 < 1 6	△	△	△	△	△	△	?	?	○	※
竈18	黒褐色土層	1 8 < 1 7	△	△	△	△	△	△	?	?	○	※
竈19	黒褐色土層	1 9 < 1 8	△	△	△	△	△	△	?	?	○	※
竈20	黒褐色土層	2 0 < 2 3	△	△	△	△	△	△	?	?	○	※
竈21	黒褐色土層	2 1 < 2 0	△	△	△	△	△	△	?	?	○	※
竈22	黒褐色土層	2 2 > 2 1	△	△	△	△	△	△	?	?	○	※
竈23	黒褐色土層	2 3 < 2 2	△	△	△	△	△	△	?	?	○	※
竈24	黒褐色土層	2 4 > 2 3	△	△	△	△	△	△	?	?	○	※
竈25	黒褐色土層	2 5 < 2 4	△	△	△	△	△	△	?	?	○	※
竈26	黒褐色土層	2 6 < 2 3	△	△	△	△	△	△	?	?	○	※

D1-1	黒色土層	△	○	×	×	×	×	※	※	※	※	※
D1-2	黒色土層	1 > 2	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○
D1-3	黒色土層	2 < 3	△	△	○	○	○	○	○	○	○	○
D1-4	黒色土層	3 < 4	△	△	○	○	○	○	○	○	○	○
D1-5	黒色土層	4 > 5	△	△	○	○	○	○	○	○	○	○

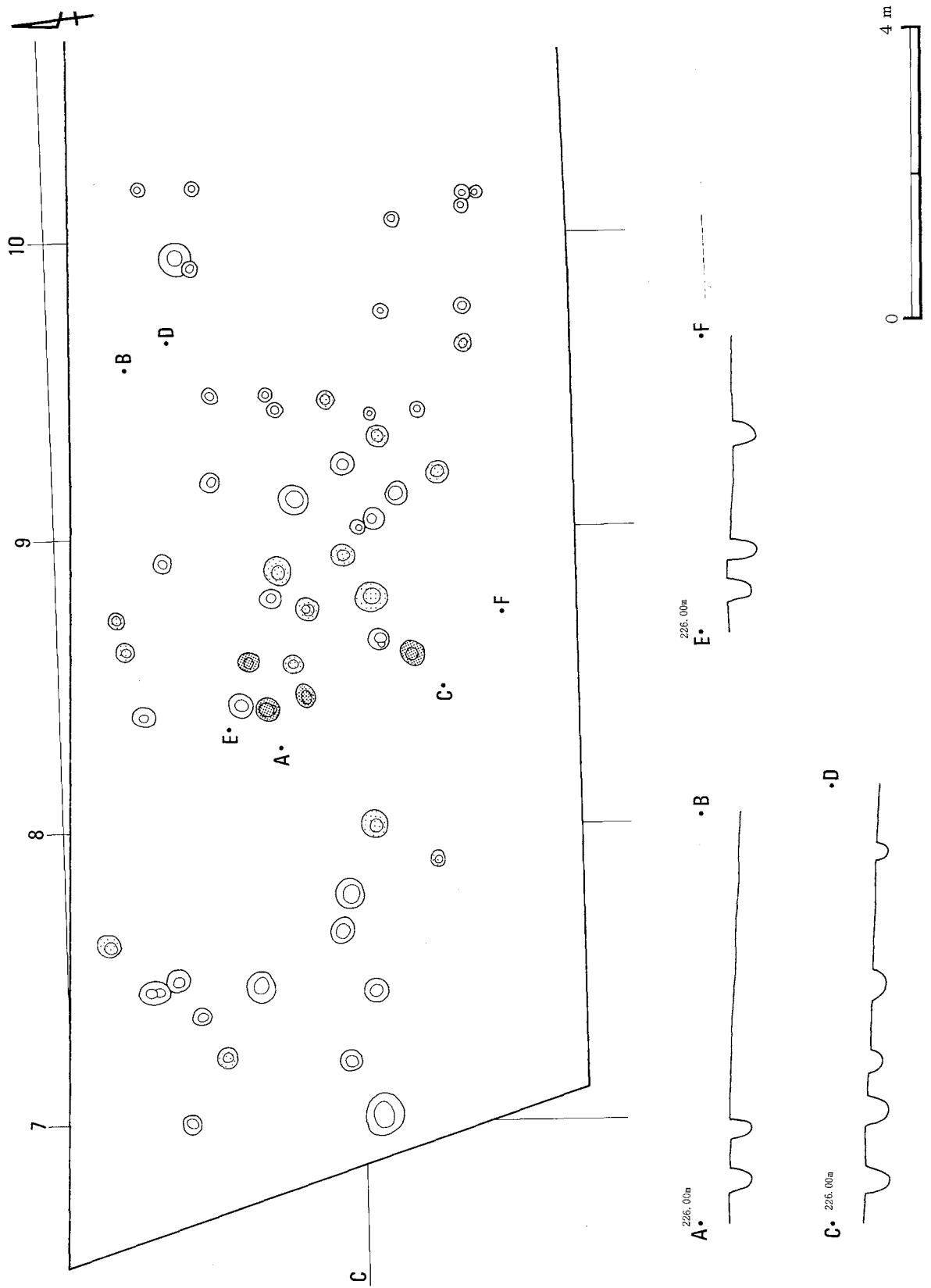
D2-1	黒色土層	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
D2-2	黒褐色土層	2 > 1	△	△	△	△	△	○	○	○	○	○
D2-3	黒褐色土層	3 < 2	△	△	△	△	△	○	○	○	○	○
D2-4	黒褐色土層	4 > 3	△	△	△	△	△	○	○	○	○	○
D2-5	黒褐色土層	5 > 4	△	△	△	△	△	○	○	○	○	○

D3-①	黒褐色土層	△	○	○	○	○	○	○	○	○	?	?
D3-②	黒褐色土層	2 > 1	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
D3-③	黒褐色土層	3 < 2	△	△	△	△	△	○	○	○	○	○
D3-④	黒褐色土層	4 > 3	△	△	△	△	△	○	○	○	○	○
D3-⑤	黒褐色土層	5 > 4	△	△	△	△	△	○	○	○	○	○

土器分布



第42図 H-5号住居址実測図



第43図 柱穴群実測図

遺物出土状態 比較的多くの遺物が出土しているが、完形遺物は出土しておらず、廃棄された状態を示している。破片の分布状態をみると、須恵器壺・碗は全体から出土しており、特別な傾向は認められない。また、竈からは土師器甕の大形破片がまとめて出土している。鉄滓が5点検出されているが、特別な出土傾向は認められない。

柱穴群（第44図）

遺跡の西端で柱穴群が検出されているが、掘立柱建物のような柱穴配置を取るものではなく、その性格は明確ではない。調査区の性格上、部分的にしか検出されていないものと考えられ、あるいは掘立柱建物の一部の可能性もある。

(林 克彦)

b 遺物

土器

平安時代の遺物としては、土師器壺・甕、須恵器壺・甕等が出土している。以下、各住居址の器種構成及び器種の特徴等について述べる。

H-2号住居址（第44図上段） 土師器壺・甕、須恵器壺・甕が出土している。土師器の壺と甕の特徴から、9世紀第1四半期～9世紀第2四半期のものと推定される。

H-3号住居址（第44図中段） 土師器壺・甕、須恵器壺・甕が出土している。土師器甕と須恵器壺の特徴から、9世紀第2四半期のものと推定される。

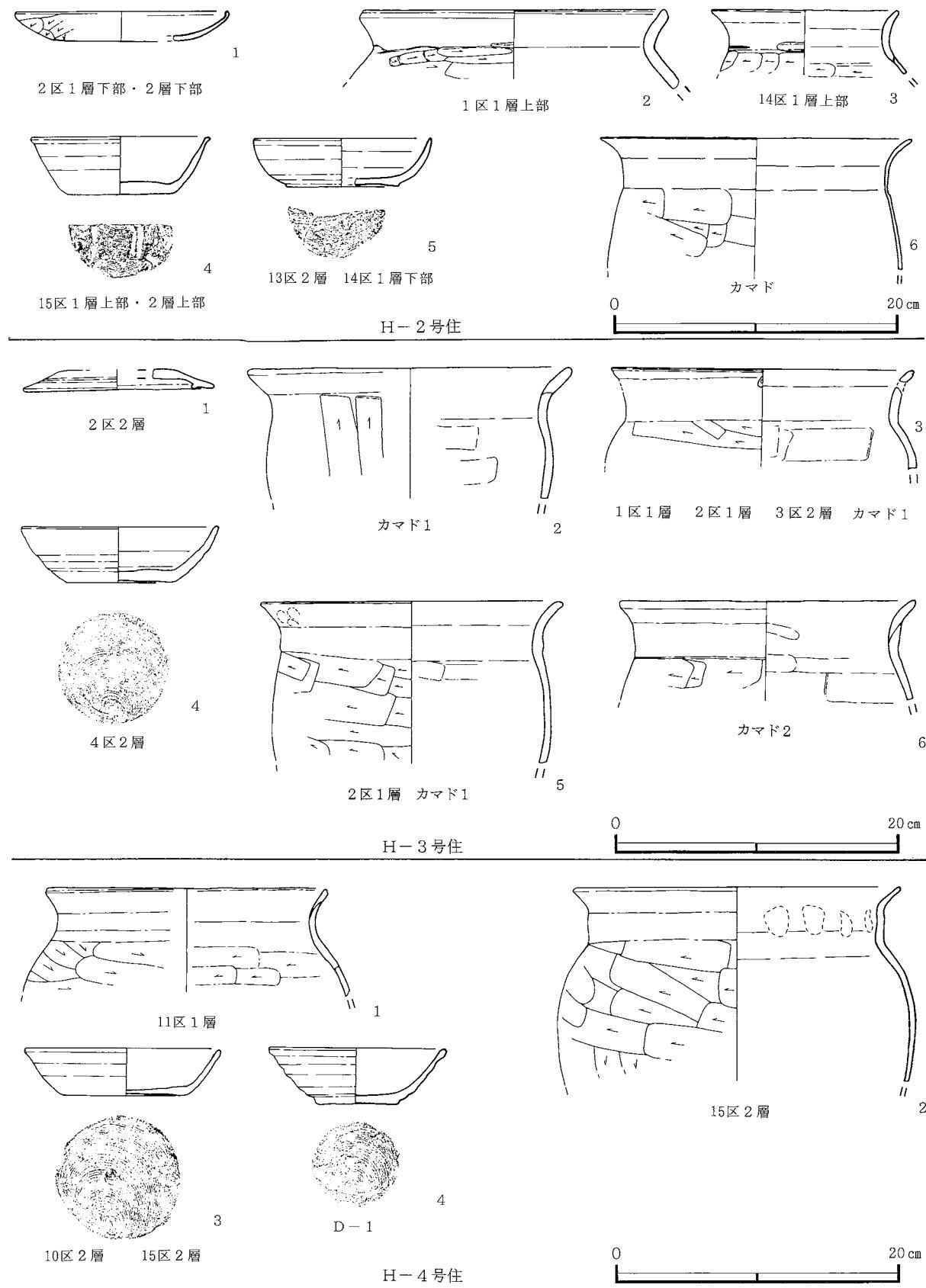
H-4号住居址（第44図下段） 土師器壺・甕、須恵器壺・甕が検出しており、土師器甕は「コの字」状への変化がうかがえる。これら須恵器壺との器種組成から、9世紀第2四半期～9世紀第3四半期のものと考えられる。

H-5号住居址（第45図1～9） 土師器壺・甕、須恵器壺・甕が検出されているが、土師器壺と須恵器甕は数点の土器片のみである。従って器種組成、須恵器壺と土師器甕の器形の特徴から、9世紀第3四半期～9世紀第4四半期と推定される。

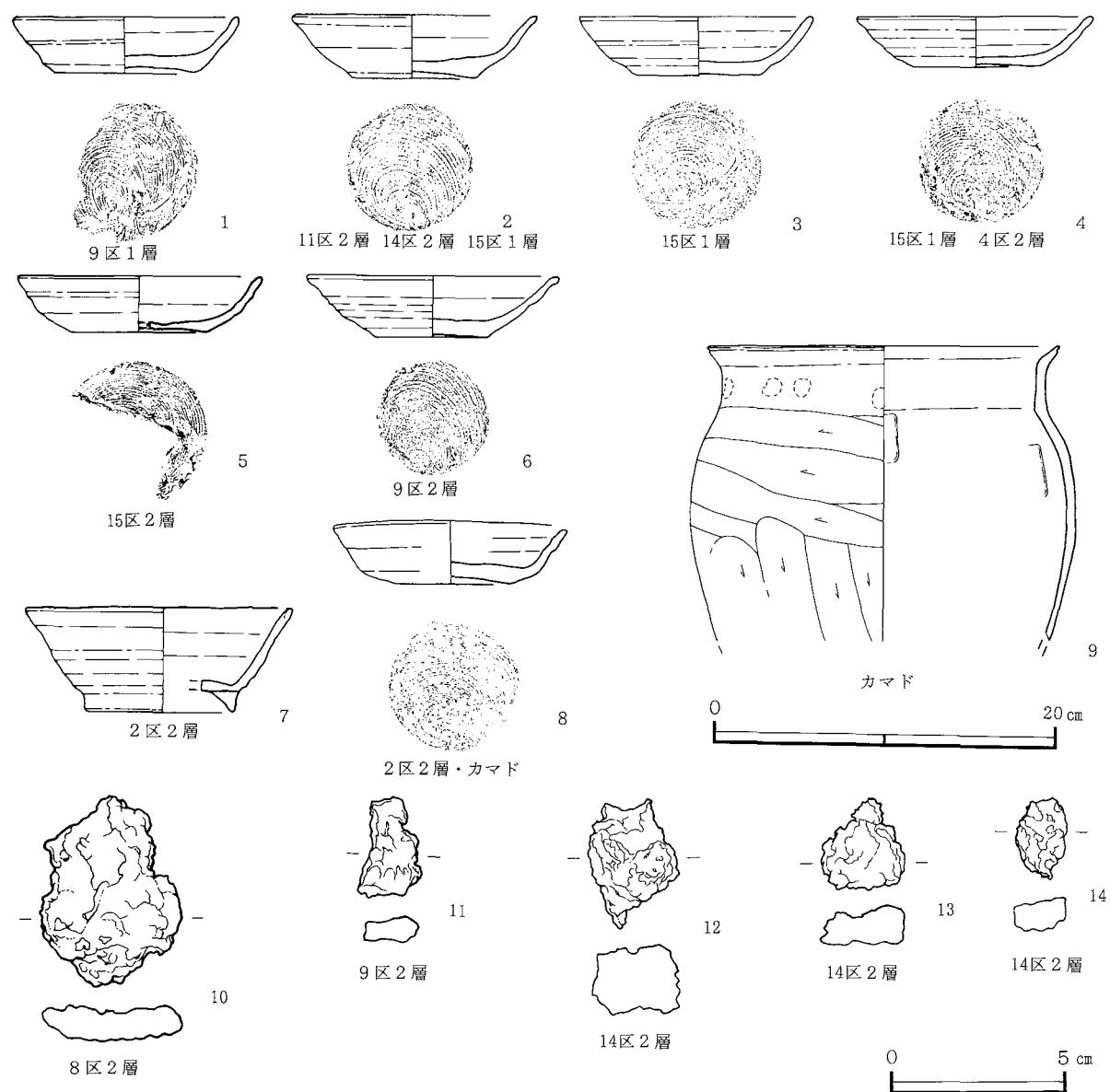
鉄製品

鉄滓（第45図10～14） H-3号住から1点、H-4号住から1点、H-5号住から5点出土している。最大のものは250gを計る。

(金井京子)



第44図 H-2号・H-3号・H-4号住居址出土の土器



第45図 H—5号住居址出土の遺物

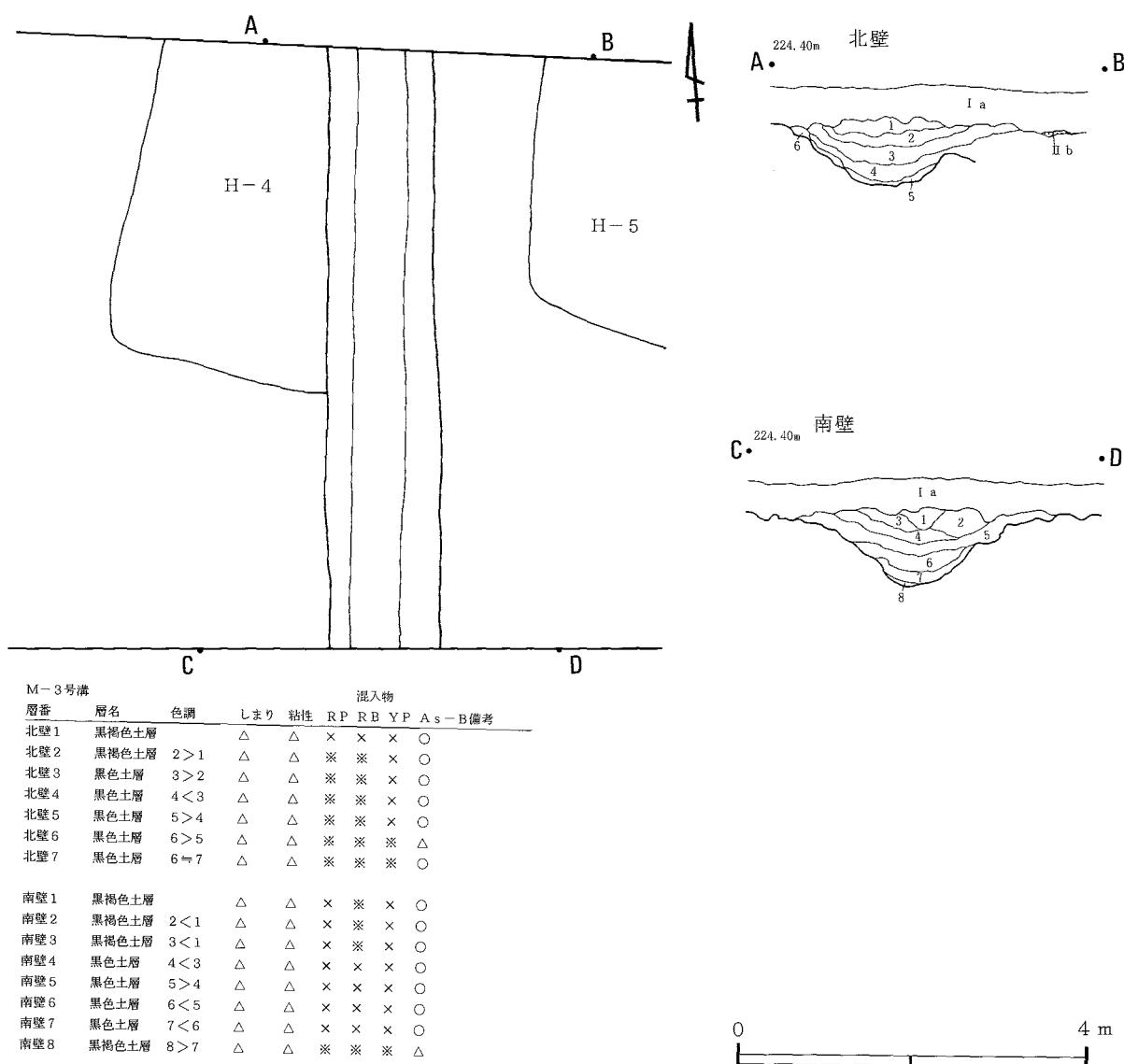
(2) 中世

a 遺構

この時期の遺構としては、溝1条が検出された。

M-3号溝（第46図） 幅1.2m、深さ0.9mの溝であり、ほぼ南北方向に走る。覆土はII a層（浅間B軽石混入黒色土層）を主体としており、中世頃の遺構と推定される。この時期の遺物は全く出土しなかった。

（大工原 豊）



第46図 M-3号溝実測図

(3) 近世

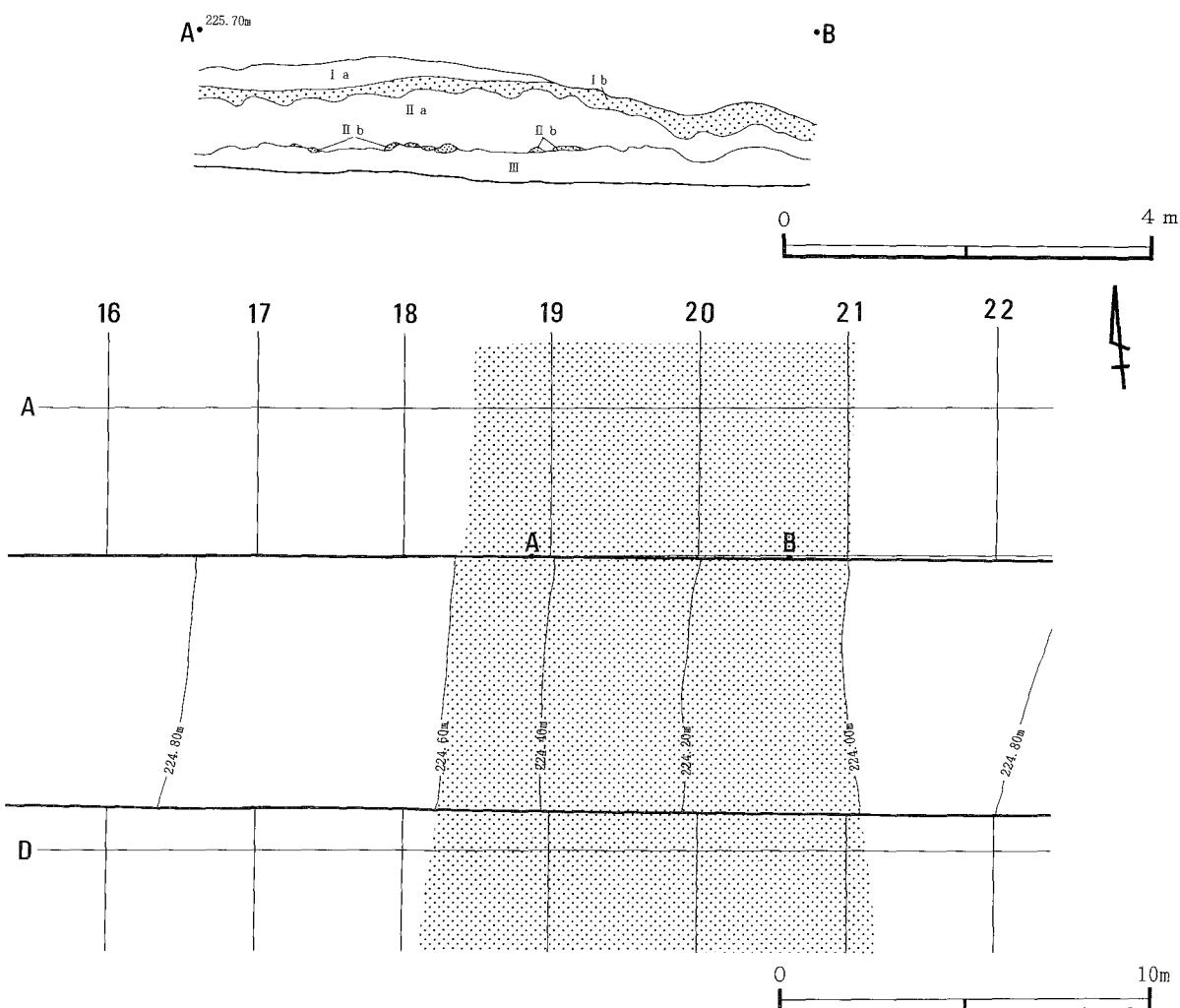
a 遺構

この時期の遺構としては、畠址が検出された。

畠址（第47図） 浅間A軽石直下の畠址がC-18グリッド～C-20グリッドを中心とした12mの幅で確認された。調査の不手際によりパックホーで掘削時遺構面をカットしてしまったため、断面のみでの確認となってしまった。この部分はA軽石を二次的に寄せ集めた部分であり、調査前は土手状に小高くなっていた。畠はほぼ南北方向に走っている。また、20ライン付近を境に段差が生じており、少なくとも2枚の畠が存在していたとみられる。

この部分からは植物珪酸体分析の結果から、イネ（陸稻）が栽培されていたことが推定された。なお、この部分の浅間A軽石の堆積状態及び、栽培作物の検討は第VI章において詳述しているので、参照されたい。

（大工原 豊）



第47図 畠址実測図

4 平塚遺跡

(1) 縄文時代

a 遺物

土器

本遺跡出土の縄文土器は、墳丘周辺から出土しており、遺構に伴って出土した物ではない。

1から4の土器は、纖維土器で、ループ文・組み紐施文の縄文であることから関山式土器に比定される。5の土器は、諸磯b式土器の特徴である浮線を施文していることから当該機の土器に、6の土器は縄文施文の感じから同じく諸磯b式土器に比定される。本遺跡出土の縄文土器は、落合II遺跡・三本木II遺跡同様前期前半、後半から終末にかけての時期である。当地域において、この時期の遺跡数の多さを考えると、縄文時代前期前半から終末の遺跡立地環境など今後検討していく課題が多いと考える。

(関根慎二)

石器

全部で25点の石器・剝片・石核等が出土している。狭義の石器は1点であり、内訳はスクレイパーA類2点、打製石斧1点、スクレイパーB類3点、敲石2点、球石1点の計9点である。以下、代表的な器種についてのみ所見を述べる。

スクレイパーA類（第48図7） 図示した例はII形態（直接打撃）に分類されるもので、幅広剝片を素材としており、チャート製である。

打製石斧（第48図8） I形態（断面蒲鉾形・片刃）に分類される。形態から前期前期のものと判断される。頁岩製である。

スクレイパーB類（第48図9～12） I b形態（直接打撃+押圧剝離）2点（9・10）、II形態2点（11・12）を図示した。このうち、II形態としたものは打製石斧（II形態）の欠損品の可能性もある。

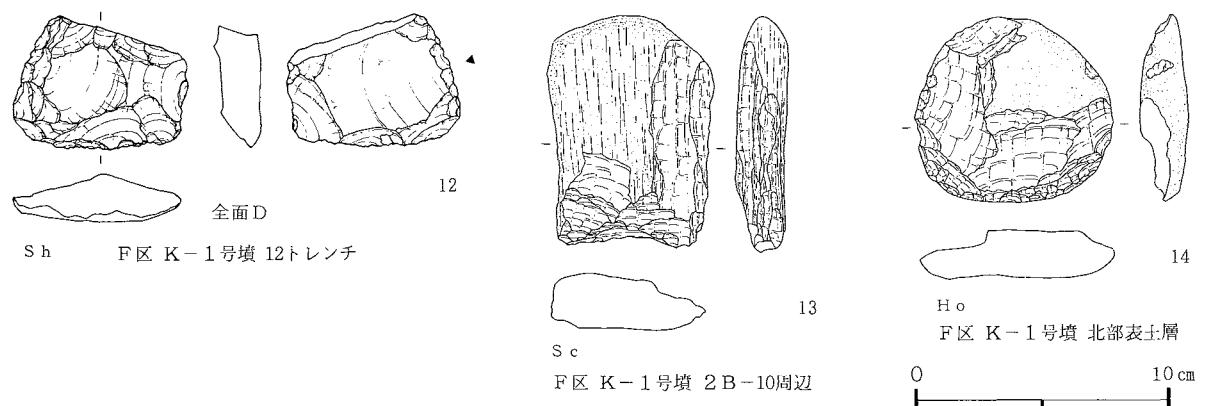
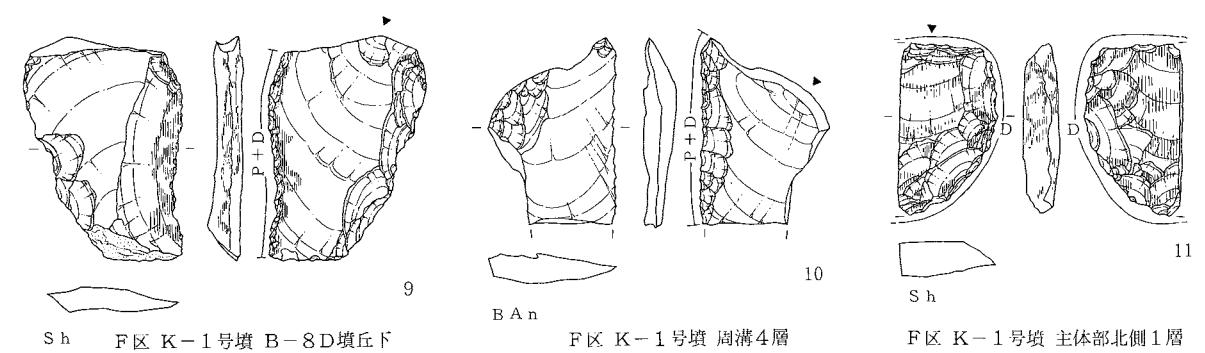
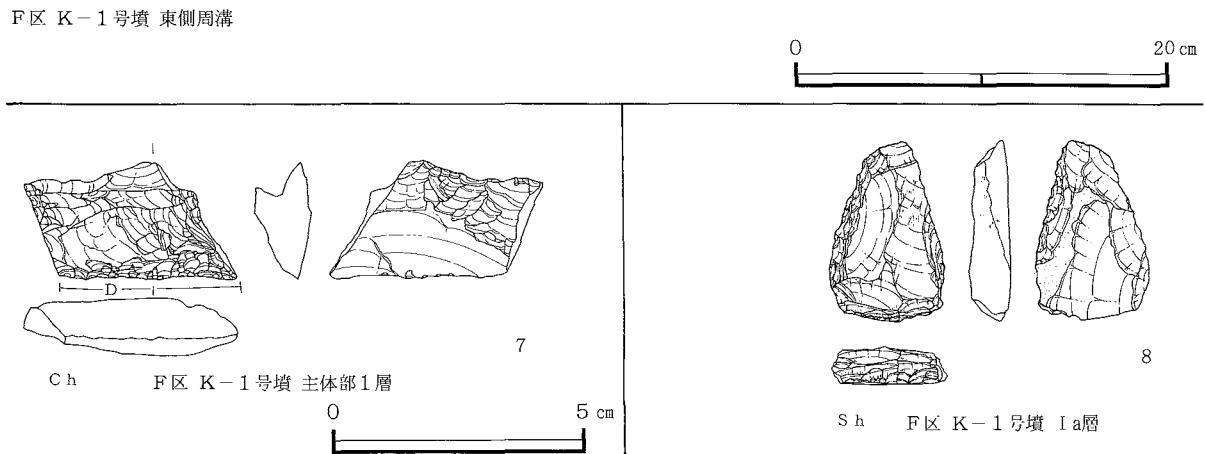
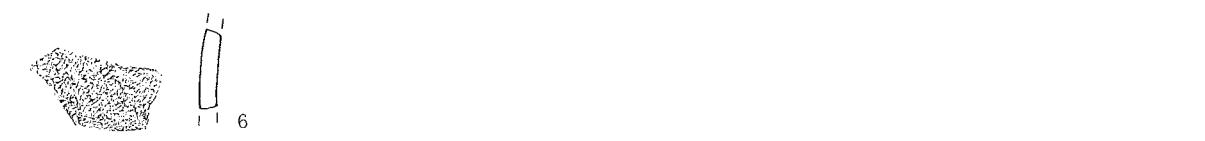
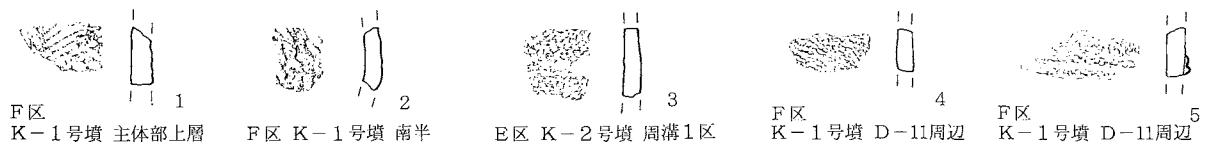
敲石（第48図13・14） 石材は異なるものの2点とも剝離縁辺部に階段状剝離が連続しており、共通性が認められる。

(大工原 豊)

(2) 古墳時代

a 遺構

この時期の遺構としては、E区で1基、F区で1基、計2基の古墳が検出された。F区のK-1号墳は全体の3/4程度が調査区内に存在していた。また、E区のK-2号墳は、全体の1/3程度が調査区内に存在していた。いずれの古墳も近世までに墳丘の大部分は削平されており、『上毛古墳総覧』等文献には記載されていないものである。



第48図 繩文時代の遺物実測図

K－1号墳（第49図～第50図・付図5）

墳丘 浅間A軽石が降下した時点ですでに墳丘の大部分削平されており、主体部の東側及び北側にわずかに残存していた程度であった。盛土の状況は第図のとおりであり、黒色土層とローム混じりの土層が交互に盛られた状態であった。構築面はIII層～IVa層であり、その上に盛り土がなされていた。墳丘構築以前の地業の痕跡は確認されなかった。

また、葺石の有無は明確ではないが、周溝内側の覆土中に河原石が流れ込んでいることから、本来存在していた可能性もある。

周溝（付図5）上幅2.5～5.0m、深さ0.4～1.0mの周溝の存在が確認された。北西部分の幅が広く、平面形は不正円形を呈する。断面形状は緩やかな椀形を呈している。東には幅1.5mのブリッジが存在する。また、北西部分は特に幅広であり、外側へ突出している。覆土上層には浅間B軽石が純層で堆積しており、すでに平安時代には周溝はかなり埋まっていたことが確認された。

主体部（第49図・第50図）

玄室 両袖形の玄室である。すべて河原石で構成されており、切石は全く用いられていない。平面形は正方形に近いが、やや長軸の長い長方形を呈する。大形の河原石を1段平積にした上に、中形の河原石を3～5段の小口積みで構築されている。1段目の大形河原石の配列をみると、奥壁部の石が最大であり、1石で奥壁を構成する。また、側壁部はやや小さく2石並べて側壁を構成する。石室解体時の所見では1段目の大形石は地山（IVa層～IV層）を少し掘りくぼめて設置していたことが確認された。

框石を境に玄室は羨道より一段低く構築されており、玄室底面のレベルは地山の高さとほぼ一致する。底面は中央部にはやや大きな石を配し、これを境に奥壁側は小粒の河原石により礫床を構築している。玄門側はやや大振りの河原石が敷かれていた。玄門は門柱石を両端に配し、框石として人頭大の河原石が数石並べられていたが、やや乱雑であった。天井石は大形の河原石2石で構成されていたが、玄室内に崩落していた。

なお、北東隅の石が大きく脱落しており、盗掘の痕跡が認められた。

羨道 玄室長とほぼ同じ長さをもち、玄門付近には閉塞石が詰まった状態で検出された。側壁部は中形の河原石を4段横積みないし小口積みして構築されている。玄門の上部の天井石2石は調査時まで崩落せずに残存していた。羨門部分には門柱石は検出されなかったが、本来存在していなかったものと推定される。

裏込めの状態 主体部は人頭大程度の河原石を約1mの厚さで裏込めしていた。

遺物出土状態（第51図）

墳丘 墳丘の頂上部では8世紀後半の土師器長胴甕、須恵器壺・蓋・壺等が散乱した状態で検出された。これらの遺物は祖先祭祀がこの部分で行われた際に用いられたものと推定される。

周溝 東側に位置するブリッジの南側では、底面からやや浮いた状態で、墳頂部と同時期の土師器壺、須恵器壺・長頸壺・壺がまとまって出土した。これらの土器は墳頂部で行われ祭祀の遺物が流れ込んだものと推定される。これ以外には、北周溝部分で鉄製釘が12点出土しているのみである。

玄室内 鉄製の釘が69点石敷き上部より検出された。木製棺に用いられていたものと推定される。出土

位置を検討したが、散乱した状態であり、特別な傾向は認められなかった。それ以外の遺物はフルイにより峻別したが全く検出されなかった。

K—2号墳（第52図・第53図）

墳丘 現況では存在していなかった。II a層が直接破壊された主体部の上部を覆っており、すでに中世頃には墳丘は削平されていたものと推定される。

周溝 西から北にかけての1／3程度が調査区内に存在していた。周溝の上幅は1.5～2.8mであり、西側が広い。断面形は緩やかな椀形を呈し、深さは0.6m程度である。覆土上部に浅間B軽石が堆積しており、中世頃にはほとんど埋まっていたとみられる。

主体部（第53図）破壊されており、底面のみ残存していた。奥壁・側壁の石はほとんど除去されていた。小さな河原石を敷き詰めた礫床が認められ、玄室の床面と推定される。羨道部分は調査区外に及んでおり、不明である。また、主体部上部では灰白色粘土が一部存在していた。

礫床部分の北側には人頭大の河原石がまとまっていたが、裏込め石の可能性がある。

遺物出土状態 矶床部分の北側から土師器甕の小破片が数点検出されたのみであった。

（大工原 豊）

b 遺物

土器（第54図）

平塚遺跡では、K—1号墳の墳丘上部と周溝から須恵器を主体とした完形に近い土器がまとまって検出された。主体部上層の土器片と周溝の土器片が接合しており、同時期のものと推定される。

土師器壺・甕、須恵器壺・甕・蓋・長頸壺・短頸壺が出土している。ほぼ完形の土器としては、土師器壺1点、甕1点、須恵器壺7点・蓋3点・長頸壺2点・短頸壺2点が存在する。須恵器壺では底部の調整は手持ち籠削りのものが多い。また、須恵器蓋では口縁部に返しが付くものと付かないものがみられる。これらの器形の特徴から8世紀前半の時期のものと推定される。

（金井京子）

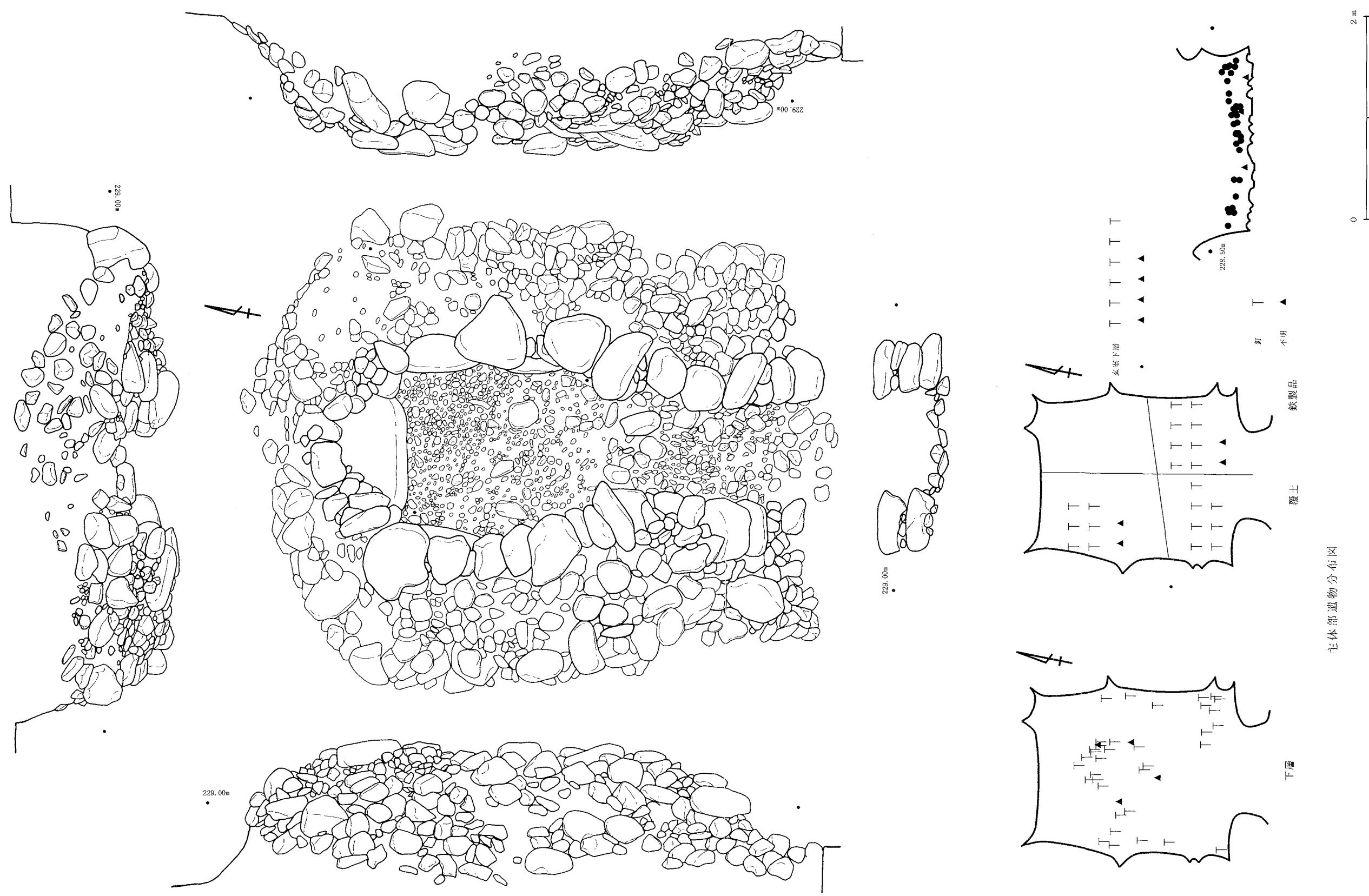
鉄製品

釘（第55図・第56図2～5） 全部で78点検出されている。この他釘の可能性ある鉄製品11点が検出されている。頭部を折り曲げて、扁平化させている。釘の大きさは第57図に示したとおり、完形では長さ6.5～7.0cmに集中している。

石製品

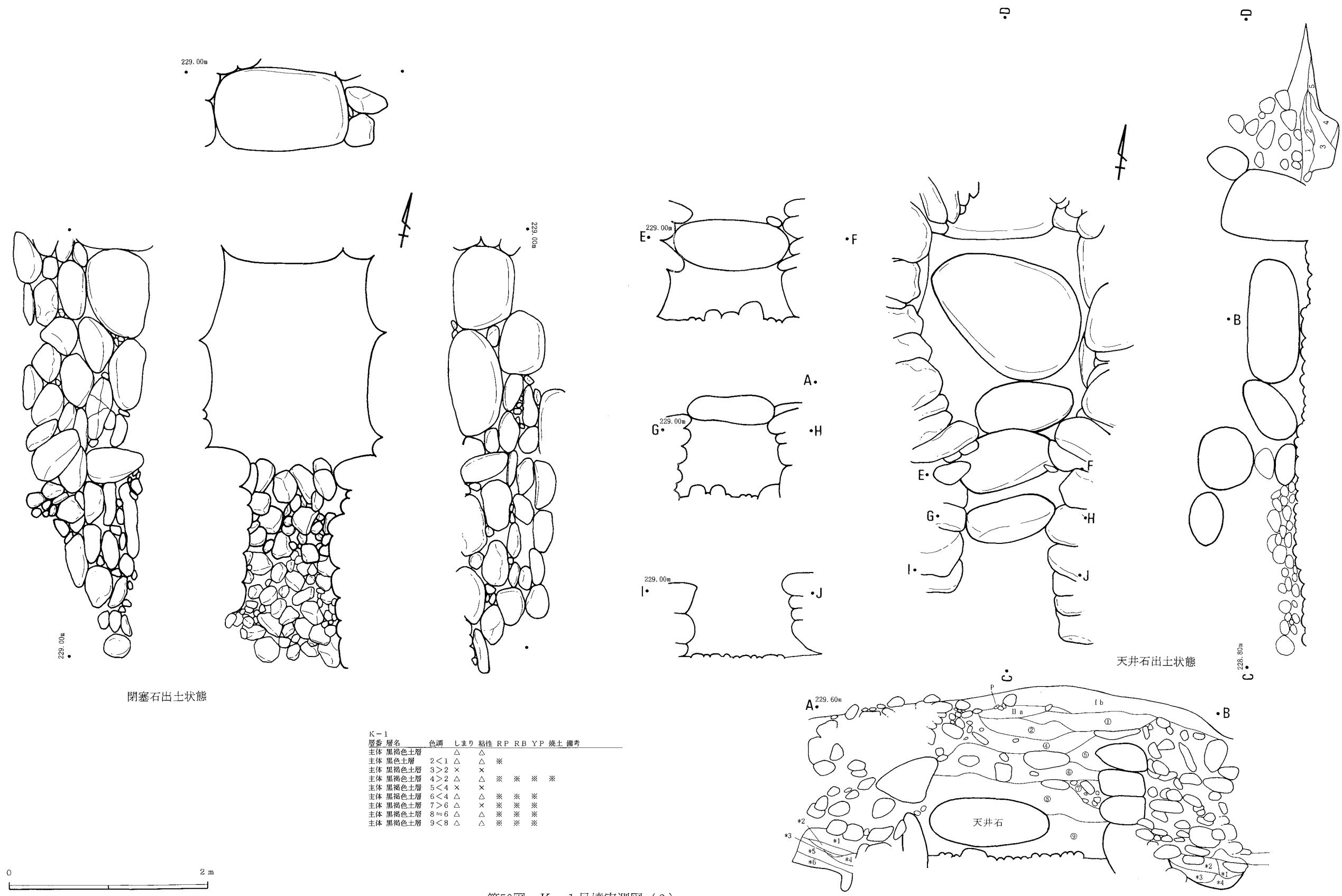
砥石（第56図1） 砥石の片面に細い沈線により、意味不明な線刻が施されているものである。時期は不明である。

（大工原 豊）

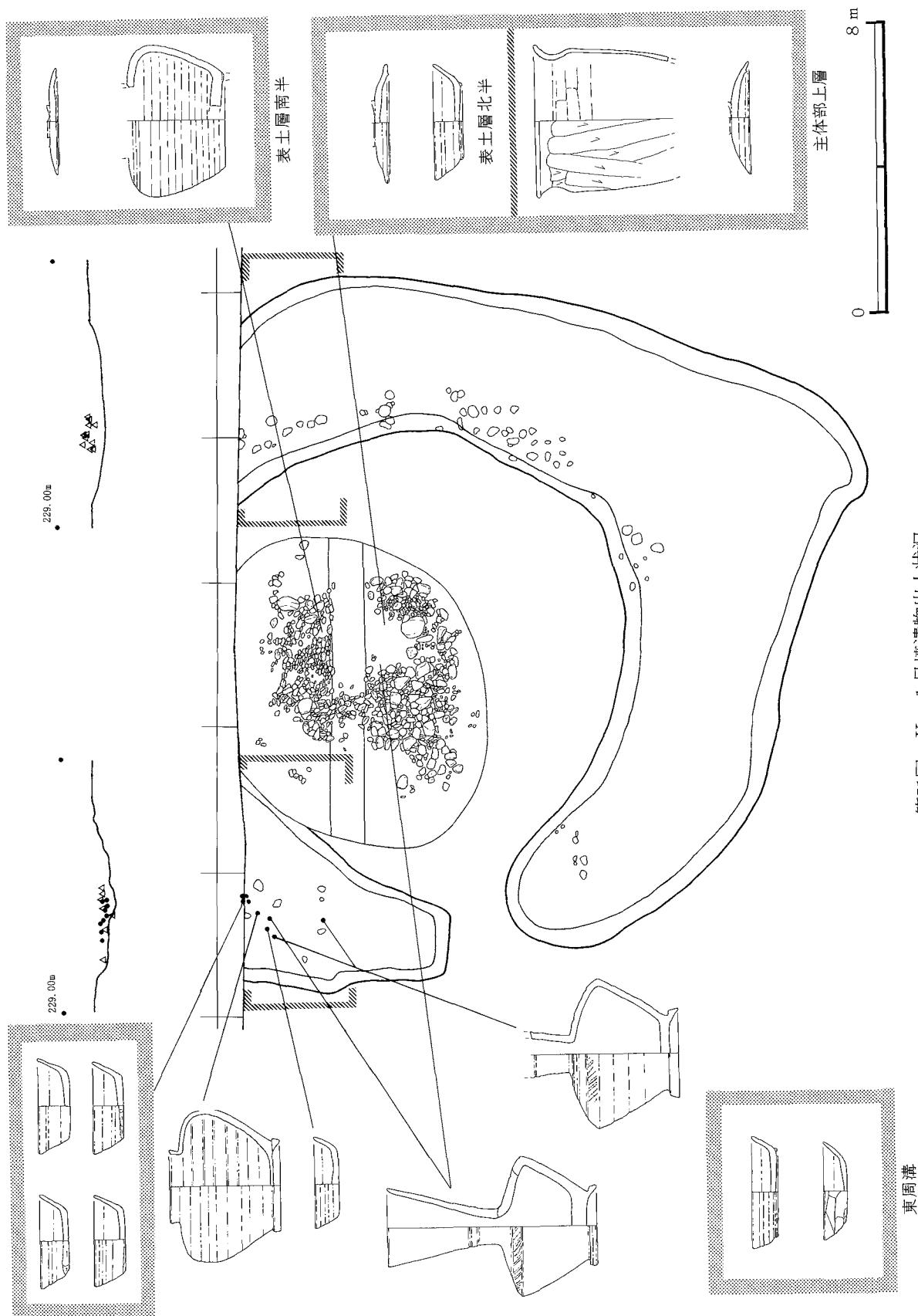


第49図 K-1号墳実測図 (1)

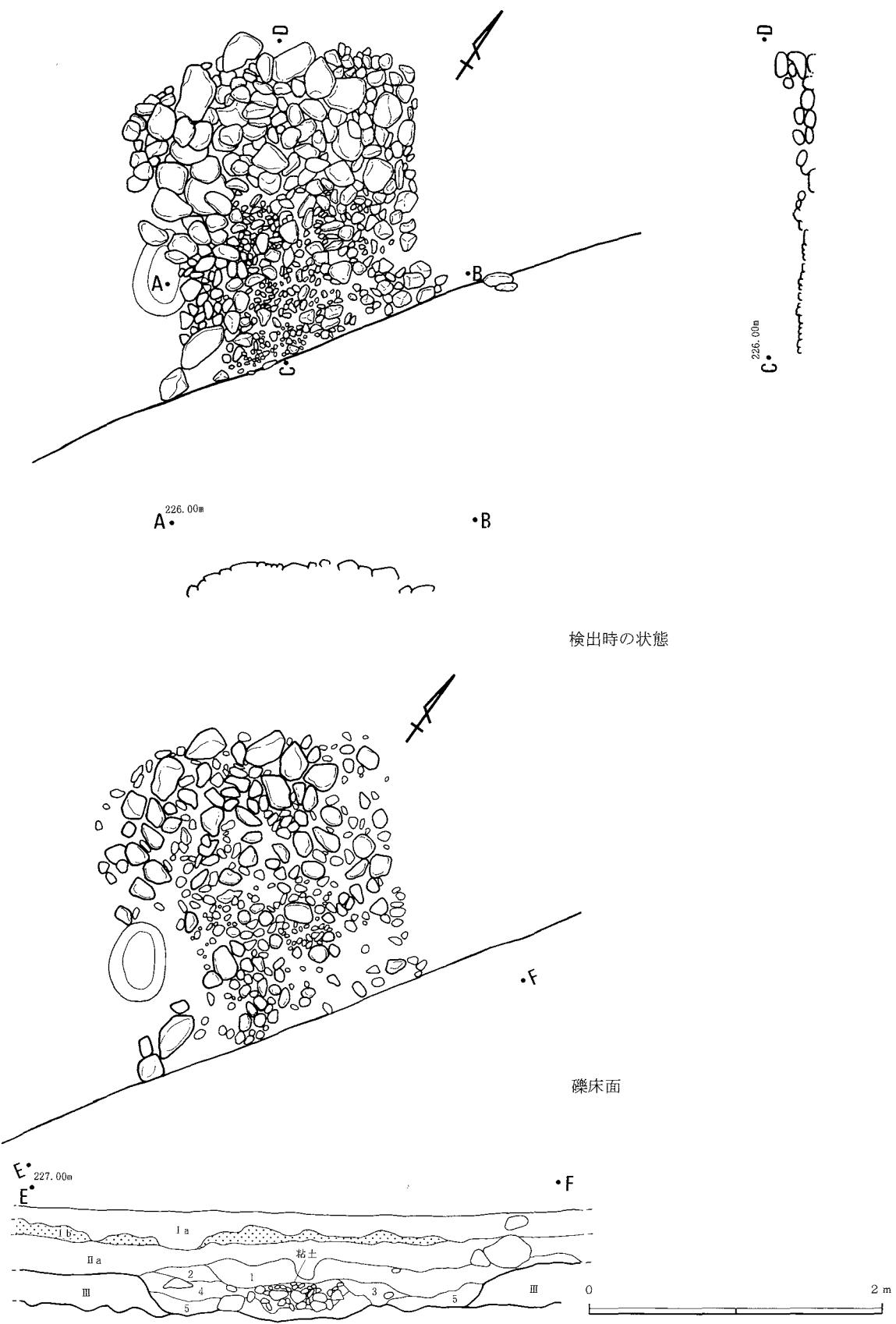
主体部遺物分布図

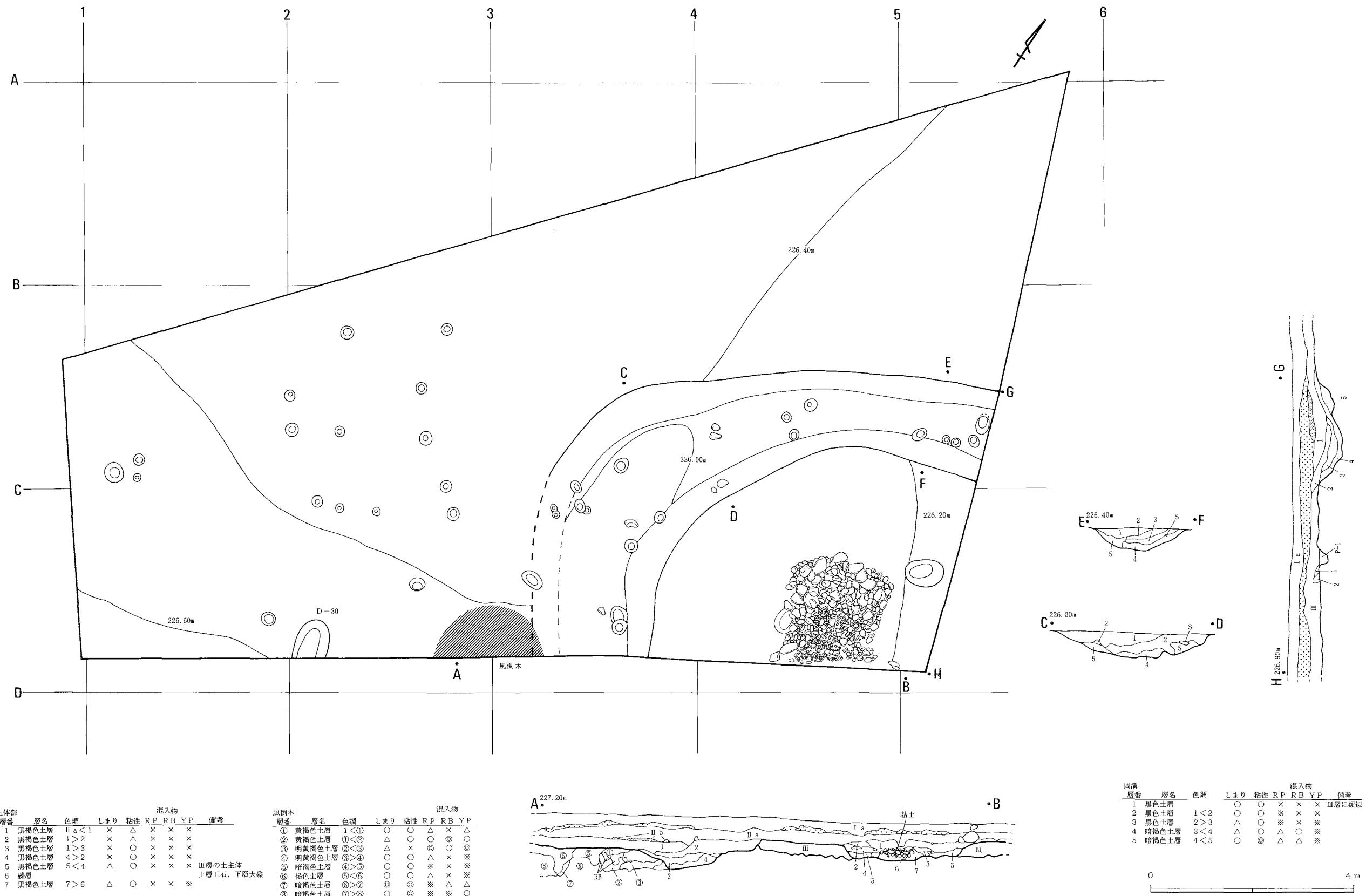


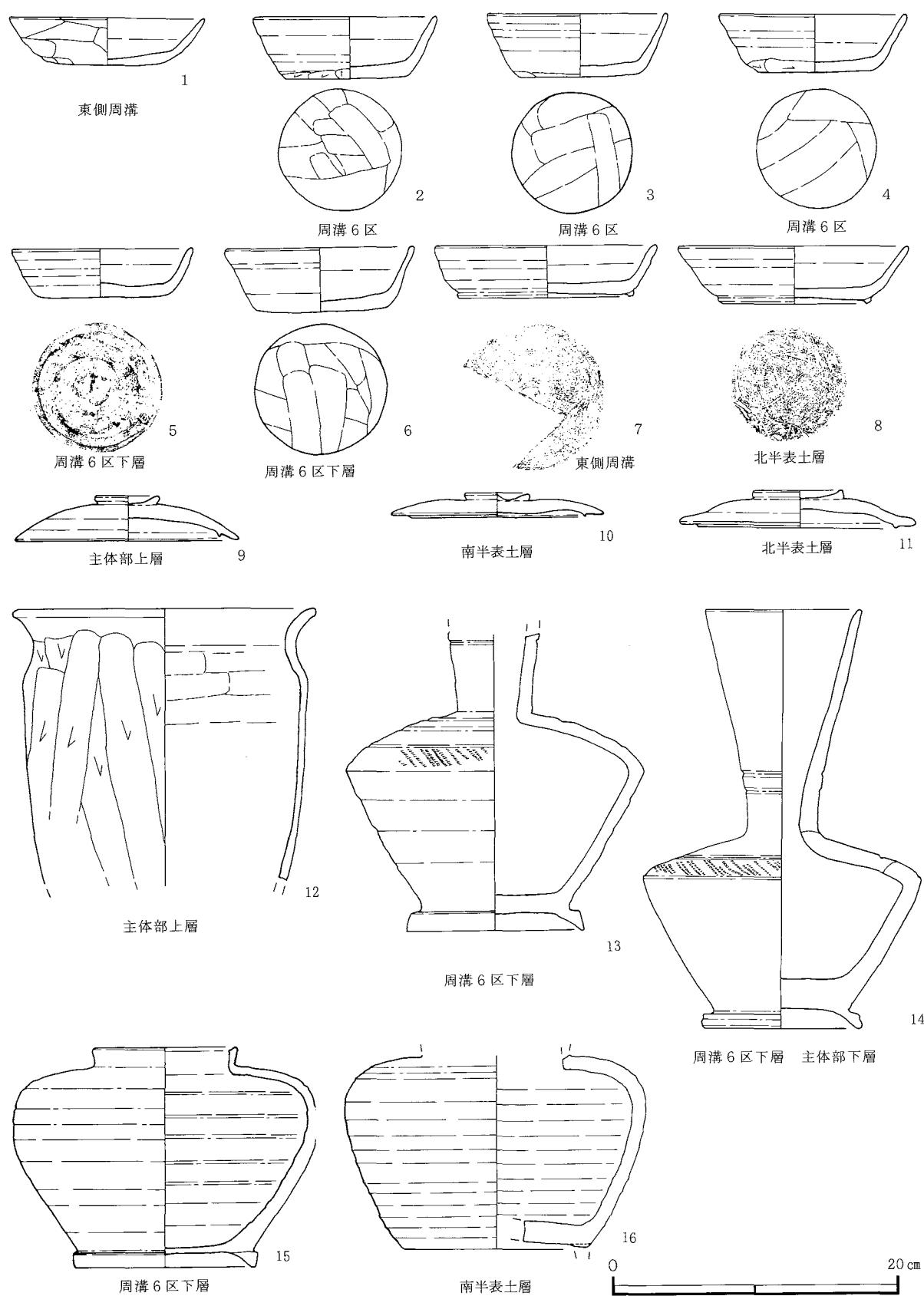
第50図 K-1号填塗測図 (2)



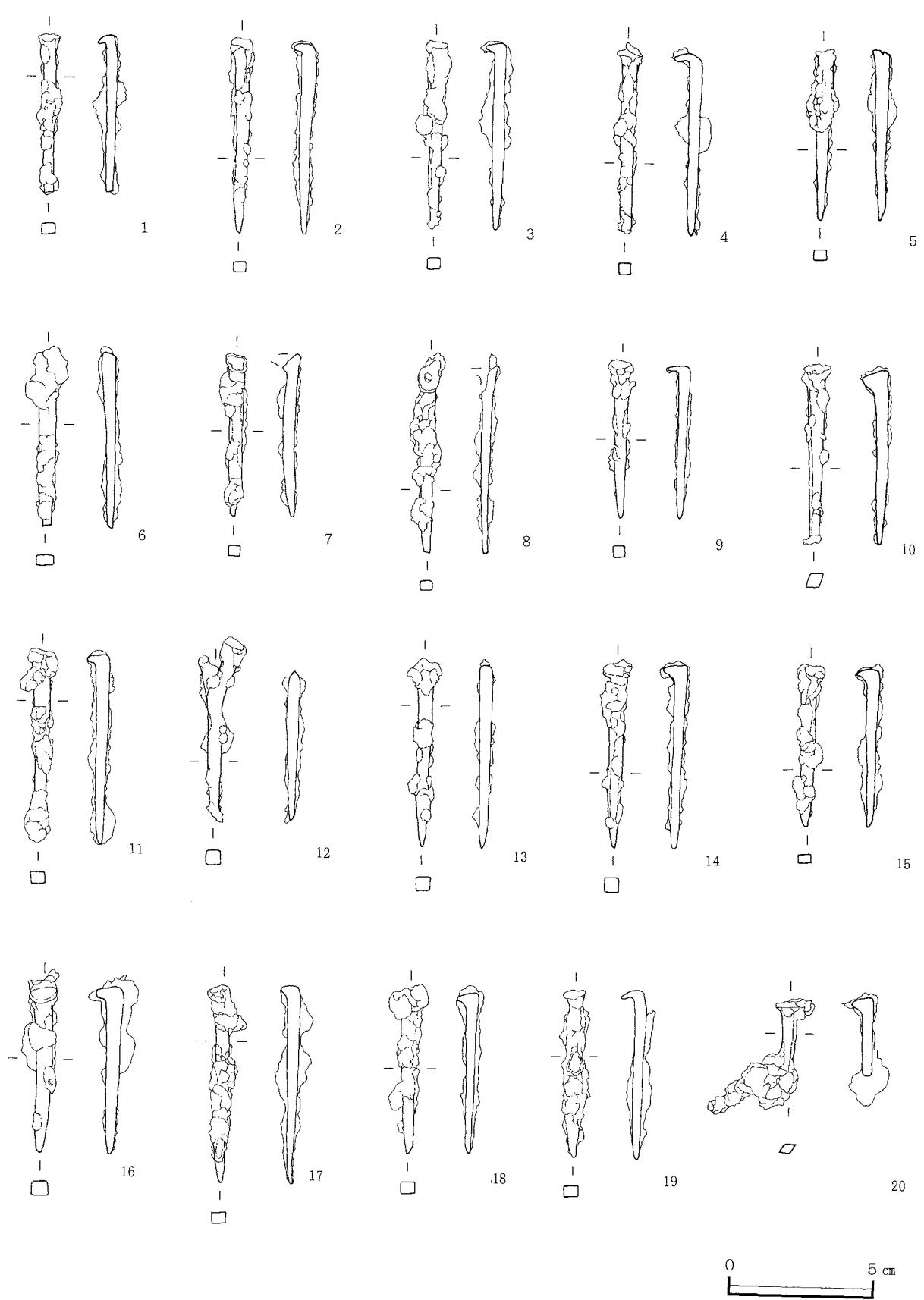
第51図 K-1号墳遺物出土状況



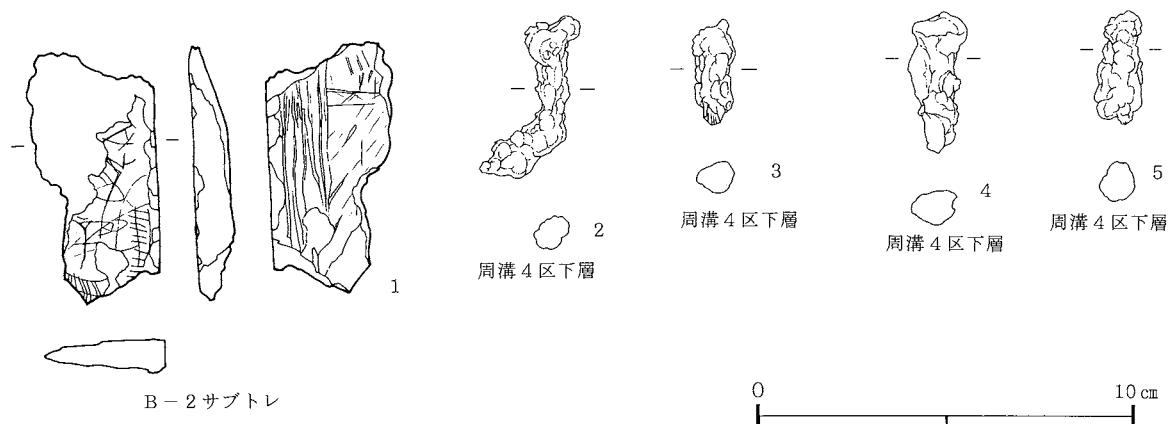




第54図 土器実測図



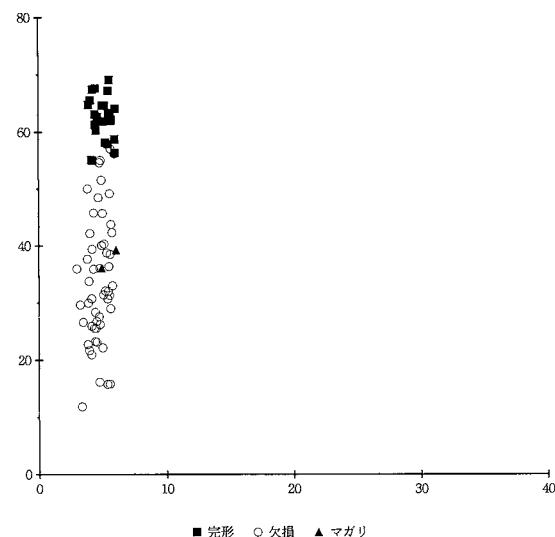
第55図 鉄製品実測図



第56図 鉄製品・砥石実測図

項目	法量	K-1	K-2
古墳規模	直径	19.2	>8.6
墳丘	直径	12.8	>6.8
	高さ	1.7	—
周溝	上幅	2.5~5	1.8~2.8
	深さ	0.4~1	1
	幅	1.5	—
主体部	長さ	>5	>2.3
	幅	4.5	>2
玄室	長さ	1.95	>1.1
	幅	1.55	0.9
	高さ	>1.1	—
羨道	長さ	2	—
	幅	1	—
	高さ	0.9	—
主軸方向		N-6.5°-E	N-21°-E
時期		7末~8前	7末~8前

第7表 古墳観察表



第57図 銛の計測値グラフ

(3) 近世

a 遺構

この時期の遺構としては、畠址が存在する。

畠址（付図6） K-1号墳の西から北にかけて浅間A軽石直下の畠址が広範囲にわたって検出された。この部分は軽石を寄せ集めた場所であり、そのため畠址が良好な状態で保存されていたとみられる。畠はほぼ東西方向に平行に走っており、一枚の畠面と推定される。

この畠址ではイネのプラントオパールが検出されており、陸稻が栽培されていたと推定される。なお、詳細については第VI章を参照されたい。

(大工原 豊)

V 成果と問題点

1 各遺跡の様相

今回の調査は広範囲にわたったものの、道路部分といった制約から遺跡の歴史的・社会的意義について言及するのに十分な資料を得ることはできなかった。以下、各遺跡の調査によって判明したことと、調査の所見を述べ、まとめとしたい。

落合II遺跡

この遺跡は落合遺跡に隣接しており、一つの遺跡の一部分と見なすことができる。縄文時代では、時期不明の陥穴が2基検出されたが、これは水場へやって来る動物を狙って掘られたものとみられる。遺物からは前期前半（関山期）と中期後半（加曾利E期）に利用されたことが判明した。しかし、遺物は少量出土したのみであり、本遺跡での生活痕跡は弱い。

古墳時代終末期には、K-1号墳が構築されたことが判明した。この古墳は残存状態が非常に悪く、時期を特定することはできない。これ以外にも周辺には古墳が複数存在していたことが伝承されており、終末期には平塚遺跡と同じような古墳群が形成されていた場所と推定される。

平安時代には溝（M-1・M-2）が台地から低地にかけての傾斜地で検出されたが、この溝と類似した溝は注連引原II遺跡でも複数検出されており、耕作と関連する可能性を考えることもできよう。

三本木II遺跡

この遺跡は北側に位置するB区と、南側に位置するC区に分かれ、性格を異にしている。B区では旧石器時代のナイフ形石器が表面採集されており、この時代から利用されていたことが判明した。1段下位面に位置する落合遺跡においても、北方系細石刃文化の示準遺物である荒屋型彫器が出土しており、この遺跡周辺は旧石器時代にはすでに人間活動の場として断続的に利用されていたことが確認された。

また、縄文時代では前期前半（関山期）と、同終末（十三菩提期）、中期終末（加曾利E期）に断続的に利用された場所であったことが判明した。前期終末には小形の住居址とも考えられる竪穴状遺構が構築されたり、調理施設と考えられる集石遺構（S-1）が構築されたりしており、短期間滞在したキャンプサイト的な「場」として機能していたと推定される。一方、中期終末にはいわゆる「袋状土坑」が構築され、土掘具と判断される打製石斧が数点出土した程度であり、具体的な性格については不明である。しかし、長期に及ぶ生活痕跡は認められず、臨機的な利用の「場」であったことは前期と同様である。

このように、B区は縄文時代においては、あくまでも臨機的利用を前提とした「場」として断続的に利用されていたことが判明した。

C区は縄文時代前期前半（関山II・神ノ木期）の集落遺跡である。住居址5軒・集石土坑1基・土坑3基が検出された。試掘調査の結果、集落は尾根線に沿ってさらに北へ広がっており、より規模の大きなものであったとみられる。しかし、大規模集落、あるいは拠点集落と呼ばれる規模のものではなく、小規模な集落が継続的に営まれた遺跡と考えることが妥当であろう。

今回の調査で検出された住居址は土器型式から見た場合、比較的短期間のものであるが、重複関係が存在していることと、土器に時間差が認められることから、同時併存する軒数は、1～2軒であったと考えられる。

なお、S—2号集石土坑は遺物が出土していないものの、J—3住より新しく、J—5号住に隣接するので、J—5号住に付随する施設であった可能性が高い。また、D—1号土坑はJ—3号住により切られているので、J—1号住・J—2号住に併存する可能性が高い。

以上の検討結果と土器型式から見ると本遺跡では次の段階変遷が推定される。

1期：J—1号住・J—2号住・D—1号土坑

2期：J—3号住・J—4号住

3期：J—5号住・S—2号集石土坑

次に、平安時代にC区では工房址と推定されるH—1号住とHT—1号掘立柱建物址等、小規模な生業活動の「場」が形成される。これらの遺構は出土土器から9世紀前半に相当すると判断されるが、この時期にはすでに中野谷地区一円に「牧」が形成されていたと推定されている。本遺跡の工房址は台石を有することと、壆・皿のみが検出される点で、天神原遺跡B区の工房址群（8世紀後半）と類似性が認められる。また、7世紀終末より9世紀にかけて、鍛冶工房址が継続的に営まれており、「牧」の管理施設群の一部と推定される下塚田遺跡は、本遺跡の西約400mに位置している。こうした点からみて、本遺跡の工房址は「牧」の関連施設である可能性もある。

三本木III遺跡

この遺跡の主体は平安時代の集落址であり、住居址4軒が検出されている。集落の時期は出土遺物から9世紀前半の住居址（H—2号住）と、9世紀後半のもの（H—3号住・H—4号・住H—5号住）に分かれる。いずれも重複は認められず、継続時期は短いと推定される。

また、H—2号住とH—3号住の間に柱穴群が存在しており、この集落の施設の一部と推定されるが、性格は不明である。

本遺跡で検出された中世の溝とほぼ同じ規模のものが、試掘調査の際、本遺跡と平塚遺跡の間でも確認されているが、いずれの溝も調査力所が断片的であることから、性格は不明である。

近世の畠址は、浅間A軽石が寄せ集められた下に残存していた。断面観察で畠を確認し、イネ（陸稻）の行われていたことがプラントオパール分析により確認されている。

平塚遺跡

ここは2基の古墳を中心とした遺跡である。K—1号墳は浅間A軽石が寄せ集められていた下部に存在していたため、これまで確認されていなかった古墳である。墳丘の遺存状態は悪かったが、主体部・周溝の遺存状態は比較的良好であった。玄室内からは釘が検出されたのみであり、時期の特定は難しいが、祖先供養と推定される8世紀前半段階の遺物が主体部上部及び周溝内から検出されており、7世紀終末から8世紀前半の古墳である可能性が高い。

K—2号墳は中世から近世にはすでに主体部が破壊されており、残存状況も悪いので時期の特定は難しいが、K—1号墳に前後して造られたものと考えられる。

なお、今回の調査区の周辺にはこれ以外にも古墳が存在していた痕跡があり、終末期の古墳群が存在

していたと推定される。同様な状況は落合II遺跡周辺においても認められており、複数の支群が存在していたものと考えられる。

近世の畠址は三本木III遺跡と同様、浅間A軽石直下のものであるが、本遺跡の方が遺存状態が良好であった。プラントオパール分析によりイネ（陸稻）が栽培されていた可能性が高いことが確認されている。

（大工原 豊）

〈引用・参考文献〉

- 今村啓爾 1983 「陥穴（おとしあな）」『縄文文化の研究』2 雄山閣
桐生直彦 1985 「東京都における縄文時代の袋状土坑」『東京考古』3
大工原豊他 1990 『中野谷地区遺跡群発掘調査概報』1 安中市教育委員会
大工原豊他 1990 『三本木遺跡・落合遺跡』 同
大工原豊・関根慎二他 1993 『大下原遺跡・吉田原遺跡』 同
大工原豊・関根慎二・林克彦他 1994 『中野谷地区遺跡群』 同
谷口康浩 1986 「縄文時代「集石遺跡」に関する試論 —関東・中部地方における早・前・中期の事例を中心として—」
『東京考古』4
堀越正行 1975～1977 「小堅穴考（1）～（4）」『史館』5・6・8・9

VI 自然科学的分析

1 テフラ分析

早田 勉 (株古環境研究所)

(1) はじめに

三本木III遺跡・平塚遺跡の発掘調査では、畠遺構が検出された。そこで地質調査を行って土層の記載を行い、畠遺構の層位に関する資料を得ることになった。また合わせて各種分析に用いる試料の採取を行った。

(2) テフラ層序

平塚遺跡 (F区D—2グリッド) 平塚遺跡で検出された畠遺構は、黄褐色軽石を混じえる黒褐色土を作土として作られている(図1)。軽石の最大径は9mmで、その岩相からこの軽石は1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B, 新井, 1979)に由来していると考えられる。

この畠遺構は、成層したテフラ層により覆われている。この成層したテフラ層は、下位より桃色細粒火山灰層(層厚0.3cm)、白色粗粒火山灰層(層厚0.7cm)、白色軽石層(層厚7cm, 軽石の最大径32mm, 石質岩片の最大径5mm)から構成されている。このテフラ層は、その層相から1783(天明3)年に浅間火山から噴出した浅間A軽石(As-A, 荒牧, 1968, 新井, 1979)に同定される。したがって畠遺構の層位は、As-A直下とみなせる。

三本木III遺跡 (中央部) ここでも黒褐色土を作土として作られた畠遺構が検出されている。畠遺構は成層したテフラ層に覆われており、その上位には下位より青灰色細粒火山灰混じり白色軽石層(層厚21cm)、暗褐色土(層厚1cm)、暗褐色土混じり白色軽石層(層厚30cm)、白色軽石混じり暗褐色土(層厚29cm)が認められる(図2)。畠遺構を覆う成層したテフラ層は、下位より桃色細粒火山灰層(層厚0.2cm)、白色粗粒火山灰層(層厚0.3cm)、白色軽石層(層厚4cm, 軽石の最大径15mm, 石質岩片の最大径3mm)、桃色軽石層(層厚5cm, 軽石の最大径23mm, 石質岩片の最大径3mm)、桃色細粒火山灰混じり桃色細粒軽石層(層厚0.4cm)、青灰色細粒火山灰層(層厚0.4cm)から構成されている。このテフラ層は、層相からAs-Aに同定される。したがって畠遺構の層位は、As-A直下とみなせる。

なおその上位の2層準の火山灰や土壤にまみれた軽石層は、軽石の岩相から人為的に盛られたAs-Aの再堆積層と考えられる。

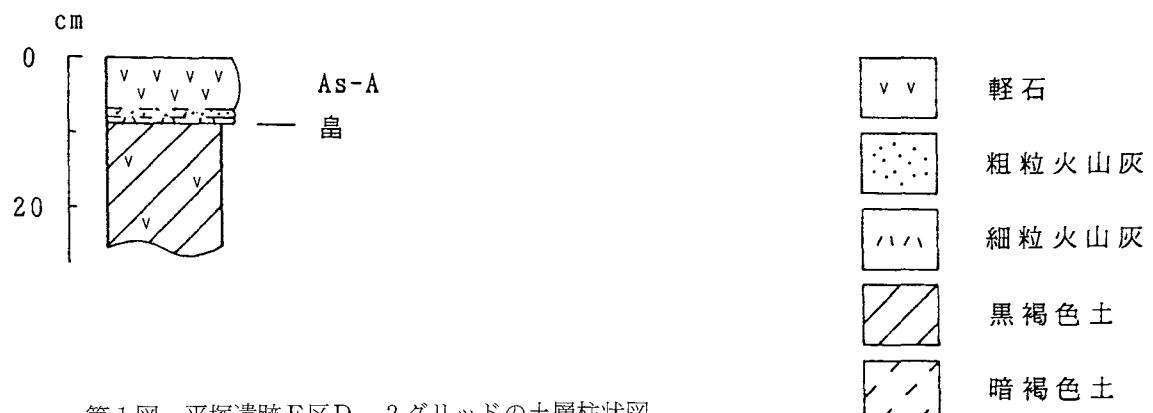
(3) 小結

平塚遺跡において地質調査を行った結果、発掘調査で検出された畠遺構は、浅間A軽石(As-A, 1783年)の堆積に伴って埋没したものと考えられた。

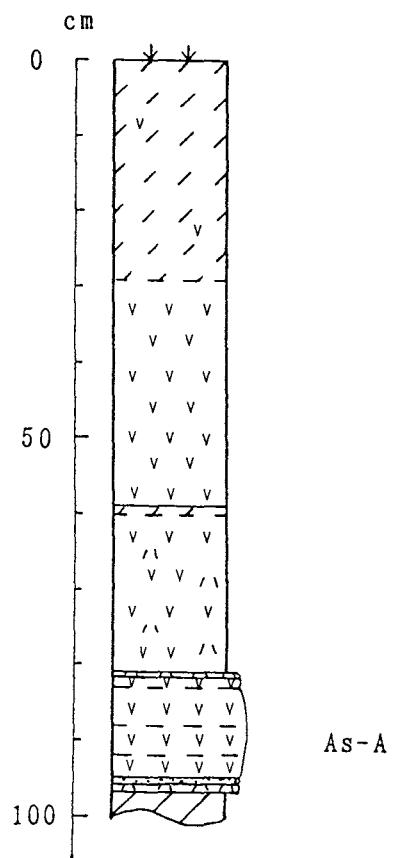
〈文 献〉

荒牧重雄 (1968) 浅間火山の地質. 地団研専報, 10, 45p.

新井房夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル, no.157, p.41-52.



第1図 平塚遺跡F区D—2 グリッドの土層柱状図



第2図 三本木III遺跡中央部の土層柱状図

2 植物珪酸体（プラントオパール）分析

杉山真二（株古環境研究所）

(1) はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸(SiO_2)が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，1987）。

三本木II遺跡では、イネ科植物が縄文時代前期の住居構築材にどの程度利用されているかを明らかにするために、浅間板鼻黃色輕石層中に掘り込まれた壁溝及び柱穴中に含まれるイネ科植物の検討を目的として分析を行った。

また、平塚遺跡の発掘調査では、浅間A輕石（As—A）直下から畠遺構が検出された。ここでは、同遺構におけるイネ科栽培植物の検討を主目的として植物珪酸体分析を行った。

(2) 試 料

三本木II遺跡においては、J-1号住居址の柱穴（4区）、壁溝（4区、14区、16区）、炉址（下部）、J-2号住居址の壁溝（1区、2区、4区）、炉石（下部）から採取された計9点である（図1）。

三本木III遺跡・平塚遺跡におけるAs-A直下畠遺構については、畠上や畠間から採取した計10点である。

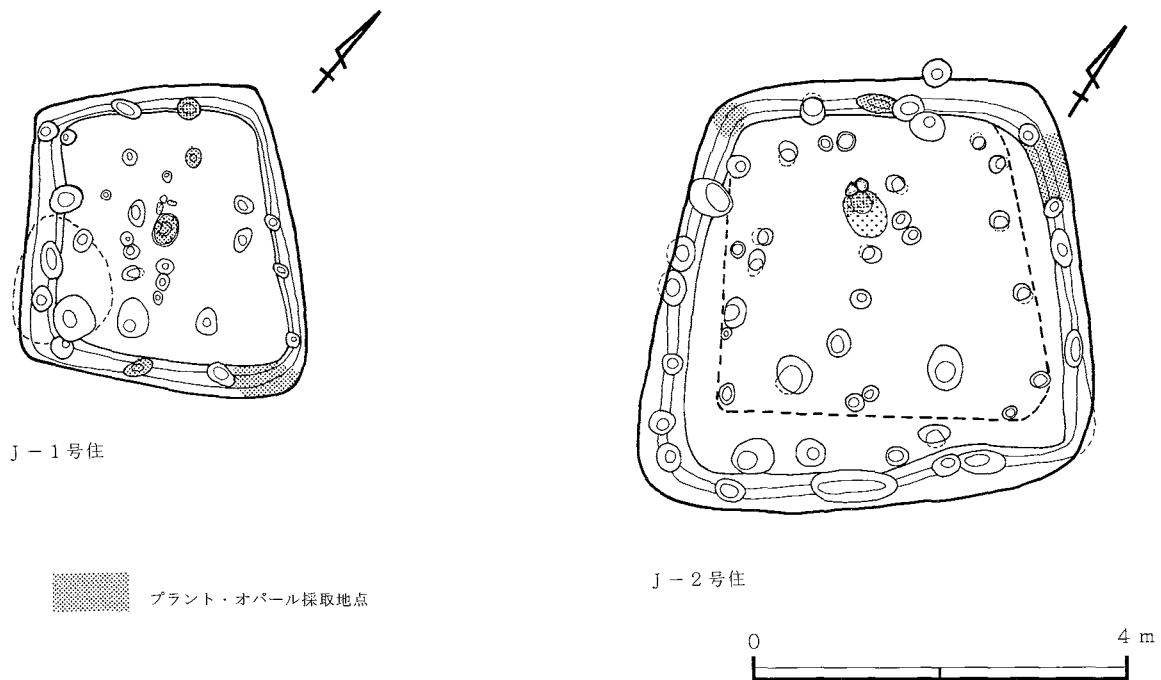


図1 三本木II遺跡プラント・オパール採取地点

(3) 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法(藤原, 1976)をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料の絶乾(105°C・24時間)
- 2) 試料約1gを秤量、ガラスビーズ添加(直径約40μm、約0.02g)
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散(300W・42KHz・10分間)
- 5) 沈底法による微粒子(20μm以下)除去、乾燥
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散、プレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10^{-5} g)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、キビ族はヒエ、ヨシ属はヨシ、ウシクサ族はススキの値を用いた。その値は2.94(種実重は1.03)、8.40、6.31、1.24である。タケ亜科については数種の平均値を用いた。ネザサ節の値は0.48、クマザサ属は0.75である。

(4) 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1、表2および図2、図3に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

三本木II遺跡(表1・図2)

[イネ科]

機動細胞由来: ヨシ属、ウシクサ族(ススキ属やチガヤ属など)、ウシクサ族型、ウシクサ族型(大型)、Aタイプ、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、クマザサ属型(おもにクマザサ属)、タケ亜科(未分類等)

その他: 表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来)、未分類等

[樹木]

はめ絵パズル状(ブナ科ブナ属など)、その他

検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群 \ 試料	J-1住居跡					J-2住居跡			
	4区		14区		16区	炉内	1区	2区	4区
	柱穴	溝	溝	溝	下部		溝	溝	溝
イネ科									
ヨシ属							8	8	
ウシクサ族(ススキ属など)	16	8	39	8	30	8	23	15	15
ウシクサ族型		8	47	94	15	8	39	54	30
ウシクサ族型(大型)						8			
Aタイプ	11			16					
タケ亜科									
ネザサ節型	21	15	8	8	15	8	8	15	15
クマザサ属型	58						16	23	
未分類等	11	8	8	8				23	
その他のイネ科									
表皮毛起源	11	8	8		22				8
棒状珪酸体	313	15	39	24	165	16	23	85	45
未分類等	440	30	110	63	90	40	47	62	53
シダ類	5	15							
樹木起源			8						
はめ絵パズル状(ブナ属など)			8						
その他									
植物珪酸体総数	885	114	268	220	337	87	164	286	166

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²·cm)

ヨシ属	0.20	0.09	0.49	0.10	0.37	0.10	0.49	0.49	0.19
ウシクサ族(ススキ属など)	0.10	0.07	0.04	0.04	0.07	0.04	0.04	0.07	0.07
ネザサ節型	0.44						0.12	0.17	
クマザサ属型									

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

表1 三本木II遺跡の植物珪酸体分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群 \ 試料	F区D-2グリッド					D区中央部				
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
イネ科										
イネ	30	29	7	7	14	48	59	35	57	45
オオムギ族(穂の表皮細胞)			7			21				
ヨシ属		7					7	6	6	
ウシクサ族(ススキ属など)	91	59	58	96	56	90	37	146	64	103
シバ属	38	15	73	41	56	104	44	70	89	84
キビ族型	8			14		14	7	7	6	
ウシクサ族型	523	433	678	581	647	566	455	633	676	550
ウシクサ族型(大型)	8	7		7	7		7		6	
くさび型		7								
Aタイプ	8	7		7		7			6	19
タケ亜科										
ネザサ節型	136	183	204	280	155	69	66	104	108	84
クマザサ属型		7	7		14	7	15	35	13	19
マダケ属型								6	6	
未分類等	159	169	146	116	176	97	110	70	89	52
その他のイネ科										
表皮毛起源	38	7	44	27	21	28	44	28	32	19
棒状珪酸体	1228	902	1122	1053	1223	911	976	883	989	931
茎部起源	15	7		7				6		
未分類等	894	697	801	841	780	711	719	737	861	795
樹木起源							7			
はめ絵パズル状(ブナ属など)										
植物珪酸体総数	3176	2530	3155	3055	3171	2672	2533	2769	3010	2722

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²·cm)

イネ	0.89	0.86	0.21	0.20	0.41	1.42	1.73	1.02	1.69	1.33
ヨシ属		0.46					0.44	0.40	0.41	
ウシクサ族(ススキ属など)	1.13	0.73	0.72	1.19	0.70	1.11	0.46	1.81	0.79	1.28
ネザサ節型	0.65	0.88	0.98	1.35	0.74	0.33	0.32	0.50	0.52	0.40
クマザサ属型	0.05	0.05			0.11	0.05	0.11	0.26	0.10	0.15

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

表2 三本木III遺跡・平塚遺跡の植物珪酸体分析結果

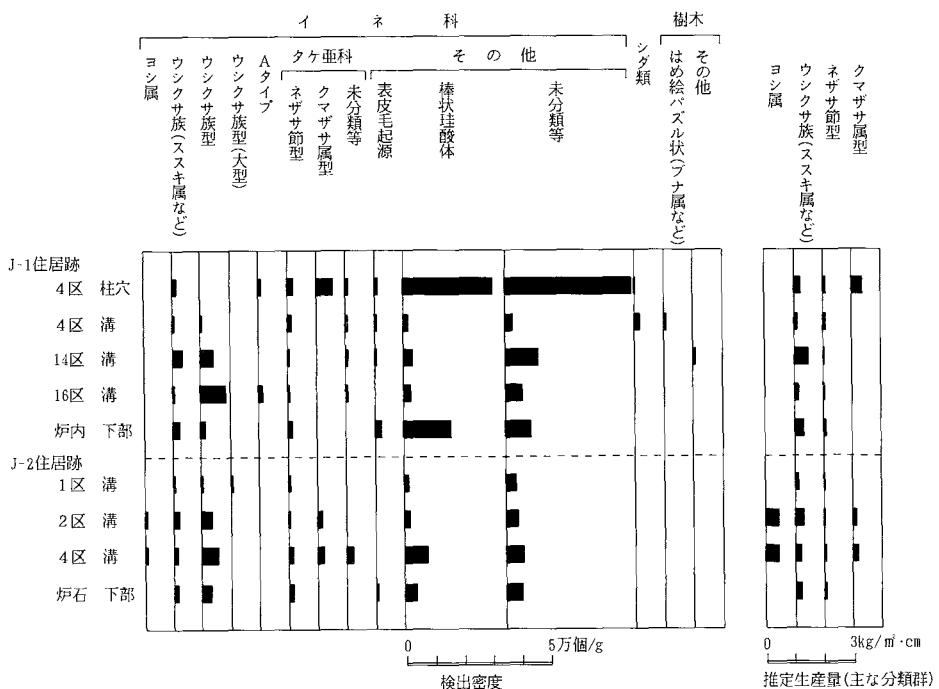


図2 三本木II遺跡の植物珪酸体分析結果

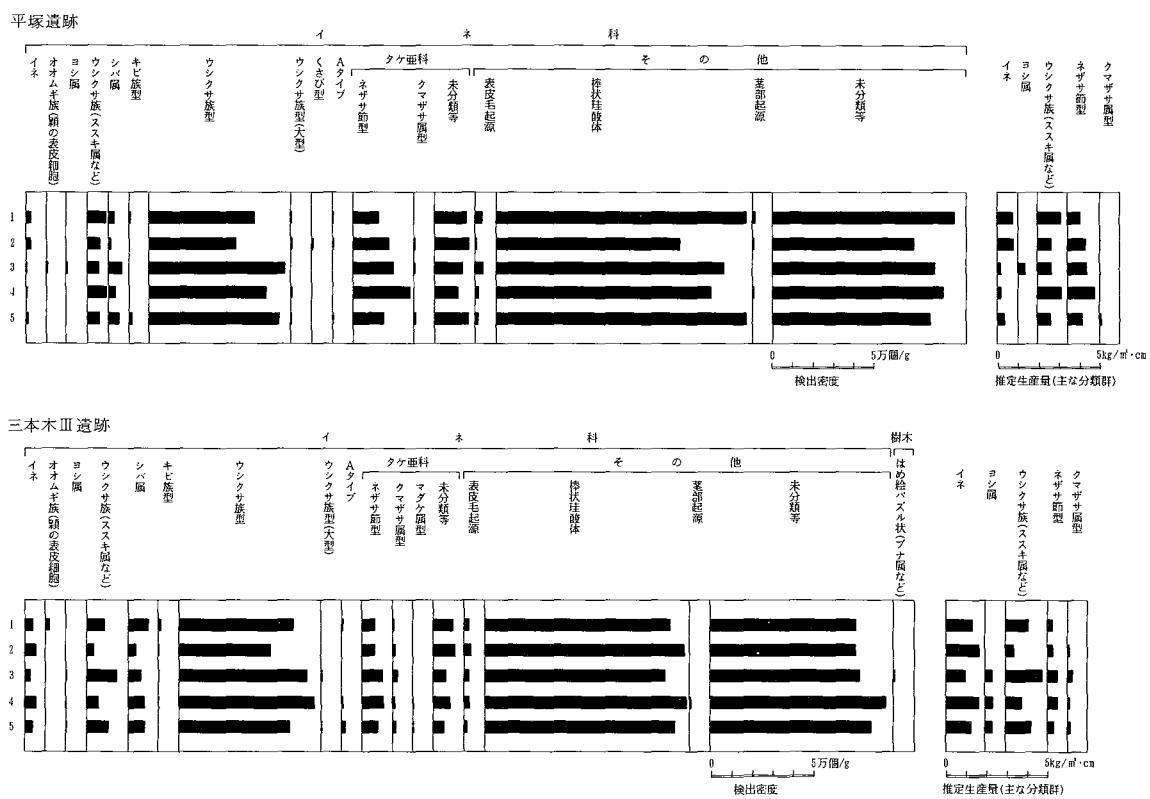


図3 三本木III遺跡・平塚遺跡の植物珪酸体分析結果

三本木III遺跡・平塚遺跡（表2・図3）

[イネ科]

機動細胞由来：イネ、ヨシ属、ウシクサ族（ススキ属やチガヤ属など）、シバ属、キビ族型、ウシクサ族型、ウシクサ族型（大型）、くさび型、Aタイプ、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（おもにクマザサ属）、マダケ属型（マダケ属、ホウライチク属）、タケ亜科（未分類等）

穎の表皮細胞由来：オオムギ族

その他：表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

[樹木]

はめ絵パズル状（ブナ科ブナ属など）

(5) 考 察

a 三本木II遺跡における縄文住居構築材について

分析の結果、J-1住居跡およびJ-2住居跡の壁溝や炉跡からは、ウシクサ族（ススキ属など）やウシクサ族型、ネザサ節型、棒状珪酸体などが検出されたが、いずれも少量である（図2）。柱穴からは、棒状珪酸体が比較的多量に検出されたが、その他の分類群はいずれも少量である。棒状珪酸体はおもにイネ科植物の結合組織細胞に由来しているが、イネ科以外にもカヤツリグサ科やシダ類などでも形成される。イネ科栽培植物に由来する植物珪酸体はいずれの試料からも検出されなかった。

以上の結果から、当時の遺跡周辺は少量ながらススキ属やネザサ節などが生育するイネ科植生であったものと推定される。ススキ属やネザサ節は日当たりの悪い林床では生育が困難であることから、当時の遺跡周辺は森林で覆われたような状況ではなく比較的開かれた環境であったものと推定される。

なお、植物珪酸体の密度が低いことや、その組成にとくに大きな特徴が見られないことから、住居跡における植物利用については不明である。

b 三本木III遺跡・平塚遺跡における近世畠遺構のイネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネをはじめオオムギ族（ムギ類が含まれる）やキビ族（ヒエやアワ、キビなどが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属（シコクビエが含まれる）、モロコシ属などがある。このうち、浅間A軽石（As-A, 1783年）直下の畠遺構からはイネとオオムギ族が検出された。

イネは、分析を行ったすべての試料から検出された（図3）。密度は、D区中央部では平均4,900個/g（最大5,900個/g）と高い値であり、稻作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/gを上回っている。F区D-2グリッドでは密度が平均1,700個/g（最大3,000個/g）と比較的低い値であるが、同遺構は直上をAs-Aによって覆われていることから、上層から後代の植物珪酸体が混入したことは考えにくい。これらのことから、各地点のAs-A直下畠遺構では稻作が行われていた可能性が高いと考えられる。D区中央部とF区D-2グリッドでは植物珪酸体密度に明瞭な違いが認められたが、これは稻作期間の違いによるものと考えられる。

オオムギ族（穎の表皮細胞）は、D区中央部の試料1とF区D-2グリッドの試料3から検出された。密度は、前者で2,100個/g、後者で700個/gと比較的低い値である。オオムギ族については標本の検

討が十分とは言えないが、ここで検出されたのはムギ類（コムギやオオムギなど）と見られる形態のもの（杉山・石井、1989）である。したがって、同遺構でムギ類が栽培されていた可能性が考えられる。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、未分類等としたものの中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題といい。

c 三本木川遺跡・平塚遺跡における植物珪酸体分析からみた近世の植生・環境

上記以外の分類群では、全体的にウシクサ族型や棒状珪酸体が多量に検出され、ウシクサ族（ススキ属など）やネザサ節型も比較的多く検出された。また、シバ属やヨシ属、マダケ属型なども検出された。棒状珪酸体はおもにイネ科植物の結合組織細胞に由来しているが、その形態についてはこれまであまり検討がなされていないことから、給源植物の究明については今後の課題としたい。おもな分類群の推定生産量（図3の右側）によると、イネ以外ではウシクサ族（ススキ属など）やネザサ節型が優勢となっていることが分かる。

以上のことから、As—A直下層の堆積当時は、棒状珪酸体やウシクサ族型の給源植物をはじめ、ススキ属やネザサ節、シバ属、ヨシ属、マダケ属なども見られるイネ科植生が分布していたものと推定される。調査地点は畠遺構であることから、遺跡周辺に生育していたこれらの植物が堆肥や植物灰などとして畠に投入されていた可能性も考えられる。

マダケ属にはマダケやモウソウチクなど有用な物が多く、建築材や生活用具、食用などとしての利用価値が高い。また、ススキ属などその他の植物も燃料や道具、住居の屋根材や敷物などとして盛んに利用されていたものと考えられる。

〈参考文献〉

- 杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体。富士竹類植物園報告、第31号：p.70-83.
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－。考古学
と自然科学、9：p.15-29.
杉山真二（1987）遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点。植生史研究、第2号：p.27-37
杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕追究のため
の基礎資料として—。考古学と自然科学、20：p.81-92.
杉山真二・石井克己（1989）群馬県子持村、F P直下から検出された灰化物の植物珪酸体（プラント・オパール）分析。
日本第四紀学会要旨集、19：p.94-95.

3 花粉分析

金原正子(株)古環境研究所

(1) 試料と方法

試料は、落合II遺跡C区低地下位の黒灰色粘土層である。花粉粒の分離抽出は、基本的には中村(1973)を参考にし、以下の順で物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
 - 2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
 - 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
 - 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す。
 - 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
 - 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。
- 以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm・2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。
- 検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の同定は、島倉(1973)および中村(1980)を基本とし、所有の現生標本との対比で行った。

(2) 結果と考察

分析の結果、樹木花粉のスギとシダ植物单条溝胞子が検出されたが、いずれも微量である(表1)。このため、花粉分析の結果から当時の植生を復原することは困難である。花粉がほとんど検出されないのは、風化作用や土壤生成作用によって、花粉などの有機物が分解されたためと考えられる。

〈参考文献〉

- 中村 純(1973)花粉分析, 古今書院。
金原正明(1993)花粉分析法による古環境復原, 新版古代の日本 第10巻 古代資料研究の方法, 角川書店。
日本第四紀学会編(1993)第四紀試料分析法, 東京大学出版会。
島倉巳三郎(1973)日本植物の花粉形態, 大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集。

4 古墳構築石材について

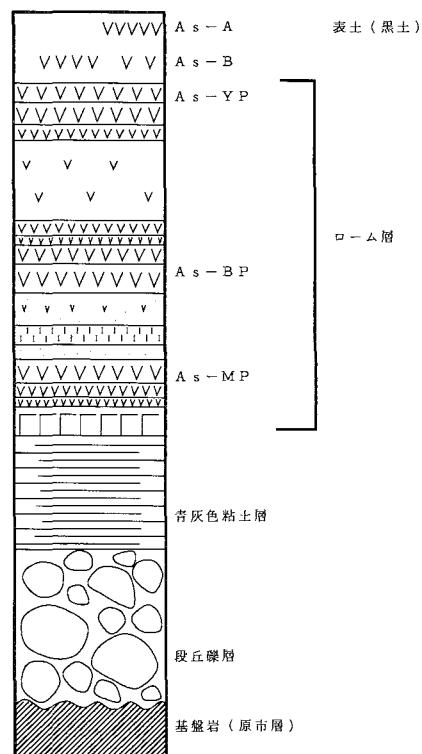
磯貝基一

平塚遺跡は碓氷川右岸の横野台地（高位段丘面）上に位置し、遺跡の南端から古墳が2基発掘された。古墳を形成している葺石・石室石材のほとんどは安山岩の円礫よりなっている。そこで、平塚遺跡周辺の地形・地質及び河川礫を調査し、古墳構築石材の採取、搬入などについて検討した。

平塚遺跡周辺は高位段丘面（台地）とそれを刻む猫沢川によって形成された谷地（低地）部分からなっている。遺跡南より下流の猫沢川流域には、基盤の泥岩、凝灰質砂岩からなる原市層（吉井層）がところどころに露出している。原市層の上には新しい段丘礫層がのっている。段丘礫層中の円礫は礫径が5cm～30cmで、ほとんどが輝石安山岩である。円礫の中には腐れ礫的なものも含まれている。猫沢川を歩くと河川礫としてそれらの円礫がみられる。段丘礫層の上には青灰色の粘土層が堆積している。遺跡より上流の猫沢川及びその支流の砂押川流域にはローム層が厚く堆積している。ローム層は、下位よりAs—MP（室田軽石）、As—BP（板鼻褐色軽石）、As—YP（板鼻黄色軽石）などを挟み、浅間山起源の軽石、火山灰、火山砂、火山礫などからなっている。ローム層の上には表土（黒土）が堆積し、その中にもAs—A（浅間A軽石）、As—B（浅間B軽石）がところにより挟在しているのがみられる。横野台地の地層の層序を模式柱状図で表すと下図のようになる。

平塚遺跡に最も近い鏑川と碓氷川の河川礫調査では、鏑川では安山岩礫が55%、碓氷川では85%であった。鏑川の安山岩礫は等粒斑晶安山岩が多く、僅かにガラス質安山岩、無斑晶質安山岩が含まれる。碓氷川の安山岩礫には粗粒斑晶安山岩、等粒斑晶安山岩、大輝石斑晶安山岩が多く、角閃石安山岩、石英安山岩が僅かに含まれる。段丘の安山岩礫はほぼ碓氷川の安山岩礫に類似する。平塚遺跡の古墳構築石材は粗粒斑晶安山岩、等粒斑晶安山岩、大輝石斑晶安山岩などの安山岩礫で構成され、腐れ礫的なものも含まれる。

以上のことから古墳構築石材の採取、搬入を考えると、礫径30cm以下の安山岩礫は近くの段丘礫を集めて使用したのであろう。天井石などに使われている長径1～2mの安山岩礫は碓氷川や遺跡周辺に露出していたものを持ち込んだものと思われる。



第1図 模式柱状図

〈参考文献〉

- 磯貝基一 (1994) 「石器石材分析—安山岩製石器石材について—」 中野谷地区遺跡群・自然科学編, p.103-110, 安中市教育委員会
堀越武男 (1993) 「芝宮古墳群の構築石材及び礫について」 芝宮古墳群, p.153-156, 富岡市教育委員会

写 真 図 版

落合II遺跡

図版1



落合II遺跡全景



K-1号墳全景



K-1号墳南東から



K-1号墳周溝2区土層断面



K-1号墳土層断面



K-1号墳周溝1区土層断面

落合II遺跡

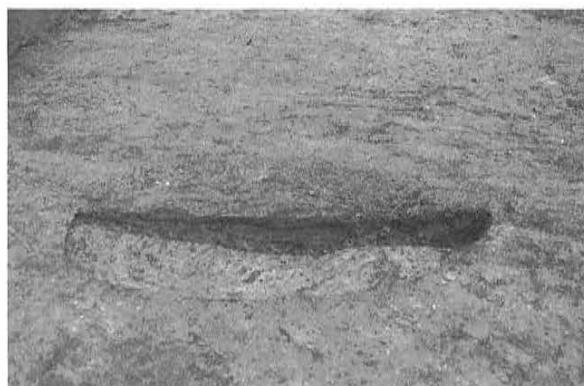
図版3



落合II遺跡（東から）



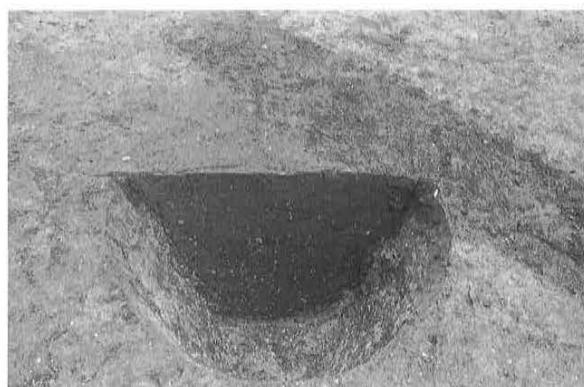
D-1号土坑



D-1号土坑土層断面



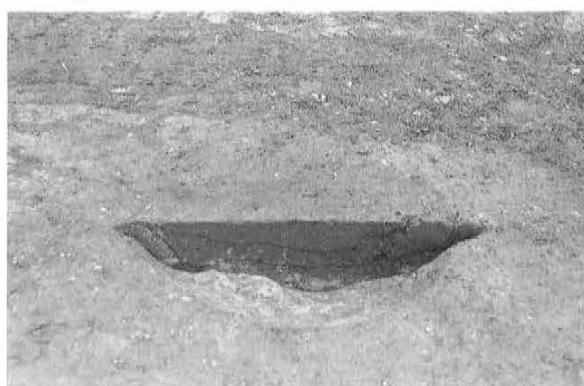
D-2号陷穴



D-2号陷穴土層断面

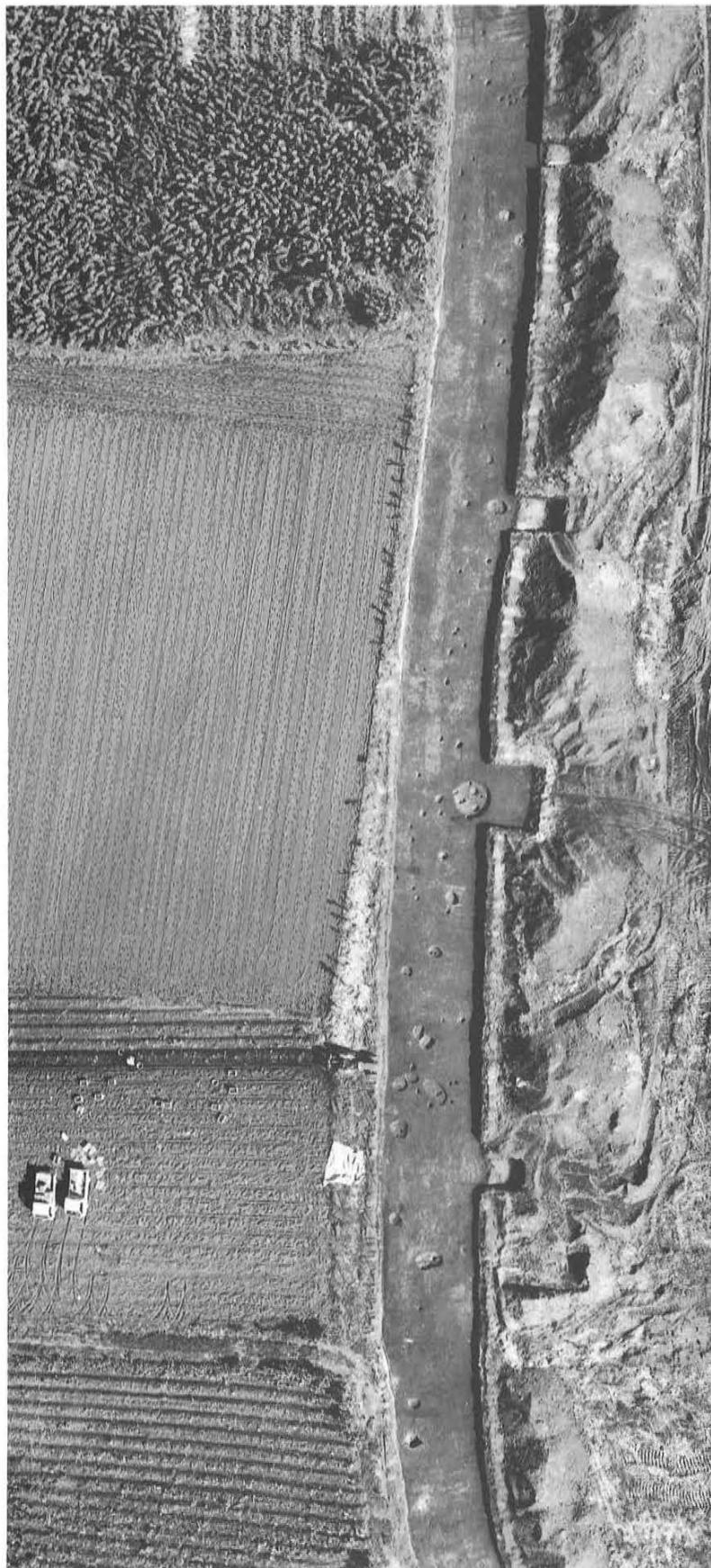


D-3号土坑



D-3号土坑土層断面

図版4



三本木II遺跡全景

三本木II遺跡



遺跡東部分



遺跡中央部分



遺跡西部分

三本木II遺跡

図版5



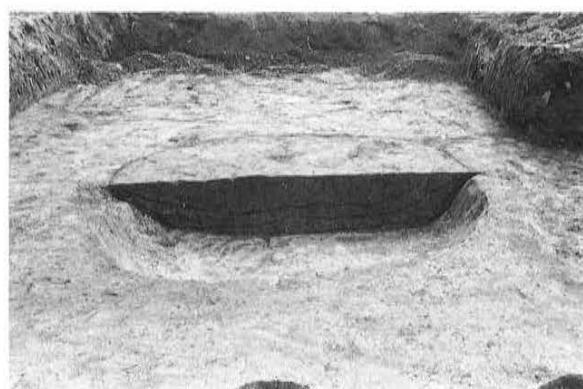
T-1号竖穴状遺構



T-1号竖穴状遺構土層断面



D-21号竖穴状遺構



D-21号竖穴状遺構土層断面



D-6号陷穴



S-1号集石土坑



D-7号土坑



D-7号土坑土層断面

図版 6

三本木 II 遺跡



三本木 II 遺跡全景

三本木II遺跡

図版 7



J-1号住居址



J-1号住居址東西土層断面



J-1号住居址南北土層断面

図版 8



J-1号住居址北西部遺物出土状況

三本木II遺跡



J-1号住居址北東部遺物出土状況



J-1号住居址南東部遺物出土状況



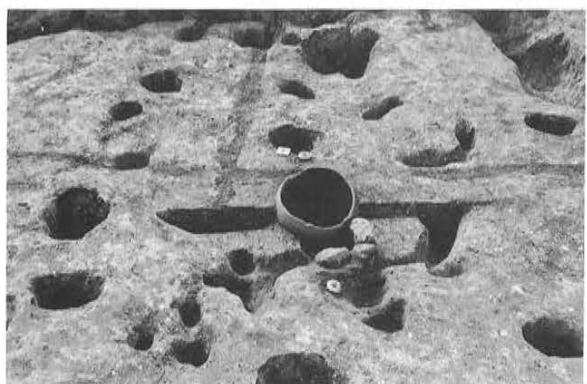
J-1号住居址南西部遺物出土状況



J-1号住居址炉址



J-1号住居址炉体土器断面



J-1号住居址炉址出土状況



三本木II遺跡調査風景



J-2号住居址



J-2号住居址東西土層断面



J-2号住居址南北土層断面



J-2号住居址遺物出土状況



J-2号住居址炉址



J-2号住居址炉址土層断面



S-2号集石土坑(1)



S-2号集石土坑(2)

三本木II遺跡

図版11



J-3号住居址



J-3号住居址8区石匙出土状況



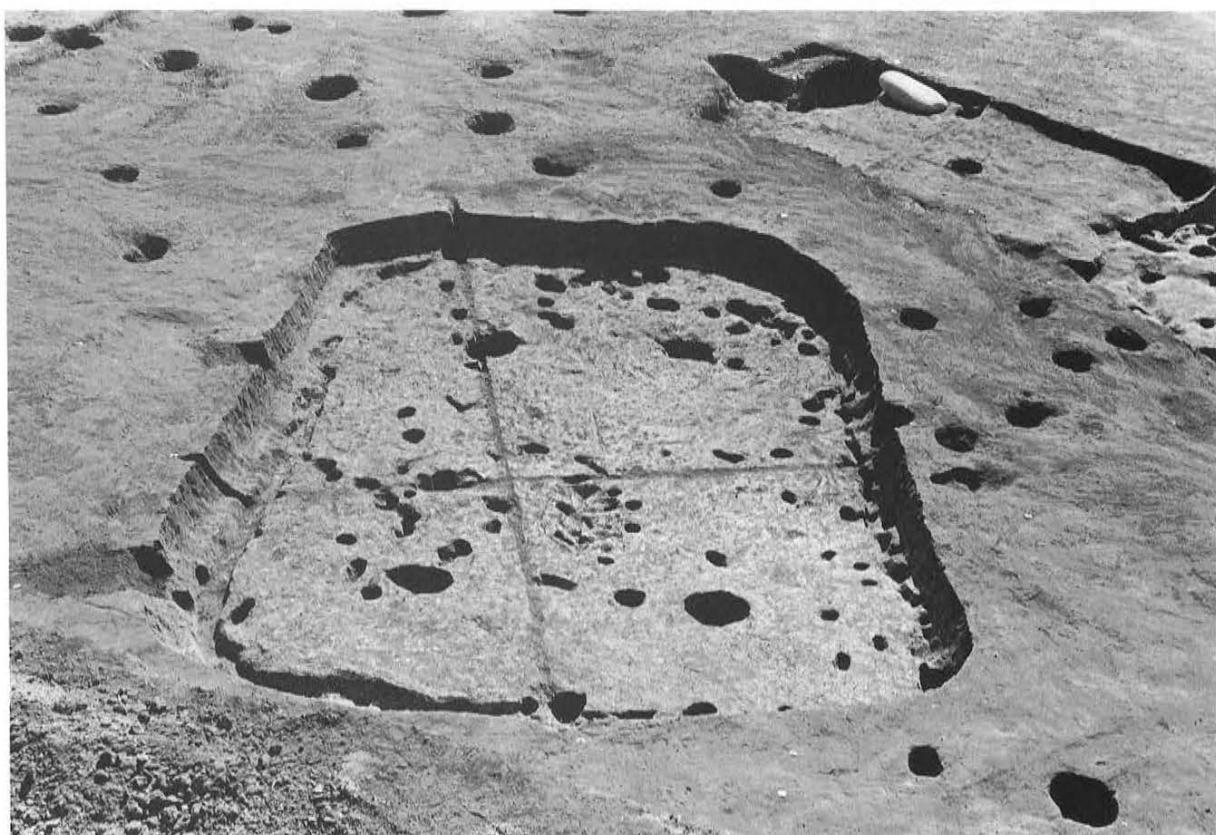
J-3号住居址炉址



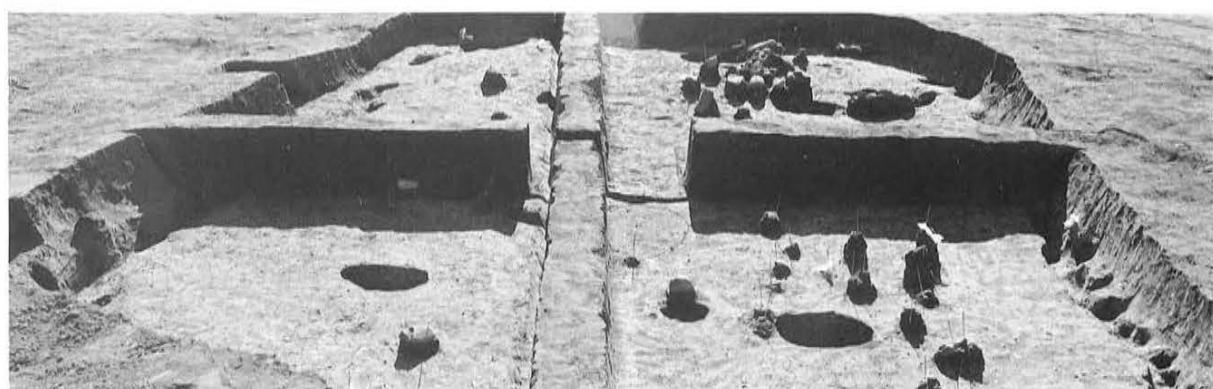
J-3号住居址炉址土層断面



J-3号住居址の柱穴配置



J-4号住居址



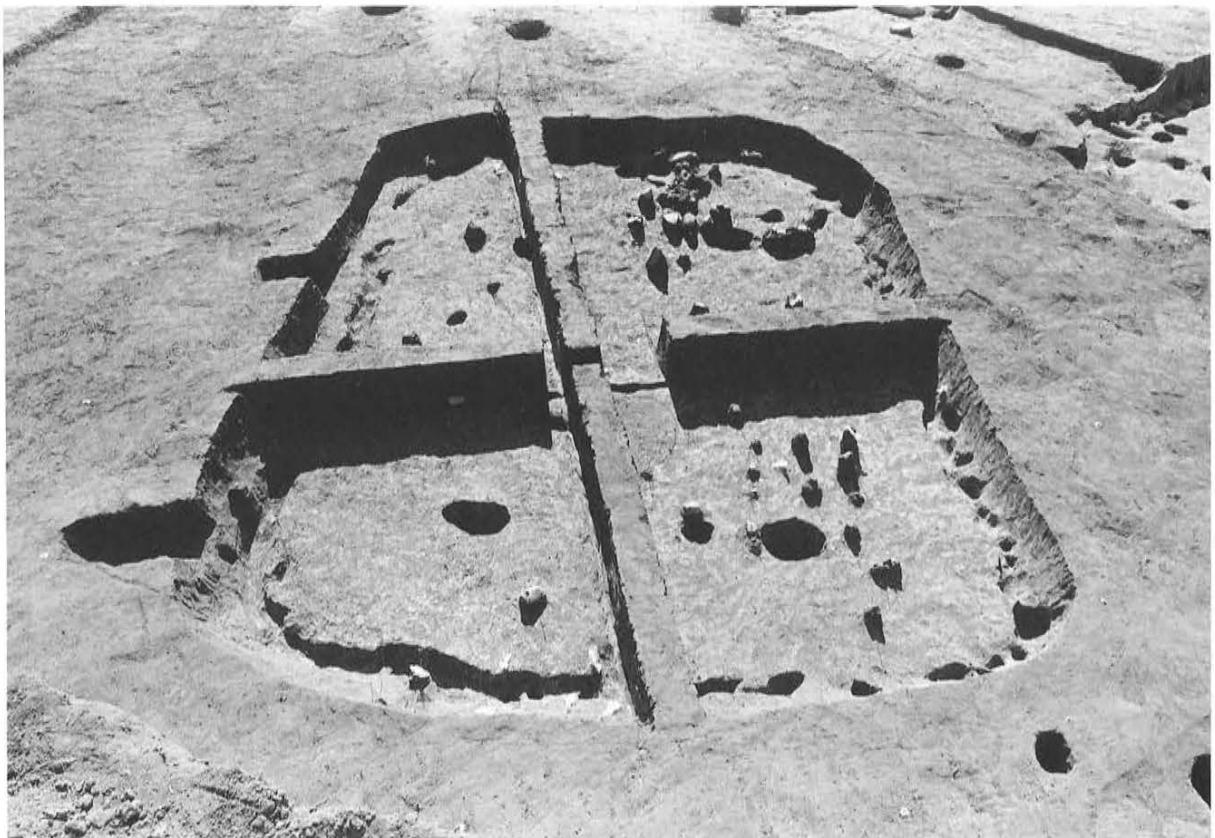
J-4号住居址東西土層断面



J-4号住居址南北土層断面

三本木II遺跡

図版13



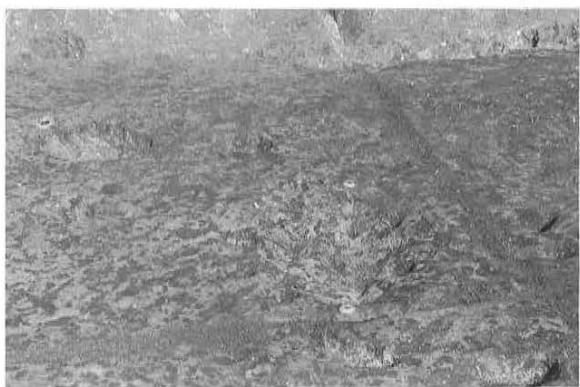
J-4号住居址遺物出土状況



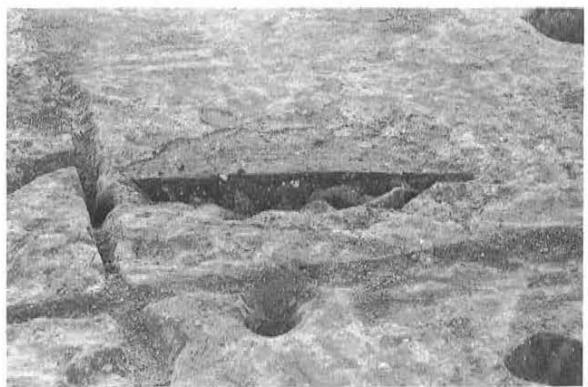
J-4号住居址南西部遺物出土状況



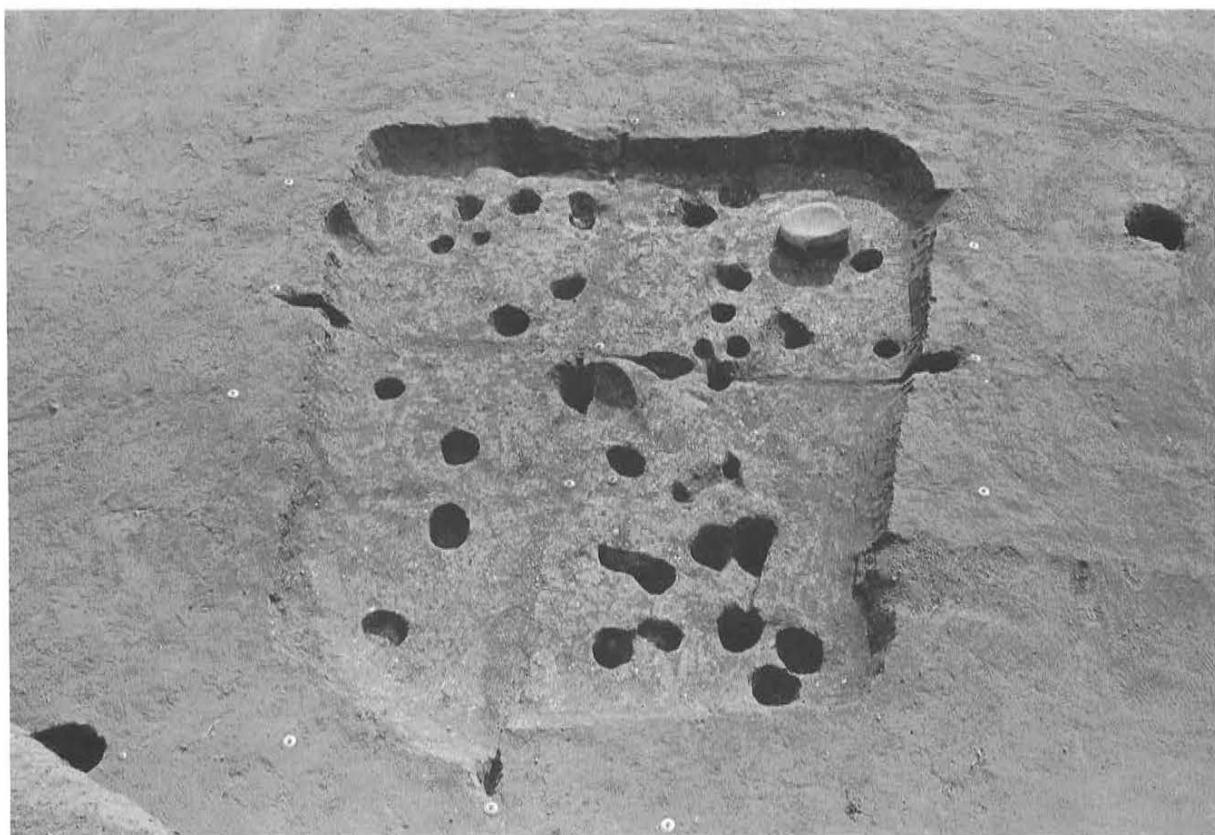
J-4号住居址9区深鉢出土状況



J-4号住居址炉址



J-4号住居址炉址土層断面



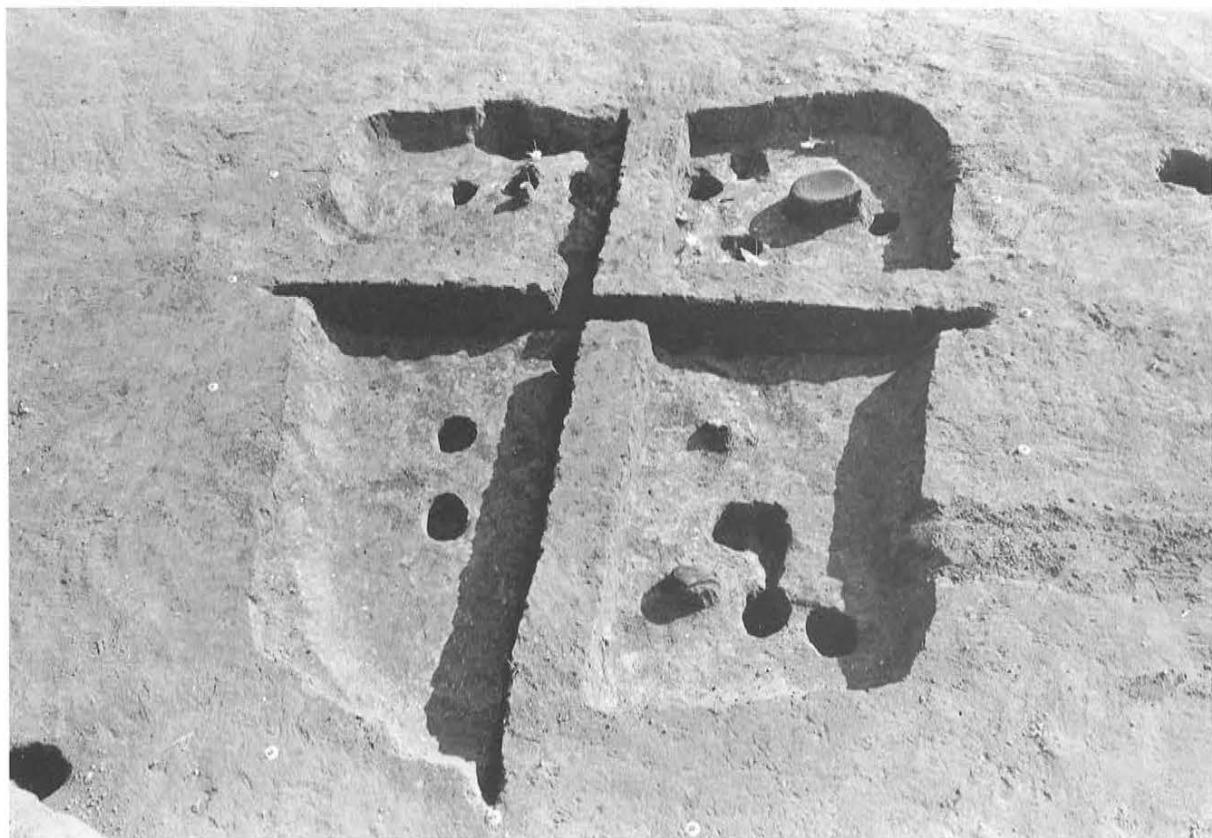
J-5号住居址



J-5号住居址東西土層断面



J-5号住居址南北土層断面



J-5号住居址遺物出土状況



J-5号住居址南西部遺物出土状況



J-5号住居址炉址



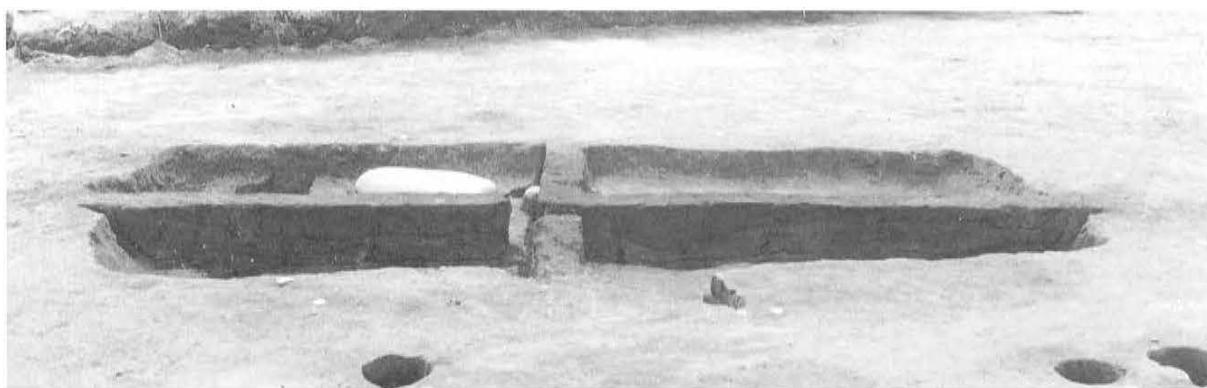
J-5号住居址炉址土層断面



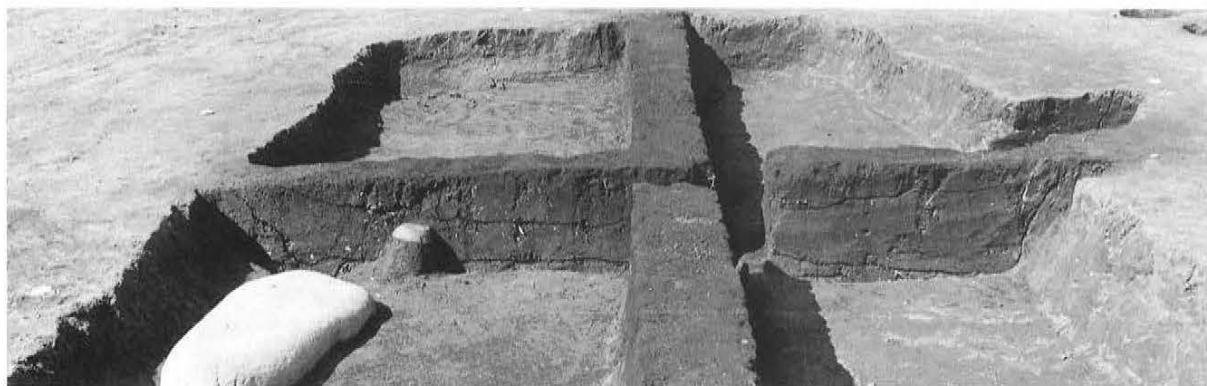
縄文時代の住居址群



H-1号住居址



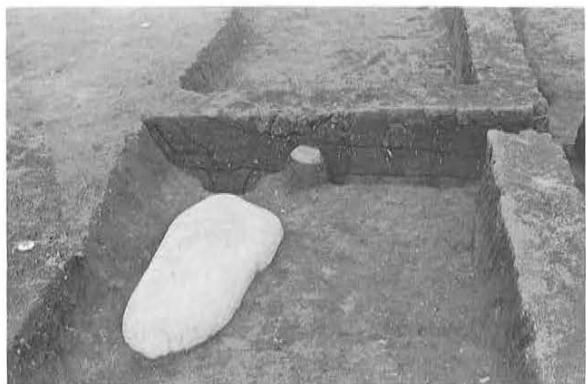
H-1号住居址東西土層断面



H-1号住居址南北土層断面

三本木II遺跡

図版17



H-1号住居址遺物出土状況



H-1号住居D-1南北土層断面



H-1号住居址竈



H-1号住居址竈土層断面



H-1号住居址と周辺の柱立穴群



H-2号住居址



H-2号住居址南北土層断面



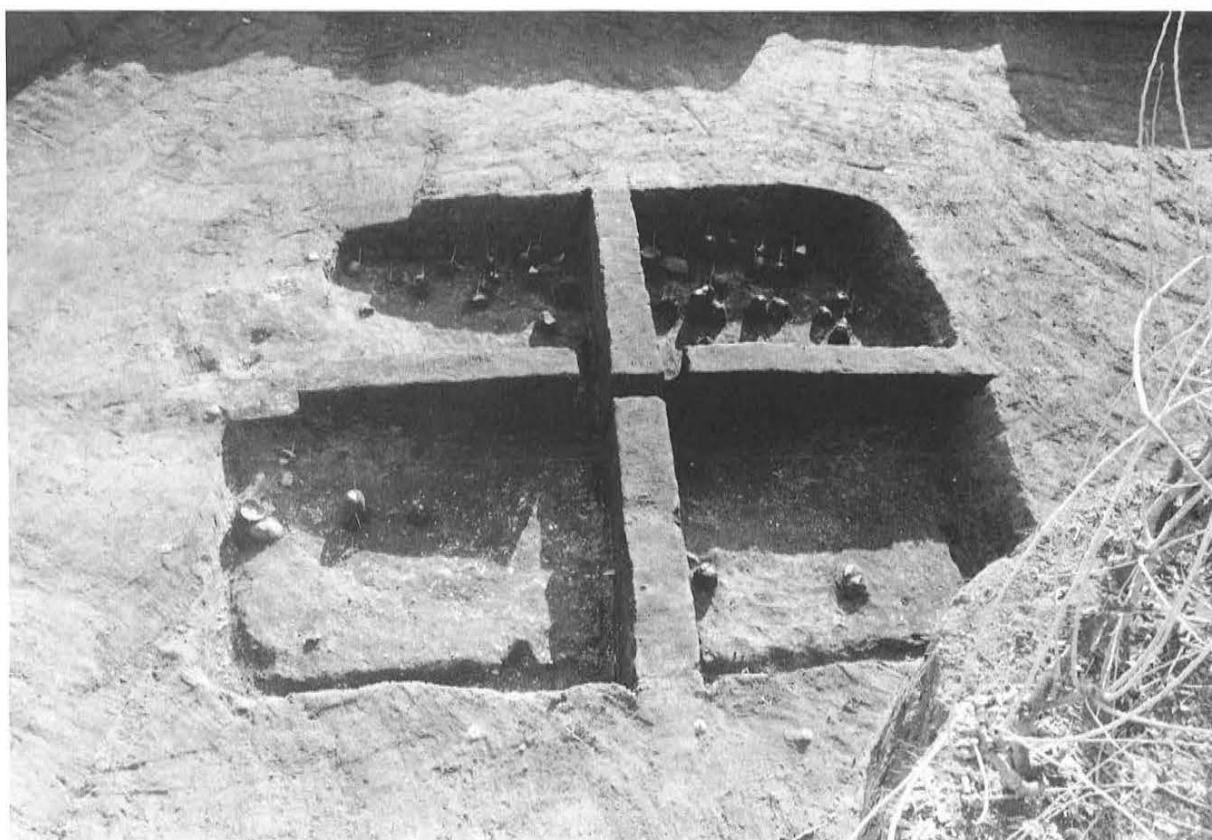
H-2号住居址横遺物出土状況



H-2号住居址土層断面

三本木III遺跡

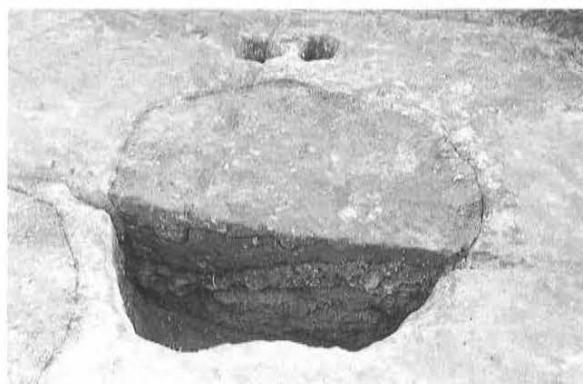
図版19



H—2号住居址遺物出土状況



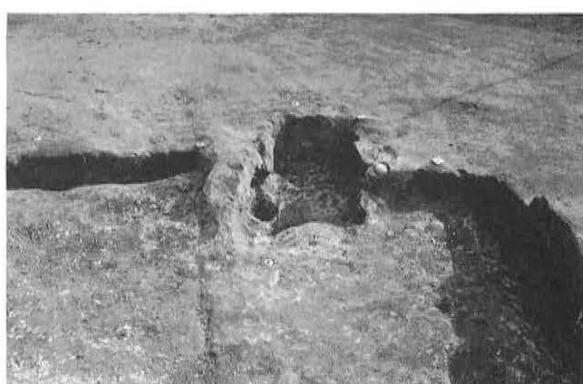
H—2号住D—1号土坑



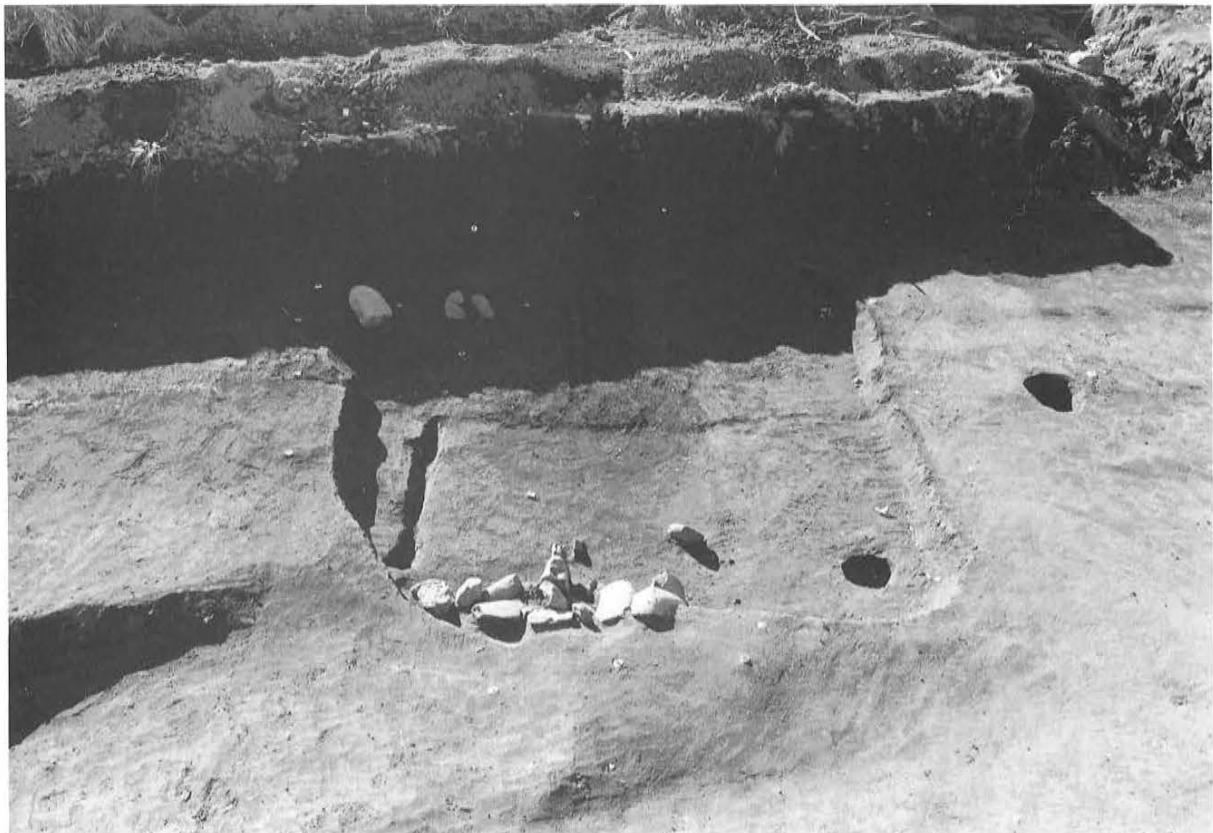
D—1号土坑土層断面



H—2号住居址掘方



H—2号住居址竪掘方



H—3号住居址



H—3号住居址南北土層断面



H—3号住居址北東部遺物出土状況



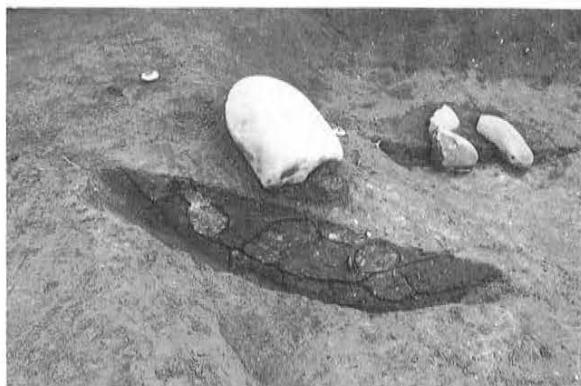
H—3号住居址9区遺物出土状況

三本木III遺跡

図版21



H—3号住居址竈1



H—3号住居址竈1 土層断面



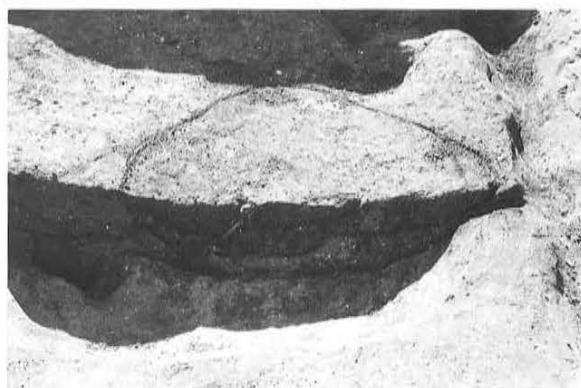
H—3号住居址竈2



H—3号住居址竈2 土層断面



H—3号住D—1号土坑



D—1号土坑土層断面



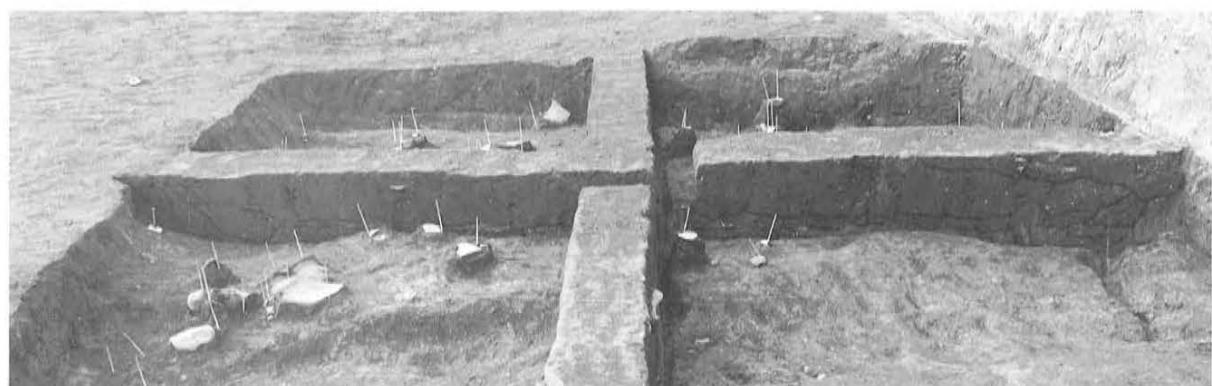
H—3号住D—2号土坑土層断面



H—3号住居址掘方



H-4号住居址



H-4号住居址南北土層断面



H-4号住D-1号土坑土層断面



H-4号住D-2号土坑



H-4号住居址遺物出土状況



H-4号住居址遺物出土状況



H-4号住居址南東部遺物出土状況



H-4号住居址北西部遺物出土状況



H-4号住居址南西部遺物出土状況



H-5号住居址



H-5号住居址東西土層断面



H-5号住居址南北土層断面

三本木III遺跡

図版25



H-5号住居址南西部遺物出土状況



H-5号住居址南東部遺物出土状況



H-5号住竈（1）



H-5号住竈土層断面



H-5号住竈（2）



H-5号住D-1号土坑土層断面



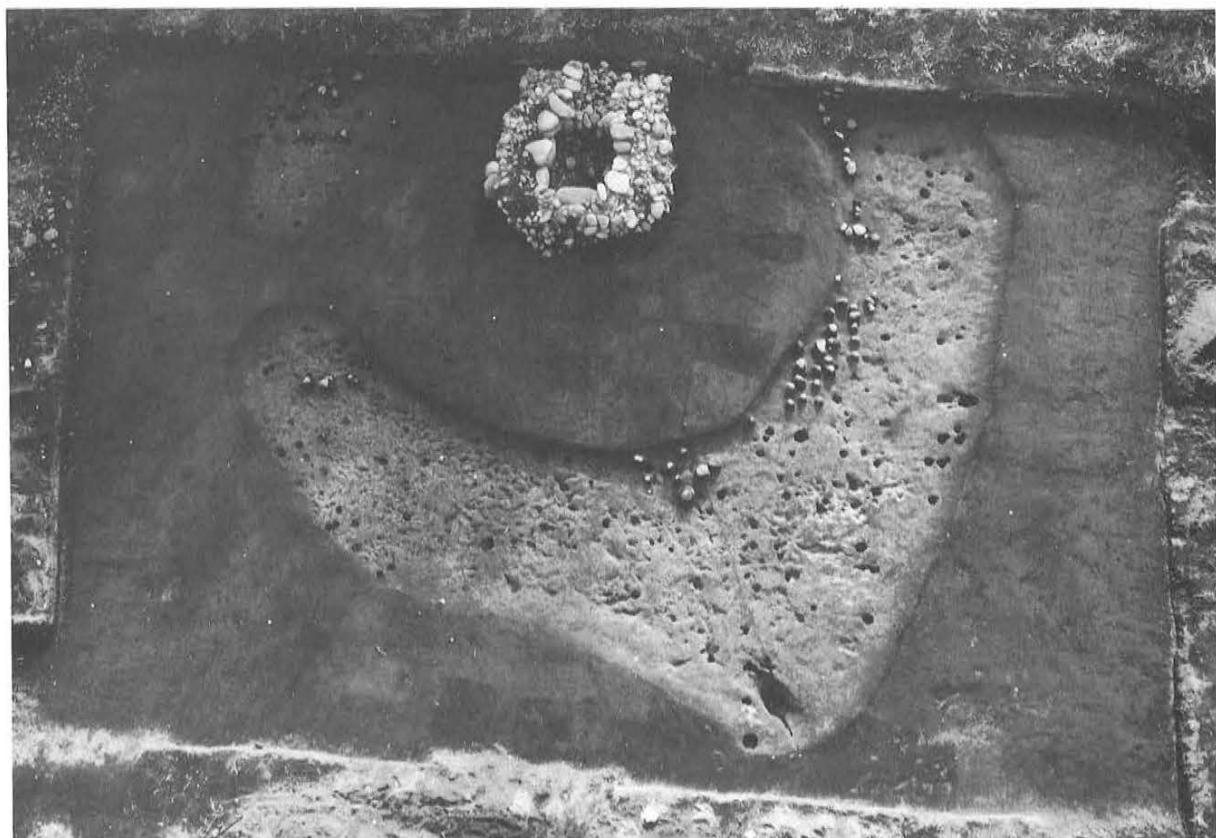
柱穴群全景



近世烟址土層断面

図版26

平塚遺跡



平塚遺跡K-1号墳全景（1）



平塚遺跡K-1号墳全景（2）



平塚遺跡浅間A軽石直下の畠址



平塚遺跡畠址全景



A軽石除去時のK-1号墳（北から）



A軽石除去時のK-1号墳（西から）



A軽石除去時のK-1号墳（南から）



K-1号墳主体部（東から）



K-1号墳主体部（北から）



K-1号墳天井石出土状況



K-1号墳盛土土層断面(東側)



K-1号墳主体部土層断面



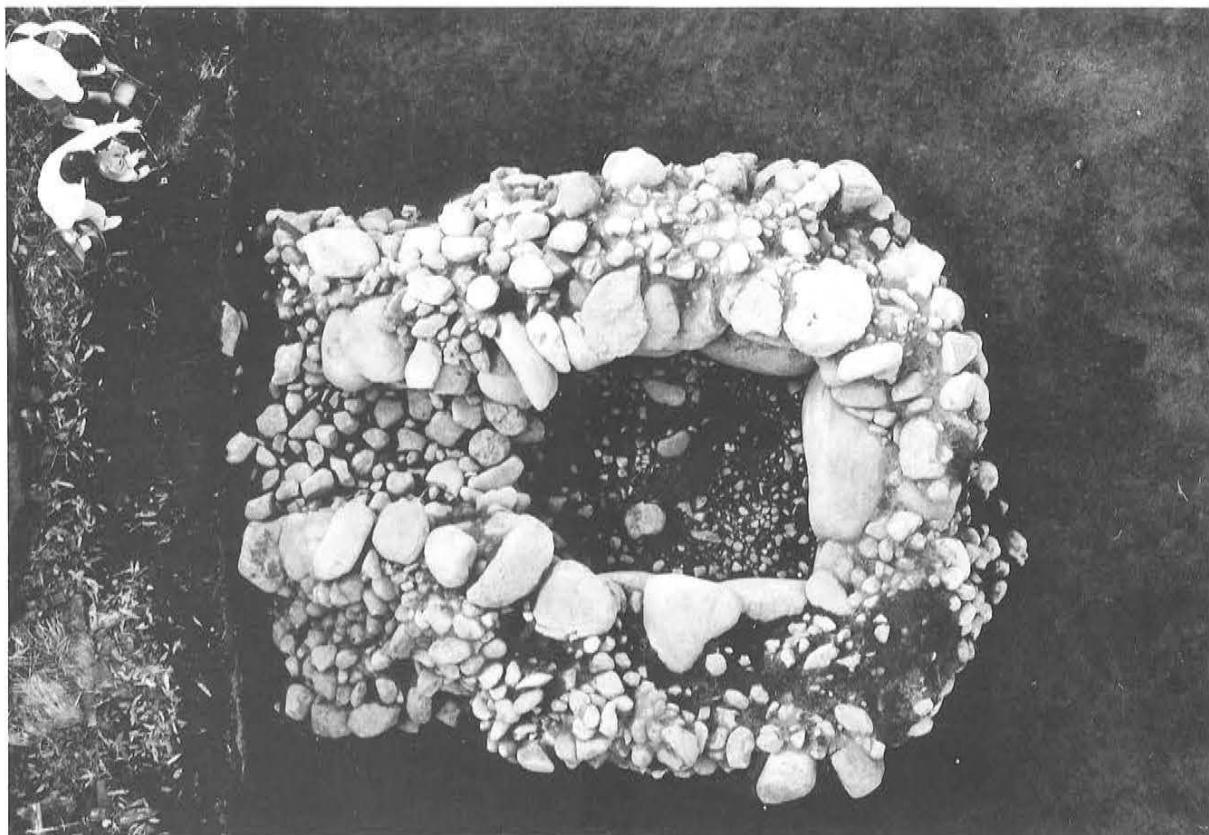
K-1号墳盛土土層断面(西側)



K-1号墳羨道



K-1号墳羨道・玄室



K-1号墳主体部



K-1号墳玄室（南から）



K-1号墳玄室（北から）



K-1号墳玄室（東から）



K-1号墳玄室鉄釘出土状況

平塚遺跡

図版31



K-1号墳東側（5区）周溝土層断面



K-1号墳西側（2区）周溝土層断面



K-1号墳周溝3区土層断面



K-1号墳周溝3区礫出土状況



K-1号墳周溝6区遺物出土状況



K-1号墳周溝5区遺物出土状況



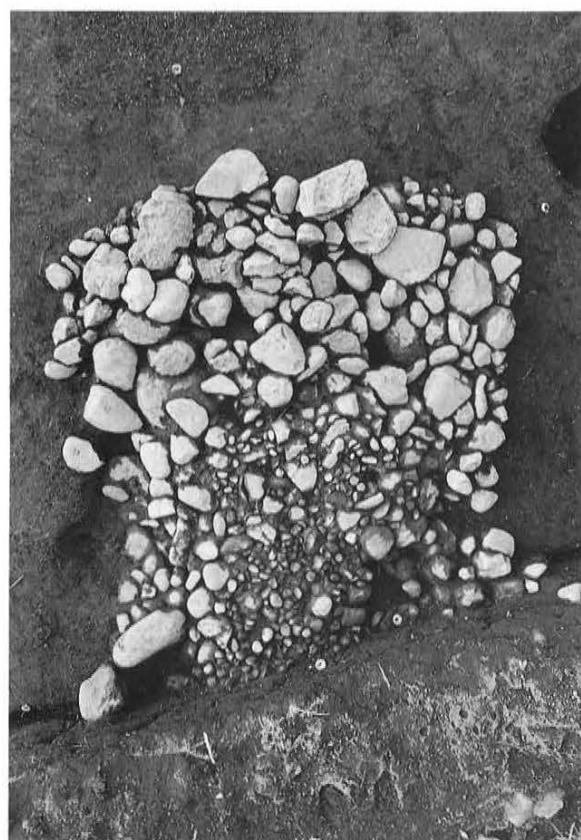
K-1号墳西側掘方土層断面



K-1号墳周溝4区工具痕



平塚遺跡K-2号墳全景（1）



K-2号墳主体部



K-2号墳全景（2）



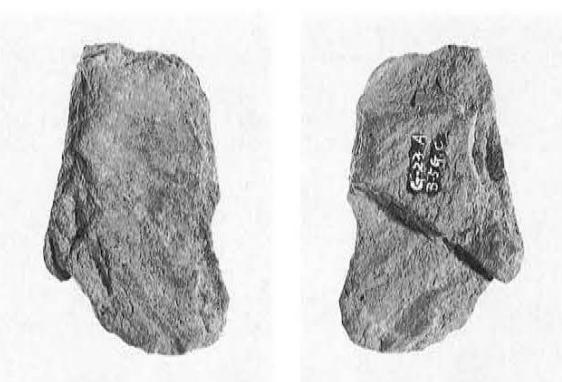
K-2号墳周溝1区南壁土層断面

落合II遺跡

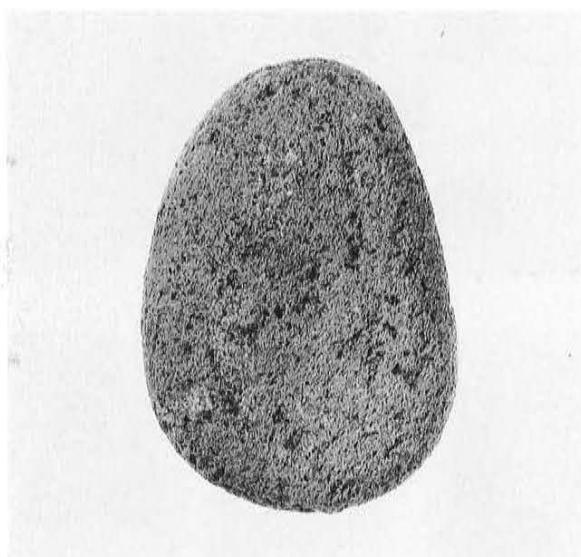
図版33



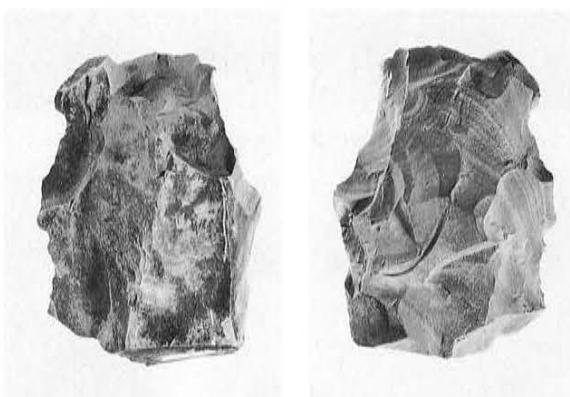
A区出土の土器



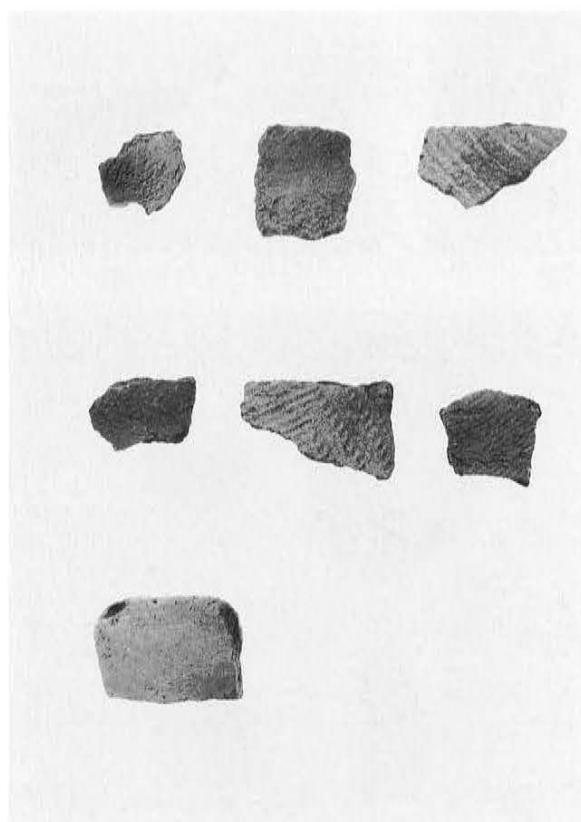
打製石斧



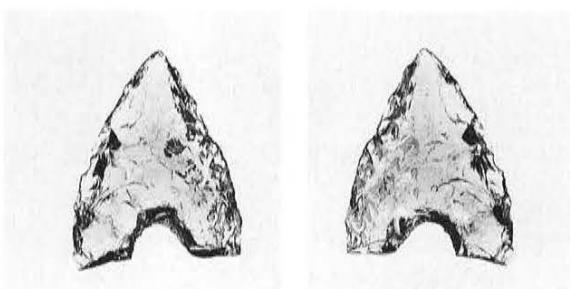
磨石



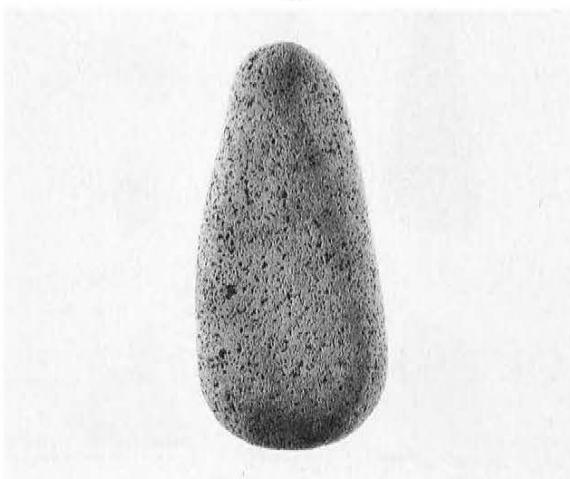
石核B類



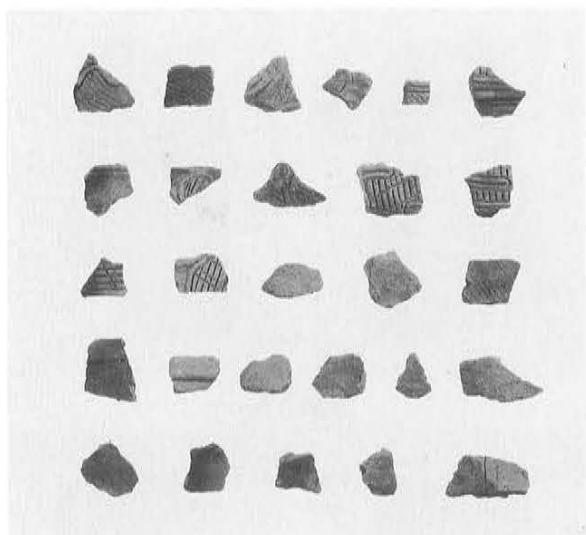
C区低地出土の土器



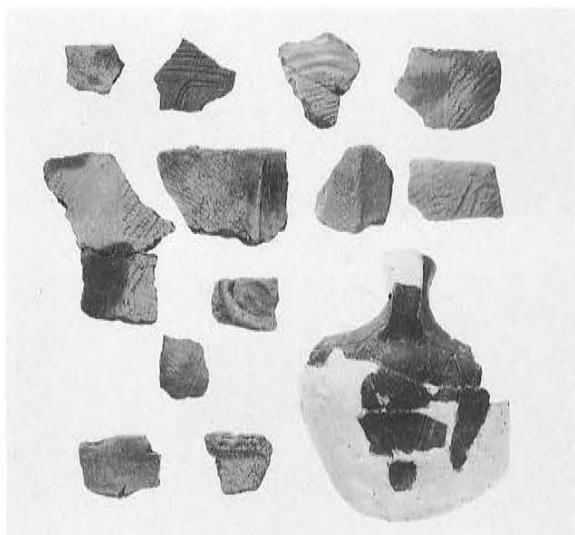
石鏃



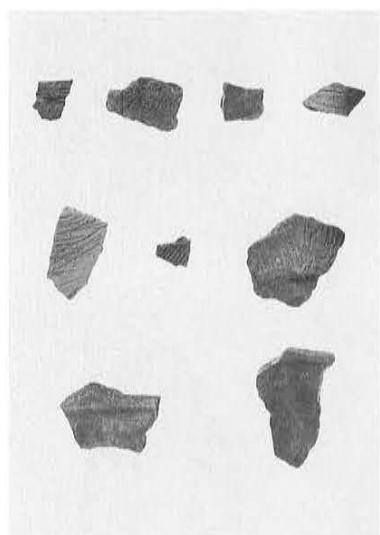
凹石



B区出土の土器



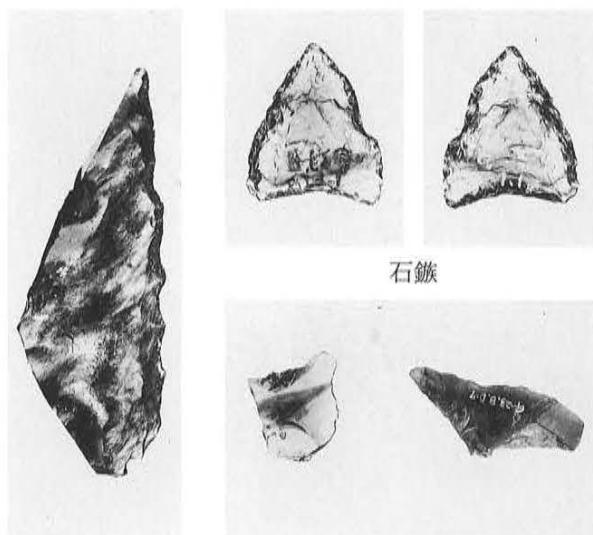
B区中期土坑の出土の土器



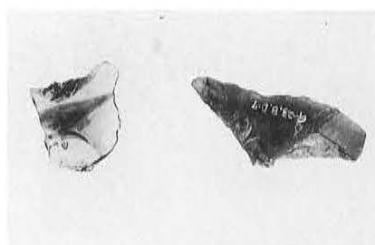
B区調査区出土の土器



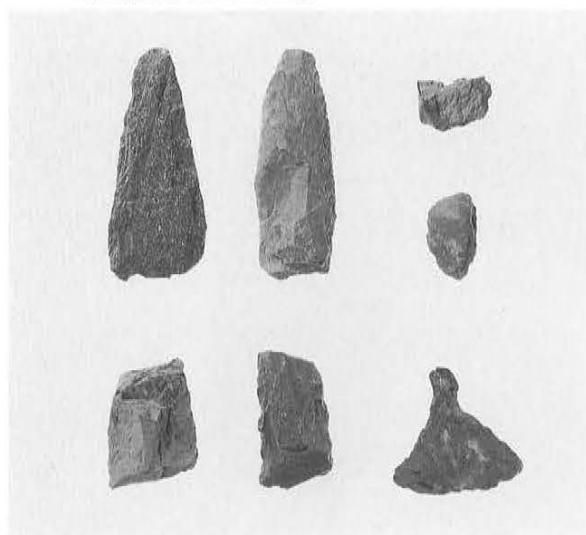
ナイフ形石器



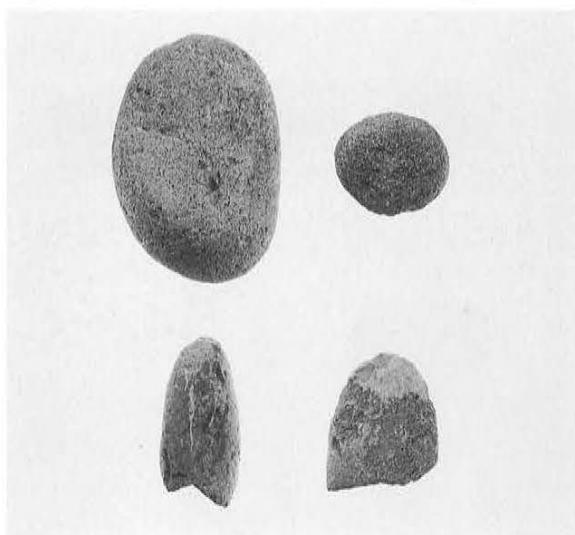
石鎌



スクレイパーA類



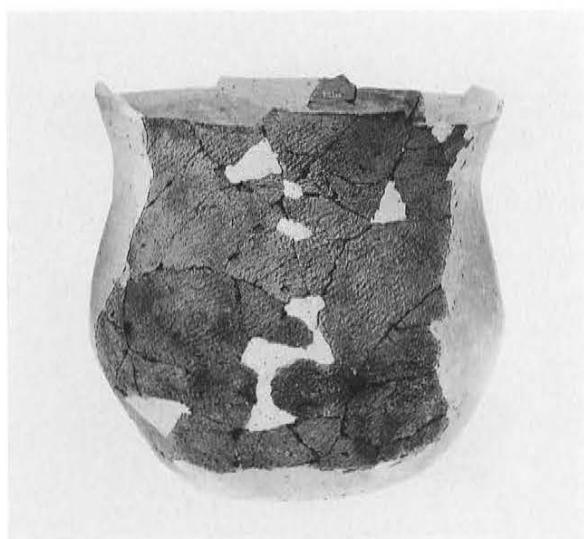
打製石斧・石匙B類



磨石・凹石・磨製石斧等

三本木II遺跡

図版35



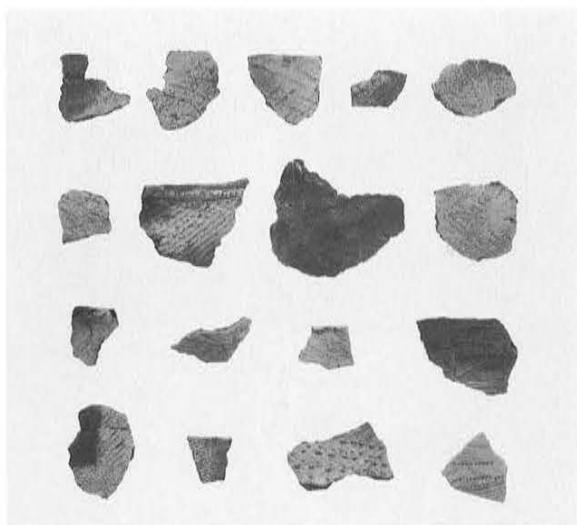
J-1号住居址出土の深鉢



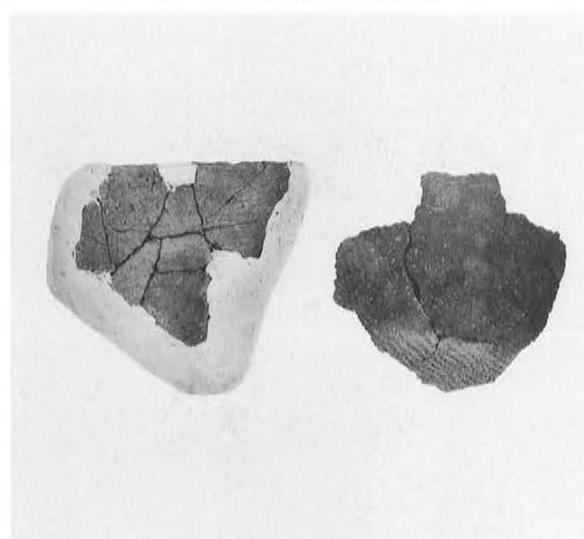
J-1号住居址出土の深鉢



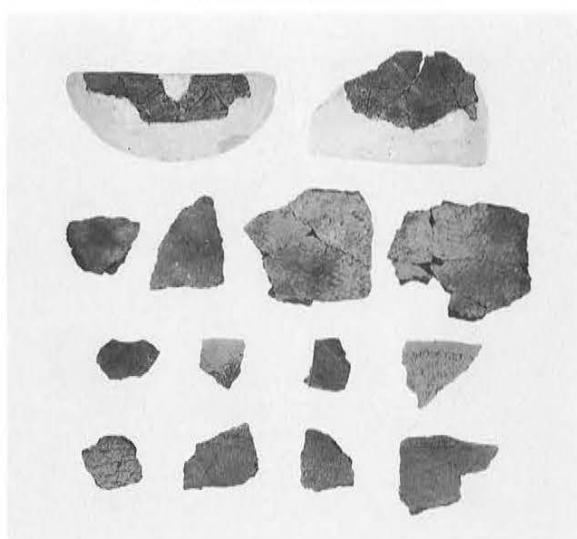
J-1号住居址炉体の深鉢



J-2号住居址出土の土器



J-1号住居址出土の土器



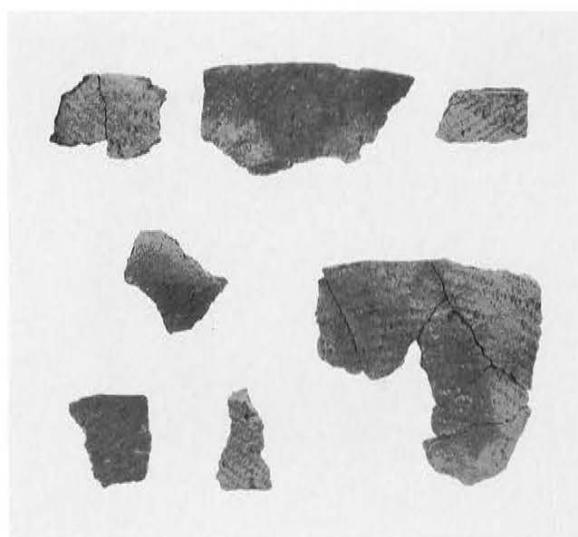
J-1号住居址出土の土器

図版36

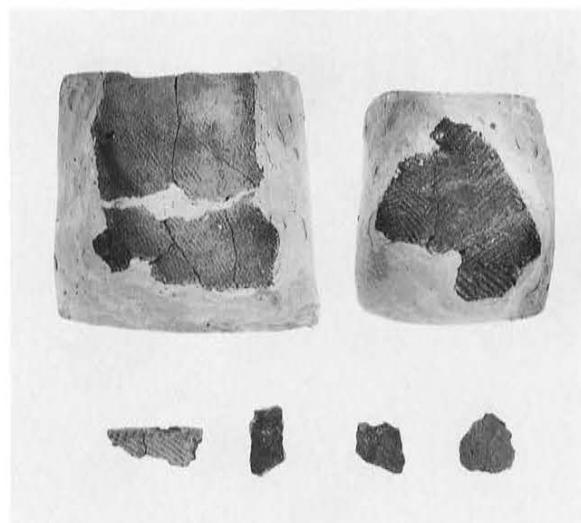
三木木II遺跡



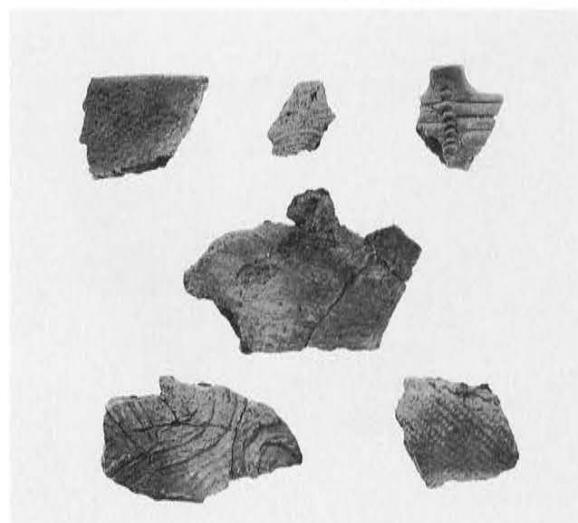
J-4号住居址出土の深鉢



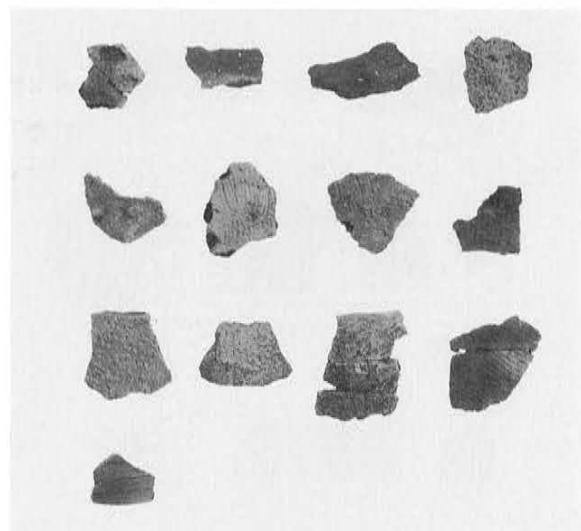
J-4号住居址出土の土器



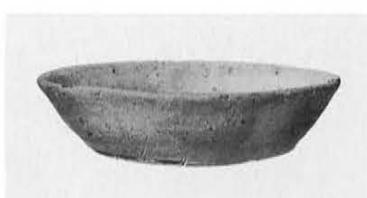
J-3号住居址出土の土器



J-5号住居址出土の土器



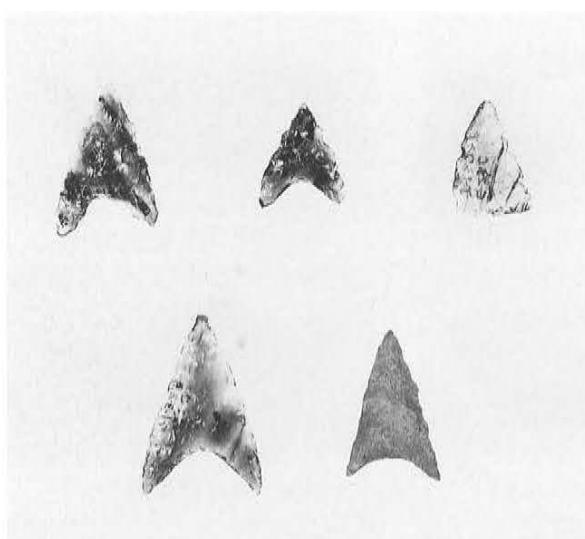
調査区出土の土器



H-1号住居址出土の壺



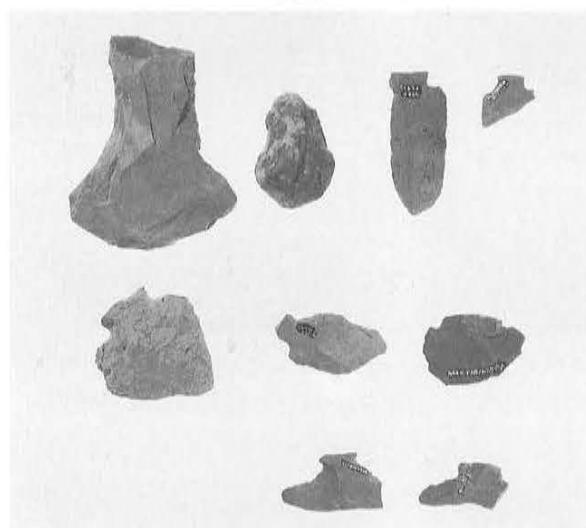
H-1号住居址出土の皿



石鏃



石錐・スクレイパー A類



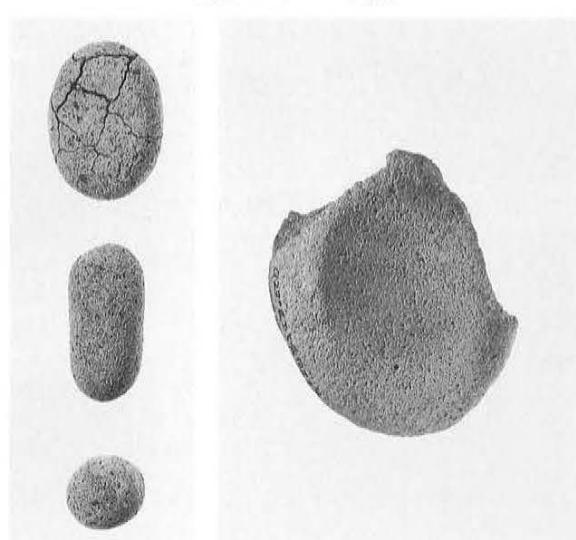
打製石斧・石匙 B類



スクレイパー B類



凹石



磨石・石皿

図版38

三本木III遺跡



H-2号住居址出土の甕



H-2号住居址出土の坏



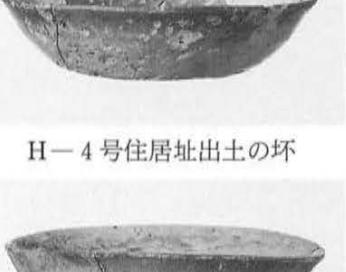
H-2号住居址出土の坏



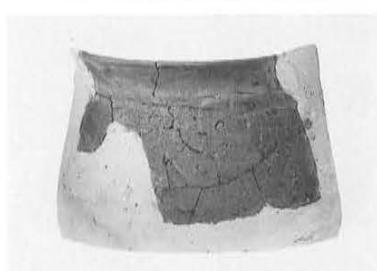
H-3号住居址出土の甕



H-3号住居址出土の坏



H-4号住居址出土の坏



H-4号住居址出土の甕



H-4号住居址出土の坏



H-5号住居址出土の坏



H-5号住居址出土の甕



H-5号住居址出土の坏



H-5号住居址出土の坏



H-5号住居址出土の甕



H-5号住居址出土の坏



鉄滓

平塚遺跡

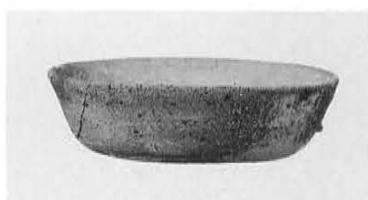
図版39



K-1号墳出土の壺



K-1号墳出土の壺



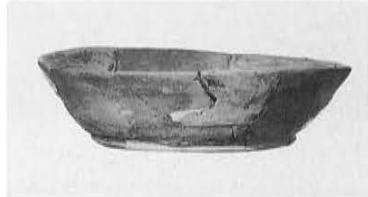
K-1号墳出土の壺



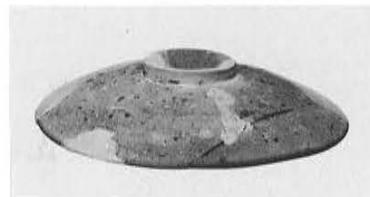
K-1号墳出土の壺



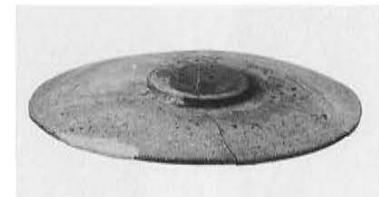
K-1号墳出土の高台壺



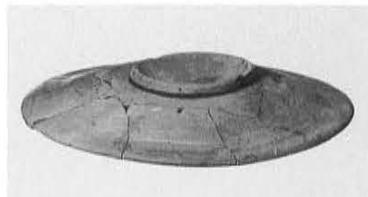
K-1号墳出土の壺



K-1号墳出土の蓋



K-1号墳出土の蓋



K-1号墳出土の蓋



K-1号墳出土の長頸壺



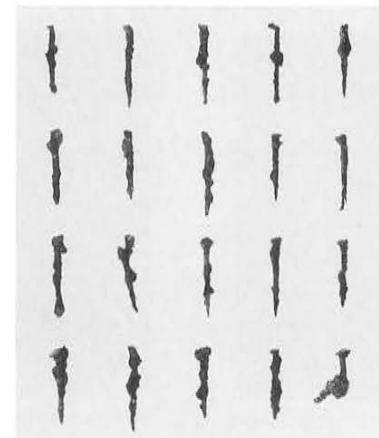
K-1号墳出土の短頸壺



K-1号墳出土の短頸壺



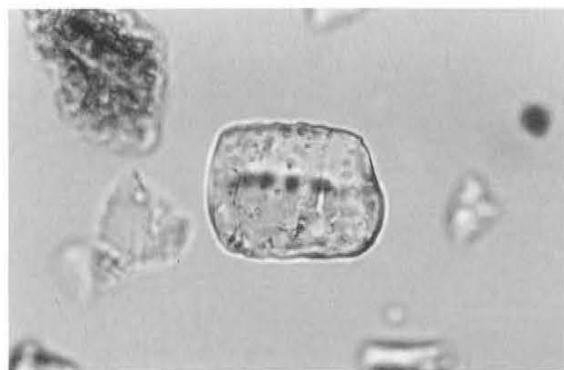
K-1号墳出土の長頸壺



釘

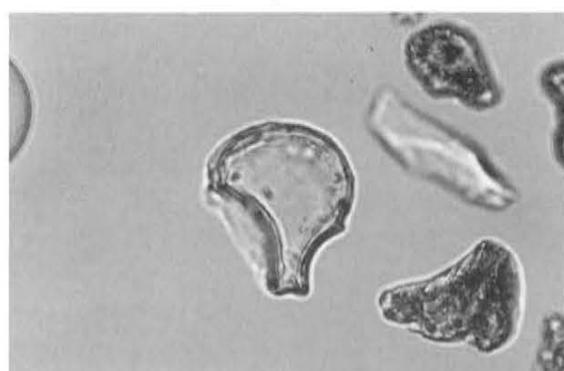


砥石



1 イネ

D区中央



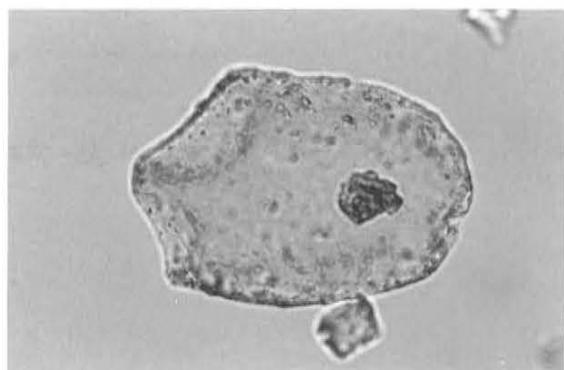
2 イネ

F区D-2



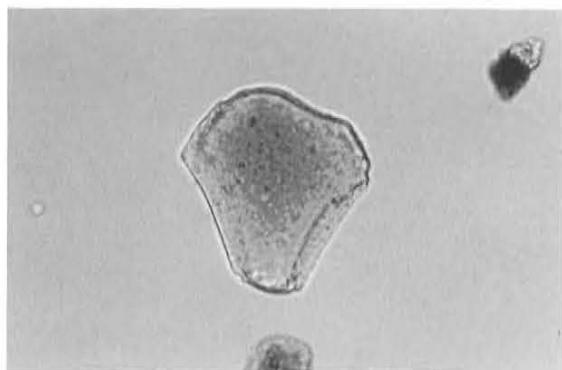
3 オオムギ族 (穎の表皮細胞)

D区中央



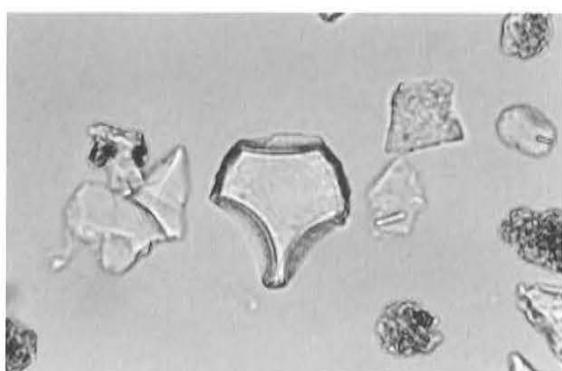
4 ヨシ属

D区中央



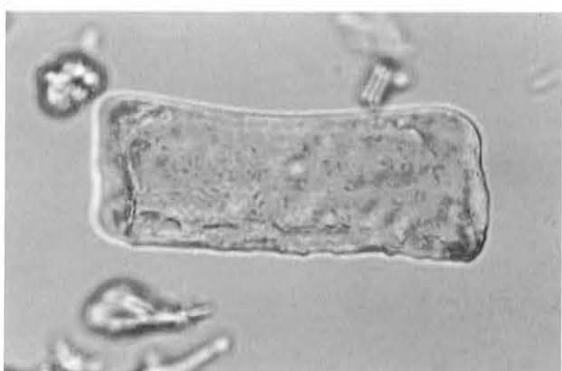
5 ウシクサ族 (ススキ属など)

F区D-2



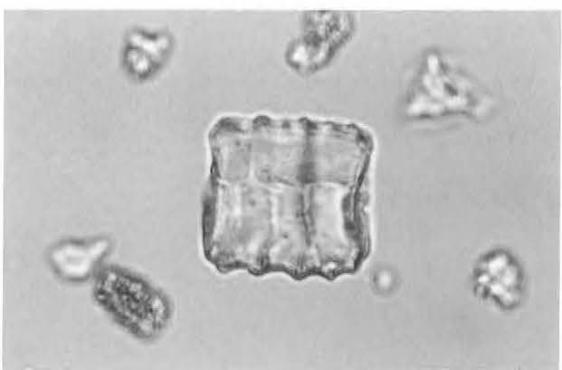
6 シバ属

F区D-2



7 キビ族型

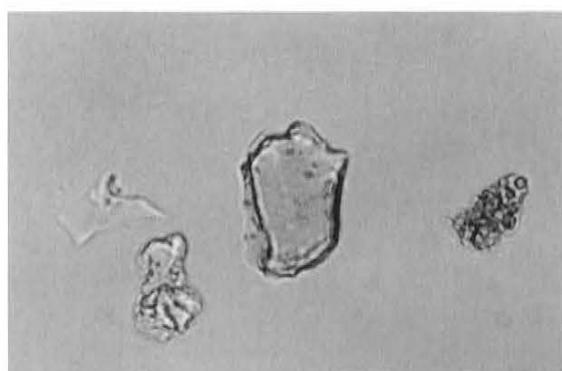
D区中央



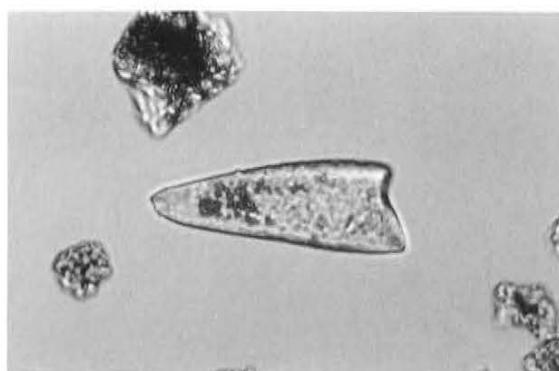
8 ネザサ節型

F区D-2

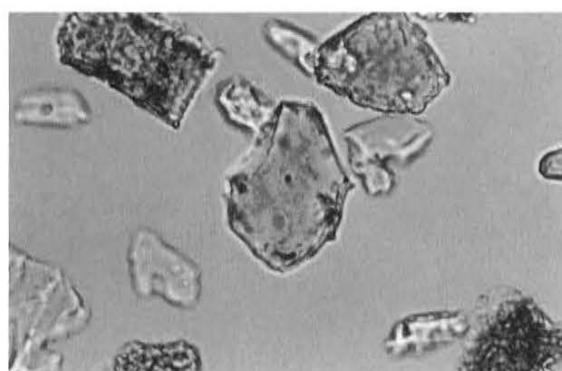
0 50 100 μ m



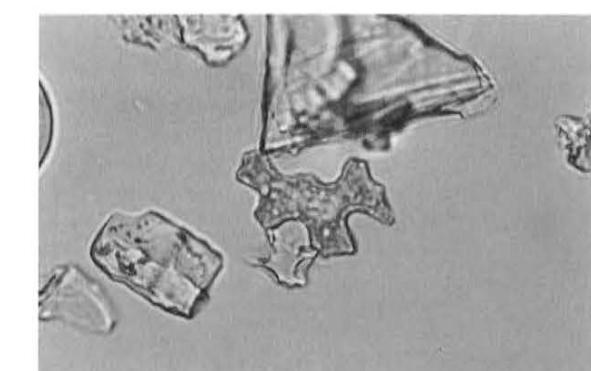
9 クマザサ属型



11 表皮毛起源



10 マダケ属型



12 はめ絵パズル状 (スナ属など) D区中央

0 50 100 μ m

落合II遺跡の花粉・胞子



1 スギ



2 スギ



3 シダ植物单条植物

— 30 μ m

発掘調査報告書抄録

ふりがな	おちあいにいせき ひらつかいせき さんぽんぎにいせき さんぽんぎさんいせき
書名	落合II遺跡・平塚遺跡・三本木II遺跡・三本木III遺跡
副書名	群馬県人工飼料センター建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	大工原豊・関根慎二・金井京子・早田勉・杉山真二・金原正子・磯貝基一
編集機関	安中市教育委員会
編集機関所在地	379-01 群馬県安中市安中1丁目 23-13
発行年	西暦1996年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 . / "	東経 . / "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おちあいにいせき 落合II遺跡	あんなか しさぎのみや 安中市鷺宮 あざきんぽんぎ 字三本木	102113	G23A・ G23C	36°17'18"	138°52'30"	19941003- 19941104	515m ²	人工飼料セン ター建設
ひらつかいせき 平塚遺跡	あんなか しさぎのみや 安中市鷺宮 あざひらつか 字平塚		G23E・ G23F	36°17'15"	138°52'45"	19941019- 19941202	656m ²	
さんぽんぎにいせき 三本木II遺跡	あんなか しさぎのみや 安中市鷺宮 あざきんぽんぎ 字三本木		G23C	36°17'14"	138°52'35"	19941007- 19941209	1,035m ²	
さんぽんぎさんいせき 三本木III遺跡	あんなか しさぎのみや 安中市鷺宮 あざきんぽんぎ 字三本木		G23D	36°17'22"	138°52'40"	19910415- 19910618	814m ²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
落合II遺跡	その他	縄文前期前半・中期後半	土坑3 陷穴2	土器・石器・礫	
	古墳	古墳時代終末	古墳1	なし	
	その他	平安	溝2	なし	
平塚遺跡	散布地	縄文前期前半・後半	なし	土器・石器・礫	
	古墳	古墳時代終末	古墳2	土師器・須恵器・鉄器	
	その他	江戸時代(1783年)	烟址1	砥石1	
三本木II遺跡	集落	縄文前期前半・終末	住居址5 土坑21 陷穴1	土器・石器・礫	集落は前期前半が 中心。
		中期初頭・終末	集石2 壱穴状遺構2		
	集落	9世紀前半	住居址1 建物址1 柱穴群1	土師器・須恵器・台石	
三本木III遺跡	集落	9世紀前半・後半	住居址4 柱穴群1	土師器・須恵器・鉄滓	工房址の可能性あ り。
	その他	中世	溝1	なし	
	その他	江戸時代(1783年)	烟址1	なし	

落合 II 遺跡・平塚遺跡
三本木II遺跡・三本木III遺跡

—群馬県人工飼料センター建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行日 平成8年3月25日
編集・発行 安中市教育委員会
群馬県安中市安中一丁目23-13
印 刷 朝日印刷工業株式会社